

糧にも支へを覺えるしがない身の上、ア、寧ろその事、このまゝ死んで了へば、浮身を見ずに濟うもの、まゝにならぬは浮世とは、ほんにこの身に詰まされて……」とおろ／＼なみだ、

節「折しも通る屑屋の聲、屑いー、屑いー、屑いー」

地「お貞さん、何か賣るものはないかと、四邊をさがして取り出したのは、良夫十次郎がまさかの時にと秘め置きし一着の鎧これはどうでも賣ること出来ぬ、何か無いかとまた捜す、何にもない、ハテ困つたとまたさがす、見付け出したのは自己が母より賜はりし、生命についての紀念の弁、お貞「屑屋さん、く、」

屑屋「へエー、此方までございますか、お貞「ハイ、此品を買つて下さいまし」と取り出す弁「へエー此品でござりまするか」と思はず見合す顔と顔。

お貞「オツ貴君は勝田さまではござりませぬか、屑屋「ウム、さう仰しやるは、間の御内室ではござりませぬか、お貞「お姿こそ變れ、まさしく新左衛門さま……御姿に事變へて、屑屋とは、如何なるわけでござりまするか」と不審顔、新左衛門も怪訝な顔

新左「まことにお耻かしようございますが、その日の糧に逐れまして、耻かしながら屑屋とまで成り下り、世に耻を曝して居ります」と

節「忠ゆへ耻を忍び駒、勇む心を押し静め、敵をさぐる手策とて、身を屑屋とまで押し下す、勝田の心を有りがたし。

地「新左衛門は病みほうけたお貞を一目見るよりも、かねて十次郎にも忠義の心厚く妻を捨て、子を顧みず、一圖に亡君のために盡す、尊き心志嬉しいが、さても哀れは妻や子が、路途に迷ふのいちらしさ、木石ならぬ新左衛門も、ふかくお貞を哀れに思ひ、新左「時に御内室、ではない奥さま、モウ今は昔の勝田新左衛門武堯でなく、屑屋の新兵衛、此品をお拂ひになるのでござりまするか、お貞「ハイ、まことにお耻かしようございますが、飛んだところをお目に掛け面目次第もござりませぬが、どうか今日のことはお流しなされて下さいまするやう、新左「イヤ流しては賣へギが取れませぬ、屑屋は買ふのが商賣でござります、精一杯買ひませう、

お貞「ハイ、でも夫れでは……新左「イエー、夫れには及びませぬ」と五兩の金を

取り取して、黙止つて買込む、これも同士の家族を救ふ情けの一つ、お貞は五兩の金を押し頂き、お貞「ア、勝田さま、有りがたうぞんじまする、

新左「イエ／＼ソんなにお禮を申さるゝことはない、この筈を五兩で買へば、問屋の方へ七兩に賣ります、二進勘定二兩の儲け、私の方こそお禮を申さねばなりません、有りがたうぞんじまする……」お貞「時に勝田さま、つかぬことをお聞き申しまするが、御國許の御様子から、御一同さまはどうかおそばしなしてござりまするか、

新左「イヤ、どうもハヤ國許はメチャ／＼の騒動、お城はお上へお返上し申し、大石さまを初めとし、一家中はチリ／＼バラ／＼」お貞「エッ、ソんなら亡君のお怨をも思はずに、アノ、チリ／＼バラ／＼にお立退きなさいましたと……」

新左「イヤモウ、その當座こそ、みな力味返つて居りましたが、思へばこれも詰らぬこと、殊に敵手は高家の筆頭、トテモ及ばぬことでございます、みな／＼宜き主を撰んで、奉公いたしましたと云ふことでございますが、私は御覽の通り、不運で今に屑屋をいたして居ります、まことにお耻かしいことで……」

お貞「ソんなら赤穂の御城中に、一人の忠義な御武家はないのでござりまするか」怒りのあまりお貞さん、新左衛門の胸倉を引ツ掴んだ、

新左「ヤア痛い／＼、奥さま、痛い／＼、どうぞ許して／＼、痛い／＼」

お貞「エ、ハッ腹の立つ／＼、お前さま夫れでも武士か」グン／＼、

新左「武士じゃない、屑屋じや、痛い／＼」お貞「エ、マアこの人の意気地なしが、主君の御恩も思はずに、のめ／＼と二君に仕へやうなどは、エ、ハッ腹の立つ、／＼」グン／＼ 新左「アッ痛い／＼、堪忍して／＼」とブル／＼顫へながら、バツとお貞を突き放し、永居はおそれと五兩の金、筈取つて外面へバラリ、雲を霞と逃げ出す……」

新左「跡にお貞は身をもがき、よろ／＼よろと框のそば、庭へ轉び落ちんとする、哀れなさまをたゞ一目、良夫十次郎が見るならば、さぞや血を吐くことである……」
地「ところへバタ／＼と駈け込んで来た十太郎 十太「オッ、母親さん、どうなさりました、モシ母親さん……」と取り絶る、お貞「オッヤ十太郎か、ワッ、妾や口惜し

いく、口惜しいわいのう……」と齒を噛んで咽び入る、

お貞「コレ十太郎、能く聞いてたも、妾等母子が斯うして太い苦勞をするのも、今に良夫が故主の仇、吉良上野介を討ち取らるゝか、明日は嬉しい音信を聞くかと、夫れのみを心だのみ、惜しからぬ生命をながらへしも良夫に名譽を得させんため、夫れもモウ、今は頼みの綱の切れ果て、良夫をはじめ一家中、聞くも忌はし二君に仕へ、その身の榮耀を計らうとは、ア、さても頼みがたきは人心、妾は南部阪に在します冷光院さまに、何として申しわけのなりませう、コレ十太郎、コノ母はな、モウこの世に頼みの綱も切れ果てた、死して御臺さまに申しわけをいたしまする」と思ひ凝つてはなかく、岩をも貫徹す女の念力……。

節「病みほうけても武士の胤、お貞はよう／＼起き上り、フラ／＼フラと奥の室へ、よろけ込んだることなれば……。

地「お貞さんはかねてのたしなみ懐刀を取り出し、ギラリと鞘を拂つて見ると、夏なほ寒きものすごさ、お貞は懐刀逆に取り、南無阿彌陀佛も口の中、アワヤ咽喉笛に

突き立てんとする、十太「アレ待つて母親さん……。」と懐刀取る手に十太郎、

十太「アレ母親さん、何で死にます、待つて下され、コレ母親さん、待つて／＼」と動かせぬ、

節「ジツと眺めたお貞どの、落ち来るなみだ瀧津瀬を、止めも敢へずオウ十太郎、

地「この母はなア、とても生きては居られぬ身、生きて浮腫曝さうより、死して故主さまへ、良夫の罪をお詫いたし、冥途で御奉公がいたしたい、老先永き十太郎、其方は跡に永らへて、モシヤ父さまに逢ふなれば、母は斯うして死んだと語り、良夫を諫めて呉れますやう、今期のたのみはこればかり、ヨ、十太郎、幼ながらも母親の云ふこと、よも分らぬことあるまい、能く聞き分けてたもいもう」と云ふもおろ／＼なみだ聲、十太郎はシャクリ上げ、十太「コレ母親さま、死ぬのは否々、否でござりませ、どうぞ父上さまのお歸りまで、死なずに生きて居て下され、コレ母親さま、私や母親さんを殺しはせぬ、コレ母親さん、死ぬのは否でござりまする」と手を執つてワツと泣く、

節「オウいちらしの十太郎、父の歸るを待てよとは、此の期になつても父を慕ふか、
腸の腐つた父を、さほどまでに戀しいか、聞えぬわが兒十太郎と、胸はモヤ／＼張
り裂く思ひ、落つるなみだを拭ひもあへず、

地「コレ十太郎、母親も父さまのお歸りを、今日か明日かと待ちわびたが、モウ父上
さまはお歸りなさらぬのじやぞ 十太「エ、父上さまが何故歸りませぬぞ、

お貞「サア、お前の戀ふる父上さまは、疾うにお心變らせて、モウ御武士ではない、
たいの町人、犬にも劣つた、情ないお心に成りあそばしたのじや、母はモウ二度と父
さまにはお目に掛らぬ、十太郎、モウ觀念しや、去らばであるぞ」と突き放し、既に
斯うよと見えければ、十太郎はその手に絶り 十太「ヤレ待つて下され、母親さん、お
前さまが死ぬなら、私も死にます、父さまに逢はれぬとなれば、私は母親さまの傍に
居りたい、死ぬなら私もともに死にます、サア母親さん、私を殺して下され、私は死
にます、殺して下され」とトンと身を投げかける健氣な覺悟、

お貞「エツ、ソソならお前も死ぬと云ふのか 十太「ハイ、死にます、私やどこまで

欠

欠

數右「面白いな、オイ亭主、面白いな、しかし安心せい、金は拙者が拂つて遣つたぞ
亭主「でもマア旦那は無茶なことをなさいまするな、

數右「イヤ別に無茶ではない、當然じや、じやが亭主、この樽はモウ金を拂つたから
拙者の所有じやぞ 亭主「メツ滅相な、ソツそんな無茶なことが……」

數右「何が無茶じや、今現在に代金拂い遣はしたでないか、

亭主「ジョ串山戯云つちやア困ります 數右「ハ、ハ、ハ、面白いな、斯んな目出度いこ
とはないわ、なア亭主、一盞行かうか 亭主「メツ滅相な……夫れには及びません、

數右「ハ、ハ、ハ、マア一杯飲れ、甘いぞ」數右衛門はモウ相手が欲しくつて堪らない
傍を見ると仲間が四五人、チビく飲つて居るから、その方へ鉢を向けた、

數右「コリヤ、奴、そこに居るのは、大野九郎兵衛の下郎平内でないか、
平内「へエ、これは不破の旦那までござりまするか、

數右「ウム、平内此處へ來い、一杯飲まして遣る 平内「へエ、私共は斯うして仲間内
で、呑んで居るのが氣樂で宜うがすから……」

數右「仲間内か、平内へエ、こりやアみな大野さまのお身内で……」

數右「大野の吝嗇が、どうして斯んなに大勢の下郎を抱へ居つたか、珍だな、待て待て、ウム、分つた、すると何だな、お上の御費用で、手前の邸宅へ使やアがるんだなアノ九郎兵衛と云ふ奴は、あいつは人間の皮を被つた畜生じやぞ、赤穂一家中の面汚しちや、彼奴は犬にも劣つた奴じや、その家來となる汝達は、何とした不心得者じや耻を知れ、耻を知らぬ人間は、畜生だぞツ」と、

數右「かねて大野の九郎兵衛と、役向によつて數右衛門、恨を懐く身になれば、酒が云はずか真心か、罵言譏諷をいたされて、かゝみの酒を酌み出して、ガブ／＼／＼煽り出す、ハヤモウ眼血走りて、見るもおそろし權幕は、酒亂どころは覺えたり……」

地「數右衛門はモウヘベレケに酔つて居る、酔つて居るから呂律が廻らぬ、呂律が廻らぬから足も廻らぬ、身体も廻らぬ、その代りに眼がクラ／＼と廻る、上唇をペロリと嘗めて、グイツと下郎を睨め付けた、數右「ゲエーブツ、ヤツヤイ野郎、サツ、こゝこゝへ來いツ、酒臭れる、此處へ來せろツ」豪い威勢なので、なか／＼傍へも行けぬ

數右「來ぬかつ、來居らぬかつ、ヤイ下郎、武士たるものが盃呉れうと申すのに、

ぐづ／＼さらすとは、ブツ無禮であらう」ハツタと睨め付ける、

平内「へ、エツ、實は私ごもは、モウ大分呑つて居りますので、この上モウ呑けませぬので……ヘエ、數右「ナ、何だ、モウ呑けぬ、呑けぬまで何故呑んだ、無禮者奴ツ

いよく拙者の盃を受けないのじやなツ、平内「へエ、お受け申さぬと云ふわけでもございませぬが、何分にも御覽の通り、喰い酔つて居りますので……」

數右「何故喰らい酔つた、サア斯う云ひ出したからにや、邪が非でも呑まさにやア置かないから左様思へツ」と飛び付いて來て、數右「サツ飲め、飲まなきやア押へ付けて飲ませるぞ」結構でげすな、演者もどうか斯う云ふお客さまに逢ひたいもんで押へ付けてられて、ガブ／＼幾何でも頂きますが……、平内「ソツ夫れは旦那さま、殺生でございます、數右「何が殺生だ、武士の言葉に隨はぬ無禮な奴ツ、斯うして呉れるツ」と

數右衛門。

數右「いよく酒に狂ひたる、數右衛門は進み寄り、平内をばグイと捻ぢ伏せ、盃取つ

て口の傍、喰へとばかりブツ掛ける、ブツ掛けられて平内は、ウワーツと酒に咽び入る、そいつを取つて引ッ擔ぎ、手練の早業エイヤツオウ、表をのぞんで頭顛倒、もの見事に投げ付ける、投げ付けられて平内は、ギフーン、ウオーツと叫んだが、この世のわかれ悼まじや、そのまゝ息は絶え果てる……。

地「斯くと見た残りの下郎 下郎「ヤツ、こいつア堪らぬ、人殺しだ、ヒツ人ごろしだーッ」と氣も魂も身に添はず、バラリと表面へ躍り出で、飛ぶかごとくに駈け出す下郎、亭主は呆れて早腰ぬかす……。

節「血を見ていさむは勇士の毎、猛り狂いし數右衛門、下郎を投げて眼を怒らし、スツクとばかり起あがり、バラリと出でた表口……。

地「ヤイ待て、下郎、待てッ」と追ひすがる 下郎「ヒヤーツ、ヒツ人殺しーッ」と駈けて行く……。

節「斯くと見るより數右衛門、血走る眼ものすごく、追ッ取り刀に跡を追う、ヤイ待ち居れいと追ひすがる、大野の下郎は酒の酔、一時にさめてブル〜と、氣もたまし

ひも身に添はず、章駄天のごとく駈けて行く……。

地「下郎はそのまゝ、一目散、駈け込んで来たのは大野の邸宅、グララ〜と躍り込み大門ビシヤリと閉て切つて、御注進を呼はつたり……。

節「俄かのさわぎに九郎兵衛は、追ッ取り刀で女關口、駈け出で見れば三人の、下郎は顔の色變へて、ガタビシ〜顛へ出す、合點行かすと九郎兵衛は。

地「靜かに 九郎「コリヤ下郎、騒々しい、何事であるぞ、
下男「へエ、これは旦那さま、タツ大變でござります……。」

九郎「ナツ、何が大變だ…… 下郎「へ、エツ、實は只今斯う〜云々で……。」と一伍一什を物語り 下郎「あんまり恐かつたので、駈け込みました、今に此邸へ押し寄せてまゐります…… 九郎「エツ、ソツ夫りや大變である、何故汝達は奉行所へは駈け込まぬぞ、家來と云へど其方達は、御城の御用を承はるもの、彼の數右衛門と云く奴は、酒を飲むと随分と亂暴を働く、今にも此邸へ押し寄せなば、如何なる所業をたさんも圖られず、汝達は此邸には置けぬ、疾く出て行つて呉れッ、

下郎「ソツ夫れは旦那殺生でございます、今此邸を出やうもんなら、夫れこそこの二つとない生命を、玉なしにいたして了ひます、私どもは、旦那の御用を承はつて斯うして毎日御邸へ詰め切つて居りますから、たとひ何と仰しやツたつて、旦那の家來でさア、出て行けなんて、ソんな殺生なことを……」

九郎「殺生でも無んでも好い、汝達を此處へ置いては、余が損失を招く、汝達の生命の一つや二つ、何でもない、余が邸宅を暴かれては迷惑いたす、疾く出て行けッ」と
節「日頃の吝嗇な九郎兵衛は、金と生命を度量衡に掛けて、金をおもしといたしたる武士にはあらぬ卑しき根性、呆れ返つて口あんぐり……」

地「下郎はキツと眼を刺いて、下郎「じやア旦那何でげすかい、私達の生命なんかどうでも好い、旦那のお邸宅さへ宜けりや好いと云ふんでげすかへ、

九郎「左様じや、大金を掛けて、結構善美をつくした邸宅、數右衛門ごとき無法者に暴されちやア、夫れこそメチャくじや、金のためには替へられぬわい、

下郎「アノ生命をですかへ、九郎「云はずものことじや、モウ汝達には用はない、早く

出て行けッ、下郎「エツ、置きやアがれッ、九郎「ナツ何だぞ、

下郎「コノ強慾老爺奴ツ、生命も金には代へられぬたア、能くも吐きやアがつたな、夫れでもウヌア武士かつ、ヤイコー因業老爺奴、手前がさう云ふ了簡なら、俺の方でもつもりがあるんだ、どうせ此邸を放り出されりやア、數右衛門に殺られるんだ、どうせ無へ生命なら、這奴がやうな人非人のこの邸宅を、踏み蹂つて、メチャく打ち壊して遣るからさう思へッ、九郎「己れ憎くき雑言、今一言云つて見よ、手は見せぬぞッ、下郎「疥癬搔じやアあるめへし、何を吐きやアがるんだ、オイ兄弟、暴れて遣れッ、兄弟「合點だ、下郎「ソレツ、行けーッ」と四人の下郎。

節「五分の虫にも三分のたましひ、つれない主の挨拶に、下郎はクワツと急き込んで、どうせ殺られる生命なら、金に飽した庭園を、メチャくクチャに暴して遣れど、心を合した三人の、下郎は奥へと駆け込むを、さうはさせじと九郎兵衛は、追ッ取り刀で躍り立ち、遣らじとふさがる折からに……」

地「バタ／＼で駆け付けて来た不破數右衛門、モウ半狂亂の体で、門を破れよと打ち

叩き 數右「ヤア、大野九郎兵衛、狼藉者を隠匿うとは不埒なり、斯く云ふ數右衛門
驅せ向つたり、開門々々」と怒鳴立てる。

節「聲聞き付けて九郎兵衛は、ブル／＼と顛ひ立ち、前と背後に敵を受け、行き
も戻りもならざるに、禿頭をテカ／＼と、光るはいとあはれにて、ポツ／＼と湯
氣が立ちのぼる。

地「外面ではイキリ立つ數右衛門、聲ふるはして 數右「ヤイ九郎兵衛、開けぬか、狼
藉者を庇護ふとは不埒なり、ハヤ引きわたせ、夫れとも強つて拒むなら、この瘦門を
打ち破るぞ」と

節「云ふより早く數右衛門、鐵拳固めてヤツと云ふ、矢聲とともに大門を、ビシヤリ
と打てば這は如何に、四方に鐵を巻き付けた、頑丈づくりの大門が、グワラ／＼グワ
ツと摧かれる、ソレと云ふより數右衛門、バラリと内部へ乗ッ付ける……」

地「見ると日頃悪しと思ふ九郎兵衛が、禿頭からポカ／＼湯氣を立て、居るから、
數右「ヤイ九郎兵衛、能くも下郎を隠しヤアがつたなツ、サツ、今直ぐに此處へ出せ

いッ」とクワツと睨め付ける、九郎兵衛「目見るより、ブル／＼と顛へ上り、

九郎「這は數右衛門無法なり、何故邸宅内へ暴れ込むぞ、

數右「何故も糞もあるか、手前のその禿頭が癩の種じや、覺悟仕やアがれッ」ポカリ
ツ、拵り付ける、九郎「アツ、痛い／＼」と、そのまゝ奥へ逃げ込んで了ふ、數右衛

門はいよく猛り狂ひ、金に飽した邸宅の結構イデメチャ／＼に破壊して遣らうと、
バラリと座敷へ押し上り、襖障子は云ふも更なり、手當り次第に打ち壊し、踏む、蹂
る、破る、蹴散す、見る／＼内に邸宅中は、落花狼藉、目も當てられぬありさま、お

まけに襖へ向けて、シヤア／＼、小便を仕掛ける、見られたさまではない、夫れでも、
九郎兵衛手向ひは得せぬ、生命あつての物種と、南無阿彌陀佛も口の内、齒の根も逢
はぬ胴ふるひ、臺所の押入に、少なくなつて顛へて居る……」

節「耻辱を知らぬは武士ではない、さても大野の九郎兵衛は、主家の大事の評定に、
耻辱を耻辱とも思はずに、尻に帆かけて逃げ出し、また八十右衛門に攻められて、さ
しもの九郎兵衛おそろしく、白金と品物をば取り残し、暗にまぎれて逃げ出せし卑怯

の振舞見るにつけ、これでも武士か武士か、赤穂の御家に仇をなす、見下げ果たる人非人、末代までも汚名を貽す、哀れと云ふもおろかなり……。

地「數右衛門は思ふ存分座敷を暴れ、さてもこれから庭園じやと、バラリと縁側へ躍り出ると、ハヤ庭園には三人の下郎、ソツシヨ／＼と聲を合し、樹を引ツ倒す、枝を折る、泉水へ石を投げ込む、築山を踏みじる、芝生をはがす、それは／＼見て居られぬほどの狼藉、數右衛門之れを見て、咽喉を鳴らし、

數右「ヤイ下郎、どうした 下郎ヤアこれは旦那、大野の老爺があんまり因業なことを吐しやアがるから、表面を出りやアお前さまに殺られる、どうせ無い生命なら、邸宅内を暴れ廻つて、彼奴を叩きのめして遣らうと思ひまして……。」

數右「ウム、そりや面白い、汝の生命は助けて遣る、モツト遣れ、メチャ／＼に壊して了へ、面白い、跡はこの數右衛門が引き受けて遣はす、行れ／＼」

下郎「エ、宜うがすとも、どこまでも打ち壊して遣ります」と、
節「調子に乗つて下郎共、手當り次第に打ちこわし、ドツとばかりに鯨波をあげ、數

右とも／＼引き上げる……。

地「九郎兵衛やう／＼のことに這い出で、見ると情ないこの始末、九郎兵衛思はず泣き出した 九郎「コリヤ情ない、この小便のか、つて居る襖一枚でも、百二十兩か、つて居る、ア、何たる無法な數右衛門であるか」と、地團駄踏んで口惜しがり、齒を剝いたがあこの祭、 九郎「ヨシ／＼、この上は數右衛門奴、今に目にも見せて呉れる」と、さて翌る日となりければ……。

節「衣服を改め九郎兵衛は、御城へ出で、主君に拜顔、事の次第を申し立て、御處分あれよと讒訴する、聞かれた太守は眉ひそめ、大石良雄を呼び出して、

地「直ぐに御調べになると、審に分る、淺野侯はこの事を良雄に御相談あるぞ、内藏助は、内藏「數右衛門事、忠節堅き、得難き武士にござりまするが、酒癖のあつて斯くの次第、惜しむべきものではありませんが、國の掟は曲げられませぬ、彼一人のため、一國の政治の紊るゝごときことありましては、主君の御名譽にも拘はりますから、嚴重の御處置あるやう、願はしうござりまする、

長矩「然らば何といたすべきぞ 内蔵「恐れながら拙者の思ひまするには、彼に永のお暇あるこそ、宜しからんと思ひまする………」 長矩「然らば其方宜きに計らへッ、

内蔵「ハッ」惜しき武士ではあるなれど、國の掟は曲げられぬ、なみだを呑んで内蔵助。

節「不破を呼び出し御暇に、なりし次第を言ひ聞かす、數右衛門は之れを聞き。

地「打ち首にもなるべきと、覺悟極めて居りましたを、情けにあまるお暇は、主君の御恩と有がたく、お受けをいたして邸宅を拂ひ、すごくとして住み馴れし、赤穂の城下を跡に見て………」

節「永の暇となつたれど、つゆいさゝかも恨まずに、主君の御恩の有りがたき、身にしみくと泌みわたり、赤穂の城を伏し拜み、伏し拜みては立ち兼ねる、これぞ盡せぬ縁にて、御家の大事に馳せ付けて、誠亦を現はすきざしとは、後にも思ひ知られたり………」

地「なみだを拂つて數右衛門は、遂に赤穂を立ち退いて、江戸表へと遣つては來たが

もとより忠臣二君に仕へずとやらで、仕官ののぞみ更がない、然るに御家の變事あり主君に切腹お國は沒收、家中はちり／＼ばら／＼となり、江戸の中にもひゞきわたる

這は一大事と數右衛門、御恩に報ゆるはこの秋ぞと。

節「宙を飛んで赤穂へ乗り付け、なみだとともに仇討の、供に入れよと死をもつて、内蔵助へと願ひを立てる、さてもこれから數右衛門、主君の墓前に仕官の一條のその段は………」

◎原 惣右衛門傳 (母義死の段)

節「七重やへ、花は咲けども、山ぶきの、實の一とつだに、無きぞ、かな………しい

………きー」

地「その花も實もなき、枯木に等しき原惣右衛門元辰の母なる人が、我子を勵まするの爲に、死して忠義を盡させる、男子まさりの哀れな一段、さらばばつ／＼讀み上げ

節「散る花と、かねて覺悟の惣右衛門、御家斷絶のその後は、一人の母を養育せんと城下の町に些やかな、所帯を持ちて日々に、山科閑居の大石と、手紙の應答いたされ、仇を報ゆるその日をば、今か／＼と相待たれる、忠義に堅き惣右衛門……」

地「頃は元祿十四年、七月の下旬、内藏助から一書を受けた、惣右衛門讀み下したが眉に皺……、しばらくは打ち沈んで居られたが、やゝあつてホット一息、

惣右「ハテ、困つたことが出来たわい、この太夫の文面によるは、江戸の同士は討ち入りを急ぎ、今にも事を擧げんことであるが、マサカに太夫ごのも、去る輕擧はなさるまい……がしかし、百五十里を隔てた江戸と京都のことであるから、文書の往復では、意の通じぬことであるとして、先に小野寺十内殿、神崎與五郎ごのをお下しになつたのであるが、江戸の同士の心は堅く、今にも太夫の下向なきにおいては、江戸の同士の面々において、事を決せんと、いきり立ち居ることである、モシヤこの事バツと噂に立ちのぼり、敵に知るゝこといもあれば、彼には上杉家の附隨ある身モシモ本國にでも迎へ取つては、臍を噛むの悔ならん、ハテ這は容易ならぬこといも

である未だ大學ごの、御處置も定まらざる今日、去る事のありたるときは、太夫をばじめ我々が、今日までの苦心も、みな水の泡となる、ハテ、何として……」

地「惣右衛門は當年五十と二歳、御主君御在世の頃は、足輕頭を勤めし、思慮ある武士、心は内藏助と同じである、世を欺き敵をくらまし、そして隙を得て亡君の仇を報ひたいと云ふ、遠き謀を運らして居るので……今内藏助からの手紙を受け、心を千々に碎きつ……、惣右衛門はキツと思案を極めたことで、

惣右「モハヤこの上は猶豫はならぬ、これから京都へのぼり、萬事を太夫と相談いたし、事宜に依れば、拙者江戸を下つて、太夫の心のあるところを、同士の方へ申し述べ、兎も角も打ち静めん、ウム、夫れに上越す分別はない……」と、

節「イザ出立となるならば、跡に残りし母上が、さぞやさびしく思されん、もごより斯うと打ち明けなば、母も喜び在まさん、左は云へ同士の面々は、親兄弟にも打ち明けぬ、誓紙血判したことなれば、我から盟を破りもならず、ハテ何として母上へ、お暇いたして然るべき……」

地惣右衛門は、忠義心であるかはり、また孝心にも深い、自己が京都へ出立ならばさぞかし老年の身に心さびしきことであらうと思ふと、どうやら鋒先も鈍りさうになつて来る……、思案極らず惣右衛門は、そのまゝ母の部屋へとまゐりまして、

惣右「母さま、御様子は如何でござりまする」と挨拶する、母は脇息に凭り、何か書見をいたして居られる、母「オツ、惣右か、日々の孝養、妾は嬉しく思ひます、

惣右「コレは母上さま御挨拶痛み入ります、兎角に多用にまぎれまして、御伽も自由ならず、お耻かしい次第にござりまする、母「ハイ、夫れにしても惣右衛門、御

主家断絶以來、御身は日々何事をなされてじやな、惣右「ハイ、別に……、

母「何事もいたしては居らぬのか、惣右「ハイ、」

母「コリヤ惣右、お前、御主君が江戸の御殿に、吉良ごの、ために御恥辱を受けたま

い、その上、御切腹あそばしたを、お前残念とは思はぬか、御前の御無念のほどが、

どのやうであらうと、お前、何とも思はぬのかツ」

惣右「ハイ、別に……、母「何ツ、別に……ウソ、そんならお前、君辱められ

て臣死すと云ふことを知らぬのじやなツ、惣右「ハイ、ハ、ハイ、別に……」惣右

は別に……で押して居る、母は齷を剃き出しながら……。

母「コレ惣右、サツコ、へ出や、云ふことがあるツ、

節「云ひつゝ立つて母親は、佛間より取り出したる良夫の位牌、押しただいて惣右

に向ひ……、コリヤ惣右、母親じやとて、能くも蔑り居つたな、サツ、この御位牌

に向つて、何と云ひわけあるか、コリヤヤイ惣右、妾はお前を不忠者に育てはせぬぞ

忠義は武士の魂であると、かねと申し聞せてあるではないか、今主家の大變に臨み

おめくと城をわたし、剩さへ家中はちりちりばらく、その時からしてこの母は、

モウ腹が立つて……ならぬのじや、五萬三千石の浅野の御家に一人の眞の武士のあら

ぬかと思へば、一家中の恥辱のみではない、亡君のお恥辱である、之れを思へばこの

母の、一日も早くこの暇が頂きたい、生あればこそ、己がやうな不忠もの、母と云は

れ、世の人に後ろゆびを指れぬのじや、惣右、其方の情なくなり居つたばかりに、こ

の母はな、死んで亡父に顔向けがあると思ふか、アノこゝな不孝者、不忠者奴ツ、サ

「つ、たつた今から心を入れ替へ、たゞ一人にても介意はぬ、亡君の御鬱憤を晴させま
ゐらせよ、左なくばモハヤ子ではない、親ではないぞツ」と、
地老の眼からはボロ／＼、火のやうな涙を滾し、口を極めて言ひ罵ります、聞いた
此方の惣右衛門……」。

「ヤレ母上よ待ちたまへ、御年老された御身の上、仰せはさら／＼無理ならねども
打ち明されぬ胸の中、親兄弟や妻子にも、隠すはかねて盟約に、血判いたせしことな
れば、許させたまへ母上と、口に云はねど心では伏し拜み伏し拜み、差し俯向いてぞ
居たりける……、母は尚ほも膝り乗出し、母「コリヤ惣右、コレほご云ふに、お前何
とも云はぬのは、この母の云ふことが分らぬのか、サツ、どうじや、勘當仕やうか、
云ふことを聞くか、サツどうじや。」

母「母は一擧に事を決めやうとする、老の一轍、惣右衛門はたゞ差し俯向いて居られ
たが……、やゝあつて顔を上げ、惣右「母上さま、まことに御道理なる仰せではござ
りまするが、何分にも吉良家は高家衆の筆頭、殊に上杉と申す大身が、後楯と相成り

居りますれば、なかく持ちまして、仇討などは思ひも寄らぬことでもござりまする
また家中も斯く放れ／＼と相成りましては、事を談ずるにも音便を得ず、拙者とても
御亡君の御恩を思はぬでもございませぬが、トテも一人や二人にて、事を圖らうなど
、思ひも寄らぬことでもござりまする、まづその時節を待つよりいたし方が……、
母「何ツ、では仇討の心はないのか……、」

惣右「ハ、ハイ、全く及ばぬことでもござりまする、及ばぬと知りつゝ、事を行ふは、コ
レ匹夫の爲すことでもござりまする、母「ヤア、ツベコバと体の宜い言ひ分を仕やるな
汝がやうな卑怯な精神では、仇討などは思ひも寄らぬ、モウ、云はぬ、モウお前には
合はぬ、お前のやうな卑屈な、腐つた根性者を、今日まで天晴れ武士であると思ひし
は、妾が一生の誤失じや、亡き夫に何と申し譯があらう、チエツ、腹の立つ不孝者、
不忠者奴ツ、何としてこの腹が……」と、

節「怒りの眼母親は、良夫の位牌を取るより早く、我子の袷髪引き据へて、丁々發止
丁はつし、腕も折れよと打ち叩く、怒りの咎は身を切らる、切なき思ひ惣右衛門、ヤ

レ待ちたまへ母人ど、云はんとせしが待てしはし、云ふてはならぬ盟約の、云はで叶はぬ苦しきは、五臟六腑を絞らるゝ、胸の早がね火のごとく、亂れ亂るゝ惣右の心情
 地「惣右衛門は母の咎、打たれながらも抵抗はず、打たるゝまゝに五十男、心で泣いて目に泣かぬ、その苦しきは如何ばかり、如何に忠義と云ひながら、老年の母を欺き一言の辨疏もなされぬ、ア、是非なきことであると思ひましたが、モシ母上さま、モウ御免下さりませ、御折檻肝に銘じて、徹へましてござりまする……」

母「徹へたとは何か、御主君のために……」
 惣右「盡したいとは思ひますが、夫れも手前一人にて、出来ることとござりませねば、何れはそれ／＼相談のいたし……」
 母「ハヤ／＼手緩ひ／＼、主君に忠義を盡すのに、何人さまに相談することのあらう、我さへ心を決しなば、夫れで宜いじや、惣右「夫れがでござりまする……」
 母「エツ、この期に及んで、兎角のいひわけ、卑怯であらう、コリヤ惣右衛門、モハヤ其方が、まことの武士となるまでは、對面はせぬぞ、能く思案のせい、不孝者奴がツ」。

母「母は怒りに打ち任し、よろこびながら次の室へ、睨め付けながら立つて行く……」
 地「跡見送つて惣右衛門、起き直つて母の影、伏し拜みつゝ、落ち來るなみだ、止めも敢へず……」
 居ますがごとくに 惣右「モシ母上さま、お許されて下さいませ、御老人を、斯くまで御怒らせ申し、一言の御言譯をいただいたされぬのは、身を切るより辛い、切なき思ひでござりまするが、かね／＼同士と申し合し、他言一切出來がたく、わざと御折檻を受け申しました、モハヤ、今更ら何とも申し上げやうがござりませぬが、今にも本望達せしとて、再び御顔を拜せんこと、思ひも寄らぬこととござりまする、さればこれがこの世のお永訣にならうも知れませぬ、ア、母上さま、お名残惜しうござりまする……」
 とジーツと後かげを見送つて居る、心の内は暗である……」
 地「惣右衛門は一言名残が惜しみたと思ひますが、モウこれも叶はぬ、残念ながらこの上は、一旦京都へ駆け上り、太夫に様子を聞きし上、兎に角處決せんものごと……」
 やがて自己の部屋へ引き取り、身支度をいたしながら、下女のお綱を呼び寄せて、

惣右「コリヤ綱」 つな「ハイ、何でござりまする、」

惣右「拙者はこれより京都まで立ち越さねばならぬ處用が出来たで、これより出立いたすことである。つな「左様でござりまするか。惣右「ついてはつな、御老人の母上のこと、拙者留守中は、萬事其方拙者に成り替り、御小用を勤め呉れるやう……………」

つな「ハイ、決して御心配あそばしまするな、キツと私がお仕へまをしまするでござりまする。惣右「では萬事頼み入るぞ」と。

節「下女のお綱に母のこと、頼んで置いて惣右衛門、これがこの世の見をさめか、健康で居ませよ母上さま、今に江戸より報知あり、吉良の邸宅へ打ち入りの、その人数に惣右衛門、加はりあれば母上さま、その時御怒り解かせられ、勘氣を許させたまへや……………」と。

地「心に念じ祈りつゝ、旅の支度もそこゝに、母の膝下を放れまして、京都は山科なる、大石の隠家へと遣つて来る直ぐに座敷へ通される、惣右衛門は一別以來の挨拶をなし、惣右「太夫どの、御文面によりますると、江戸の諸士が……………」

大石「されば、その義につき、拙者もよほご苦心まかり在るが、拙者の本意は仇討よ

りも、大學さま御赦免の上、淺野家がたとひ一萬石にても、お取り立てあるやう先に御上使へ御願ひ申せしこととござるが、夫れなる安否の分るまでは、如何にもいたして江戸の同士を喰ひ止めたさ、夫れゆへわざ／＼御身をお招き申したのでござる……………」

惣右「左様でござりましたか、しかし江戸には彌兵衛どのなり、且老年の方も在られますれば、ヨモ仕損じはござるまいかと思ひまするが……………」

大石「イヤ、夫れは表面向のこと、内實彌兵衛老爺のごときも、既にその列に加はり今拙者立ち越えざるにおいては、如何なる事に相成るやら分り申さぬ、もど／＼こたひの血約によるときは、誰一人として自由勝手の働作を許さぬこととござるが、何分にも血氣盛んな武士であるから、我々斯く考慮しつゝあることで、この心を存じ申さぬじやで、音信この事のみを報せまゐる、夫れについて御身の御意見承はり度さ、夫れでわざ／＼御迎へ申したるでござる。惣右「マア左様でござりまするか、シカシ太夫どの、御意見は如何でござるな……………」

大石「左れば、拙者において、未だその時節の早きものと考へ居りませすが、御身の御意見は……………」

惣右「拙者においても、太夫ごのと同じ心でござりまする、もと／＼這度のこと、太夫の命令け通り、何事をも背くまじと、誓ひしことでござれば、今更ら單獨に事を起さんなどは、思ひも寄らぬことでござりまする、

大石「夫れについて惣右衛門ごの、こたびはいよく御身が御出馬を願はねばならぬ義でござるが……惣右「夫れは何事でござるな、固、最初より、死をもつて誓ひしもの、水火の中も厭ひ申さぬ、大石「實は江戸の同士から、拙者に早々出府いたせよ、

來る十月までに出府せざるにおいては、江戸の同士において、一舉に事を決し、萬一討ち洩すその時は、亡君の御墓前において、腹搔ッ捌いて相果てんと、既に堀部安兵衛を筆頭に、きびしく申し込んだことでござる、

惣右「さては去る過激しきことを……大石「惣右衛門ごの、能く御勘考下されい、萬一も左様のことのあり申しては、注意ふかき上野介、打ち洩すは定のこととござる徒らに江戸をさわがし、尙亡君の御耻辱となるのみか、却つてお上の憎しみを受け、今閉門謹身中に在らせらるゝ、大學さま御赦免の義にも及ぼし申し、われ／＼當初に

盟約いたせしことは、みな水の泡となり申す、惣右衛門ごの、拙者の心痛いたすのは即ちそこを云ふのでござる、右「なるほど……、

大石「最も、この事につき申しては、拙者一應江戸下向いたしたいと思ふのでござるが、惣右衛門ごの……」と、

地「内藏助は四邊を見廻し、カラリと障子、襖を明け放す、四方山なる山科の閑居：節「蒲團着て、寝たる姿や東山、西山も尙ほ手の内に、見ゆる眺めの静閑な住居、あたりには人家あらざれば、人の寄り來る氣配のすれば、直ぐに夫れぞと吉良家の問者：地「内藏助はズーツと戸障子を明け放ち、座敷の中央に碁盤を置き、夫れを中に圍んで對向ひ、注意ふかき計ひは、寸分の隙とてもない、惣右衛門は之れを見て、舌を捲いて感心する……内藏助は石を取り、まづ盤面に打ちながら、

内藏「惣右ごの、拙者一應出府のいれし、彼等に心腹を語りたきはやま／＼でござるが、今情なきことには、來客ありとあれば、斯くのごとく、世間体を繕はねばならぬ哀れな破目と相成り申し居るので……惣右「其は何故でござりまするな、

大石「別儀でない、江戸は吉良家から、きびしき問者が京都へ入り込み、拙者等の動静を……」惣右「エツ、然らば仇の間者が……アノ入り込んで……」

大石「叱ッ、静かにされい」と石をバチ／＼「三名の武士が入り込み、日々我等が行いを、監視いたし居りますで、今拙者が江戸出發と聞くなれば、夫れこそ却つて敵の守をきびしくさせ、到底も討ち取ることなど、思ひも寄り申さぬ、されば今良雄の身は、籠の鳥のごときもので、如何な拙者も、ほと／＼困却り入り申してござる」と地「腹心の惣右どの、ありし次第を物語る、惣右衛門は聞くこゝろ／＼に打ち驚き、太夫の苦心を思ひ遣り……我々何事をも知らず、居るは、まことに勿体ないとも思はれて、惣右「さては去ることござりましたか、まことに御心勞のほど察し入りまする夫れについての御意見は……」大石「されば、今の場合、拙者一步も動きの取れ申さぬ破目に陥り申したで、モハヤ年内に出府のほどは覺束なし、については先には小野寺神崎、前原など、さし下し申したが、なか／＼制し切れぬ彼等がいきほひ、このまゝ、打ち捨て置くときは、如何なる椿事出来に及ぶやも圖り申さぬ、そこでこたびは是非

御身をわづらはし、お下りが願ひたいと……、

惣右「左様でござりまするか、斯かる大任を、身不肖なる拙者にお任せ下されし段、過分至極に存じまする、この上は身を粉に碎き、江戸の諸士を宥め申しませうから、御安心下さいまするやう……」大石「では何分にも御盡力頼み申す、

惣右「キツと身に引き受けて宥ませう、大石「ウム、夫れ聞いて、大きに安堵のいたしたことでござる、惣右「然らばこれより直ちに……、

大石「イヤ、左様に火急では、また却つて世の疑ひを引き申す、兎角は拙者の出府は十月と申すことござるから、まづ九月にも入つて、おもむろに御出立の下されたい、惣右「左様でござるか、大石「まづ夫れまでは矢張御身は、赤穂に御歸省あるやう願ひたい、いよく出發の事ともならば、拙者より御文通申しませうから……、

惣右「左様か、然らば一先づ引き取り申しませう、大石「ごうか左様にねがひたい、

前「注意に注意をかさねたる、太夫の計ひ惣右衛門も、ふかき慮にかんじ入り、暇を

告げて京都を跡に、母の故郷へと歸られる。

地「惣右衛門は心ならずも大石に別れを告げ、母の故郷赤穂の詫住居へと歸つて來るもどより母は怒つて居られるから、おそろしく母の部屋の闕ごし、兩手を支へて、

惣右「ハイ母上さま、只今立ち歸りましてござりまする」母はジロリと打ち見やり、

母「オツ、惣右か、歸つたとは、何處へ歸つた、この家は母の家、主に離れた汝には家は無いはずじや、また一旦家を出でながら、のこく歸つたとは何の痴言、さきに

この母は何と云つた、眞の武士になるまでは、對面叶はぬと云ふたでないか、夫れとも亡君の御恥辱を晴しまゐらせて、歸つてまゐつたるか、どうじや、惣右……」

地「母は相變らず堅いことを云ふ、これには惣右衛門グウの音も出ない、差し俯向いてダンマリの体……母はニツコと打ち笑ひ、

母「これだけ云はれて、汝は耻かしいとは思はぬか、口惜しいとは思はぬか、何とか云へッ 惣右「まことに一々御道理でござりまする、

母「たゞ御道理では分らぬ、亡君御最期の御無念を押し量りまゐらすると、女の妾で

も口惜しうて、瘦せた肉でも跳るやうじや、然るを御主君より鴻恩を受けた武士の身として、汝やア何とも思はぬのか、コリヤ、ヤイ、惣右衛門、犬も三日飼へば三年の恩を知ると云ふでないか、恩を知らざるは畜生にも劣りしものであるぞ、武士ではないぞッ」とたゝみかける。

節「主君最期の無念さを、思へば胸が裂けるよに、悲憤のなみだはらくと、惣右は疊に喰ひ入つて、聲を忍んで血のなみだ……」

地「母は眼を血走らせ、母斯うまで云はれて發憤ぬは、サテハモウ惣右、モウ汝の心は腐つたな、鷹まで腐らし居つたな、モハヤ面を見るも汚ららしい、疾く彼方へ行け疾く立ち去れい、

節「身を頼はして母親は、それか眞意か知らねども、耻ぢしめ、勵まして、一分の隙も與へざる、義士の母にはすぐれた丈夫、男まさりと知られたり……」

地「惣右衛門は、何と云ひ解く術もなく、悄悄として自己の部屋へ引き取つたが、根

が孝心あつき惣右衛門、この頃の母のお怒り、一にこの身をはげまし下さる厚き御心

とは云へ、モシヤ御身体に御觸りがありはすまいか、モシヤ御病氣に罹らせられはすまいかと、たゞ夫れのみが心にかゝり、どうか御無事であれかしと、やさしく心に念じて居る或る日惣右衛門は部屋にあつて、何事かを考へ込んで居る、ところへ下女のつなが つな「エ、旦那さま、お手紙がまわりました」と差し出す、惣右は受け取つて読み下し 惣右「さてはいよく時節到来、出府せよとのことであるな、ヨシ、この上は一時も早く江戸へ下り、諸士に會見いただきではなるまい、では一寸母人に……」

節「暇乞をばいたさんと、母の部屋へと遣つて来る、

地「御機嫌は如何であるかと、恐るゝ伺ふと、嬉しや、今日はニコニコと、御機嫌の体……」

エ「母上さまへ惣右衛門、お願ひ申したき義がござりまする、

母「何じやな、大方いさまを呉れと云ふのじやらう……」

惣右「エツ、まことに恐れ入りますが、實は御年老の母上お一人を残し、斯やうなことを申しましては、孝の道に缺けまするが、少しく大石ごのと申し談ずることのあ

りまして……」母「何ツ、大石ごのと談しがある、ウム、では何じやな、大方江戸下り、仇討ちの用向であらう 惣右「ゲエーッ、ナツ、なか／＼持ちまして、左様なことではござりませぬ 母「イヤ隠すな、／＼、左ばかりのこと、汝の母じやもの、知らいでならうか、どうか首尾克く本望を達し、一日も早く亡君の御無念を……」

惣右「モシ／＼母さま、めつたなことを仰せ下さいまするな、壁に耳ある世の中、全く左様なことではござりませぬ、實は大石ごのに、仕官のことを頼み置きましたるところ、この頃に至り、やう／＼談しのまごまりまして、その用件のため、京都までまゐるのでござりまする 母「左様か、ソレなら夫れで宜い、がしかし旅立いたすのであれば、何處に如何なる敵……」の……」 惣右「エーッ、

母「イヤサ、敵のあらんも圖られねば、路次に氣を付け、眞先がけて乗り入るやういたさねば成りませぬぞ 惣右「ハ、ハイ 母「決して母ありと思ふなよ、年老つたこの母あるゆへに、兎角に鋒先の鈍りしことなどありては、母たるもの、道が立たぬ、能くこの事に心を用ひ、決して母ありと思ふなよ、

惣右「何事かは存じませぬが、大切なる母上さまの御教訓、有りがたうぞんじまするが、シカシ、さほごに仰せあそばすほどの事柄ではござりませぬ、ほんの京都まで参りますので……母「サア、そこじやて、たとひ近間の京都でも、一步踏み出せば旅は旅、よく／＼その事に心を掛けて……卑怯なことを仕て呉れぬやう……」

惣右「ハイ 母「母がこれだけ言ひ聞かせば、モハヤこの上云ふことはない、心靜かに出立のせられい 惣右「ハイ、有りがたうぞんじまする。」

節「さては様子を母上が、知られしことかお教訓の、その端々に現れて、勿体ないぞ有りがたなみだほろ／＼と……」

地「惣右はそのまゝお暇申し、座を立たうとするのを母親は、ヤレ待て悴と呼び止め旅をすると云へば、一步でも百里でも、それに異りはないはずじや、旅先の幸多からしめんため、祝のさかづき。且つまたこれが永訣の盃どもならうから……」

惣右「エツ、何と仰しやいます 母「イエサ、別れとあれば首途の盃、目出度う祝はして出立するやう、惣右「ハツ、何から何まで、母上さまの、お心添くださいまして、

有りがたうぞんじまする。」

地「やがて下女のおつなが、銚子さかづきを持つて来る、母は冷酒を一口呑んで惣右に献し……惣右、サツ、母の盃、清くお受け、受けて首途を肩よくして下され、サツ……」 惣右「ハツ、ハイ有りがたうぞんじまする」と

節「受ける手先はブル／＼と、顫へながら押し戴き、心ありげな母親の、仕ぶりに夫れと眼付けど、さて明さまには云はれぬ仕誼、心に泣いて惣右衛門、コレがこの世の永訣かと、呑む冷酒さへも咽喉元を、通しかねしをやう／＼に、涙とともに呑み乾し………て盃を母に献上しながら 惣右「ハツ、母上さま、御心添の御盃、有りがたう頂戴いたしましたござりまする、失禮ながら御返盃を……」

母「ウム、呑んだか、ヨシ／＼、夫れでは返盃受けませう……」と盃を受けて半口呑み、残りを惣右衛門に献しながら 母「コリヤ惣右、

惣右「ハツ 母「この盃を受けてたも、今母が半口呑みしその残り、これぞ母が今世のいとま、末期の水と心得て…… 惣右「エツ、ナツ何と仰しやいまする、

母「サア、明日をも知れぬ母の生命、生ある内に其方に、末期の水を看ませるのじや能く心せよ。惣右、コレは母さまのお言葉とも覺えませぬ、目出度き首途に、いまはしい、末期の水だの何だのと、左様なことは仰せ下さいませぬやう、母「イヤ、左様でない、人間は老少不定、老いも若きも無常の風の吹くならばそのまゝ、萎む浮世の花、兎かくに武士はふだんにおいて、その心得が肝要であらうぞや。惣右「でもあまりにお情ないお言葉でござりまする、母「情けないとはこの母の云ふことじや、忠義の心の薄らぎて、今更ら主取なさんと云ふ汝の心、母はモウ愛相がつきた、しかし今世での永訣と思へばこそ、斯く盃を取らすのである、夫れを兎や角申すのは、母の真心を知らぬ、不幸ではないか、サツ、モウ好い、好いから明日はゆるく出立いたせい、惣右「ハイ、有りがたうぞんじまする、

節「男まさりの母親が、教訓へる言葉は千鈞の、重味のあるか惣右衛門、胸も張り裂く有りがたなみだ、おろくとして起ち上る、景は死に就くごとくにて、哀れと云ふもおろかななり……」

地「惣右衛門は、モウ母が自己の企圖を、スツカリ眼付かれたかと思ふと、何となく身内が顔へて来る、自己の部屋へ這入つて行燈を横、机に向つて墨摺り流し、一書を母に書き遺さんと、一筆書いてはヨ、と泣き、一行書いては筆を擱き、やうく／＼に書き了り、机の上に押し直し……母上さま、どうぞお許し下さいまし、御老年を取り残し、死に就く惣右の心は暗でござりまする、大なる不孝は幾重にも、お勘辨の下さいまするやう、忠と云ふ字が無いならば、ともに御介抱申さうもの、夫れは今叶ひませぬ、どうぞ母さま許されて……」とサメ／＼と泣き入る、武士の中なる武士のなみだ、コレこそ眞のなみだなり……」

節「取らば憂し、取らねばもの、敷ならぬ、捨つべきものは、弓矢なりけり……地「さても原惣右衛門におかれては、母の厚き情に感じ入り、そのまゝ、臥房へ這入られて、明日はどうして斯うしてと、未來の事が胸に沸き、寝られぬまゝにつく／＼と考へはそれから夫れへと馳せ行きて、眼は牙へ、心は澄みて、いよく寝られぬ、四

ツも過ぎ、九ツも経ち、八ツもいつか過ぎ去つて、ハヤ七ツ近しと思ふ頃、母の居室に當つて、異形の呻吟……ウーン／＼異しきうめき聲、ハテなど惣右聞き耳立てると赤穂は太くも更けて居るから、鼠のコトンの音も能く聞える、惣右衛門ジーツと耳を澄ますと、そのうめき聲は、手に取るやうに聞えるので、ハテ怪しいこと共であるツとソツと起き上つた惣右衛門 惣右ハテ妙だわい、斯かる真夜中に母の部屋に當つて……さては連日自分に對してのお怒りのため、御持病の出られて、斯くうめきたまふのではあるまいか、何にもせよ、このまゝには捨ておきがたし、イデ御介抱を……と起ち上り。

節「母の御居室の唐襖を、ソツと開くれば這は如何に……暗にこもつた血の臭、プウーンと惣右の鼻を突く、さてはと見遣る佛壇に、香煙ゆるく立ちのぼり、亡父の影さへぼんやりと……。」

地「血糊の異臭に、まづ驚いた惣右衛門、跳り入つて臥房を見ると、這は抑も如何に這は如何に、血糊に染つて母親は、唐紅の蒲團の上、俯伏したまゝ、咽喉笛を、見事に

掻き切り息切れたりと見ゆる、孝心あつき惣右衛門、このありさまに、矢も楯も堪らばこそ、駈け寄つて母の膝……引き起しておろし聲。

惣右「オツ、這は母上さまには、ナツ何故の御生害でござりまする、モシ母上さま、ナツ何故の、ゴツ御生害でござりまするか、モツモシ母上さま……」と聲を限りに呼び生けど……。」

節「呼べど叫べど玉の緒の、切れて宇宙にさまよひし、敢へなき屍を抱きかへ、前後正体泣き崩折れし、心の内ぞ哀れなり……。」

地「惣右衛門はやう／＼に氣を取り直し、四邊を見ると枕の下、血に染まりたる遺書の、目に付いたので……オツ、コソコソヤ御覺悟の御生害か、ム、アー、お情けな

いことでもござりまする……。」と。
地「封押し切つて讀み下す、いづれはなみだど血のみにて、哀れに子をば思ふの心、一目見れば、ハヤなみだなり……。」

「過ぎし暇乞のをりから、返へすくも母ありと、思ふべからずと、申し聞け候

に、又た立ち歸り、われをどひ候事、もつとも孝行に似たる不孝なり、とかく
 く老いたる母が、世にながらへてあるゆへに、かゝるふかくを見るなれば、
 まづみづから先きへ死して、義ををしへ、武士のはぢなからんことをしめすな
 り、これも子を思ふの道なり、其方も、年五十にあまりぬれば中老なり、申す
 には及ばず候へども、町人百姓は義不義によらず、命を大切に、父母をは
 ごくむは、これ道なり、武士の家に生れては、義と恩には一命をすて、報ひ奉
 るこそ人にて候、とかく母に心ひかるゝのやうすなれば、老心のひがみにや、
 かく成りゆき候まゝ、いよゝ心をかため、亡君の御爲に、命をすてたまはる
 べく候し。

地「母より惣右衛門ごのへそこそは書かれたり、讀んだところの惣右衛門、身内を顧
 はし。

節「オツ母上さまの御教訓、今こそ胸に徹へたり、かゝる御心と知つたら、ツイサラ
 くと打ち明けて、御安堵いたさせ申さんもの、夫れも六日の菖蒲となり、十日の菊

となりたるか……」と。

地「文と屍を打ち眺め、悲歎のなみだに暮れられたが、やがてブルブルと
 ウム、今は斯く女々しく打ちなげく時機でない、母の御生害も、つまりはこの身を
 まされん、厚き御心、あだやおろかにや思はれぬ、母に犬死させないため、一時も早
 く江戸へと下り、かねての企圖の取りまかない、オツ、遅疑すべき場席でない……」と
 節「母の横死に奮い立つ、心はいよゝ堅くなり、ほどなく明ける鐘の音に……」
 地「惣右衛門は夜が明けると、直ぐに母の死屍を菩提寺へと擔ぎ込み、後世の吊ひを
 托し置き、下女のつなには暇を取らし、家財を賣つては世の人の、注意を引くと心を
 配り、そのまゝ戸を立て惣右衛門……」

節「跡に心をおく霜を、履んで出立つ惣右衛門、心にかゝる母上の、今はこの世に在
 まさず、ヤレ母上やお父上、草葉のかげから惣右衛門の、手柄のほごを御覽あれ、今
 に吉良家へ討ち入つて、首尾克く亡君の御鬱憤、晴させませう亡き母よ、亡き父上も
 御覽ませ、今日まで積みし不孝の罪、許させたまへと口の中、坂越を越してはるゝ

地「惣右衛門は、母の義死に心いさみ、草履の紐をめぐりながら、江戸を指して馳せ下る……。」

◎菅谷半之丞傳 (主従永訣の段—義母の戀慕)

まくら「四十七士の面々には、いづれ劣りのあらう筈なく、忠義の心の厚きことは、四十七士みな一致なり、されど十人十色、五人ならばゲンコ色、八人ならばバンドウ色、十二人なら一ダース色、ソんな色はない、母の自害を他處に見て、討入つたものもあれば、また子を殺して義に赴き、あるひは妻を捨て父を捨て、それは云ひ知られぬ苦患を忍び、義を立てぬいたものゝみである、さてその内でこれはまた、繼母に道ならぬ戀を掛けられ、云へば父の恥辱となる、云はねばその身を攻められる、孝と忠との岐れ道に、戀の奴の魔の這入り、飽かぬ父をば振り捨て、切なき心を知りたまふ、主君に心を明し立て、憐にあまる御暇、十と四年がその間、貧を苦しめて主君の

ため、ひそかに盡せし半之丞の、たぐひ稀なるものがたり、事永くとも何れもて、不辨舌ながら述べ立てる……。」

節「まことや戀は曲者と、古昔人の言ひたりし、言葉をこゝに假の世に、さて淺ましき戀の奴、煩悶の、犬は追へども去らざるに、菩提の鹿は招けども來ず……。」

地「世の中に戀の奴ほど恐ろしいものはない、悪鬼羅刹ともなれば、また菩薩のやうにもなる、しかしそれは戀の叶ひしときよろこび、別けてあさましきは、道ならぬ戀の路、こゝに赤穂の家中に、菅谷半兵衛と云ふ仁がある、一人の子息半之丞政利を御小姓として差し上げたが、疾く妻の死去りしより、年わかき後妻を迎へ、夫婦中も至つて睦じかつたが、これが事なく濟めば文句はないが、さて家の事は、さう甘くは行かぬもの……。」

節「戀は思案の外とは云へど、外の外あるまた外の、義理の我子に戀するほど、世にあさましき事のあらう……。」

地「後妻のお弓は今年二十八歳、半兵衛は五十に手の届く中ちいさん、半之丞は十九

歳、この三人が一つの家に起伏する、お弓は容姿はよし、品はよし、言葉づかいもひとがらに、起居動作もよのつねならねば、半兵衛老爺さん、スツカリ氣に入り、一にも二にもお弓々々と附け廻す、目じりを低げて、甚だ以つて見つともよくない、お弓はまた甘く取り入り、咽喉笛へ喰ひ入つて、大きなお唇に半兵衛を敷く、

半兵衛「ア、重たい〜」ソンのことは云はない、亭主の尻に敷かれたのは、あまり見つとも宜いものではない、半之丞は、父が氣に入つた女だから、決して粗略には仕ない、義母さま〜と能く仕へる、義母ではない姉弟のやうだとは、近所での評判、夫れでも半之丞は少とも介意はず、大切に仕へて居る……これがそも〜煩悶の、犬に追はるゝ基ぞとは、後にも思ひ知らるゝぞかし。

節「サツと吹き来る戀風は、お弓の身体を吹き荒み、さてもやさしき半さまよ……」
地「ア、恐ろしや、お弓は毎に斯う思ふ お弓「ア、良夫は今年五十の中老爺、その上何となく好かぬ男仁、夫れに引き替へこの半さん、年も妻よりズツと下、十九と云へば男ざかり、彼の色の白い、眼のバツチリとした、鼻筋の通つた、脊のスラリとし

た、髪の毛の濃い、横から見ても縦から見ても、てんの打ちどころのない好い男、妾も女と生れたからは、切めて斯んな殿御と一夜でも……ア、好いたらしい半之丞さま……」と斯んなことを思ひ出すと、モウ半兵衛老爺さんが厭でかなはぬ、顔を見るのも否になる、夫れで何歟につけて「半さま〜」と半之丞の部屋へ行つて、可訝しな目付きをする、半之丞は少とも行儀を頼さずに、義母として扱つて居るので、お弓は自刎体く思ふて居る、半之丞とお弓とのなかには、まだ高い〜、隔ての垣が立つて居る……。

節「戀に迷ふたお弓ごの、隔ての垣は何のその、鐵さへも打ち破る、一心疑つては佐保姫の、石になつたる例さへ、あるではないかこれはまた、義母を頭に頂いて、口説かばウンと云ふであろ……」

地「お弓は飛んでもない覺悟を極めて、良夫の目を掠めて、半之丞を附け廻す、附け廻されてもものがたい、半之丞はニコリとも仕ない、半之丞は或る夜、まだ宵の口、部屋の机に向ひ、書見をして居る、そこへズツとお弓さん、姿嬌をやつて這入つて

来る お弓「半さま、お勉強かの……」 半之「オツ、これは義母さままでござりまするか
 サツごうぞ」と席をゆづる お弓「アツ、モウソソなに介意うて下さるな」と、机の傍
 へピタリと平坐る、 お弓「モシ半さま、お前さまは聞えぬ方でござりまするぞ、
 半之「へエー、義母さま何事でござりまするな、拙者には分りませぬ、
 お弓「さア、夫れじやでお前は聞えぬと云ふのじや、
 半之「へエー お弓「妾はお前さんのため、太い苦勞をして居ますぞ、

半之「へエー、夫れはまことに恐れ入ります お弓「恐れ入るでは困るじやないか、お
 前の毎日々々御精が出るのを見るにつけ、モシヤ御病氣にでもならればすまいかと、
 モウ夫れが心にかゝつてならぬのじや 半之「コレは義母さま、つたなきこの身を夫れ
 ほごまでに思召し下され、身に取つて斯やうな嬉しいことはござりませぬ、
 お弓「エツ、ソソなら妾がお前の身体を思ふのが、お前さまは夫れほごに嬉しいかへ

半之「ハイ、モウ世の中に母とも云へば、貴母より外には無いのでござります、その
 大切なき母上さまが、この身を夫れほごまでに思召下さいまするかと思ひますと、

勿体なうて、なみだが滾れてまゐります……

お弓「左様か、夫れで妾もともに嬉しい、お前が喜んで呉れる顔を見るのが、妾は嬉
 しくて、ならぬのじや、コレ半之丞さまお前は妾の心が分らぬかへ、

半之「エツ、貴母のお心とは……」 お弓「妾が夫れほごお前の身を思ふて居るのに、

お前は妾の心が分らぬかへ 半之「ハイ、當日頃から、有りがたいと喜んで居りますの
 で……」 お弓「サア、そこじやて、妾の身をも思ふて呉れぬでは困るじやないかね、

半之「へエー、ごうも母さま、貴母の仰しやることは、私には些とも分りませぬ、お
 心を量りかねまする お弓「妾の心が、お前分らぬのかへ、

半之「ハイ、ごうもハヤ……」 お弓「ハ、夫れは半さま聞えぬじやないか、大抵分
 りさうなものじやないかね 半之「何をでござりまする……」

お弓「エ、モウこの仁は自烈体じやないか……」と身をじつと投げ出して下ふ。

節「心に思ひあれば……」 色外に顯はれるとかや、日頃思ひに思ひし殿御、道ならぬ
 事とは知れど、さて諦められぬが色の道とか……。

地「義母がトンと身を投げ出すに、驚かされた半之丞、少しく身体を退りまして、

半之「コレは義母さま、お加減でもおわるいものではござりませぬか、

お弓「ハイ、わるい、モウ心の中が、燃へて、いつその事に死んでも退きたい、

半之「エー、夫れはおわるうございます、お醫者さまでも呼びませうか……、

お弓「イエ、夫れはおわるうございます、お醫者では治らぬわいのう……、

半之「ではどうあそばしましたら、お宜しうございまするか、

お弓「サア、妾の病氣はな、アノ、ソツ、そのお前の心したいじやわいの……、

半之「エツ、ナツ何と仰しやいまするツ、お弓「コレ半さま、生かすも殺すも、お前の

心したいじやわいのう……、コレ半さま、お前のやうな聞えぬ方はござりませぬぞ

……、とスリ寄つて、耻かしうに袖もて顔を蔽ひ、様子ありげな嬌姿のやり様……

節「さてはさうかと半之丞、その驚きは如何ばかり、さても情なき母上よ、人の道に

も外れた心、なせまたこれが叶うてならう、ヤレ淺まし母上と。

地「半之丞は驚いて、半之「モン母上さま、どうぞお部屋へお引き取りを願ひまする、

お弓「ではお前さまも来て下さるか、半之「ハ、ハイ、私は今調べるこのありまする

で、手隙次第に伺ひまする、お弓「キツとかね、

半之「ハイ、まづ義母さまには御部屋へお歸りあそばし、宜く、お考へ下さいまし

て……、どうかマア……、お弓「妾の病氣を治して下さい下さるか、

半之「ソレは母上さま、お話が違ひまする、お病氣はどうか醫者をお呼びあそばして

……、お弓「フーム、お前は夫れはご情ない心か……、

半之「……、お弓「ハ、ア……、是非もなき……、アツ、痛タツ、ハ、アツ痛い

……、痛タツ、ハ、ハ、横腹を押へて、自病の癢でも起つたのか、その場へ倒れて

了ふ、半之「オツ、これは母さま、何となさりました、モン母さま、お氣を確かに持

なさいまするやう……、と抱き起す……、

節「抱き起されて義母お弓、嬉しやその手をグツと握り、見上げる顔に片ゑくぼ。

地「河アーんだ、馬鹿々々しい、お弓は作病を構へ、半之丞の手を握つて、ニッコリ

と笑つた、まるで成つて無い、見て居られぬ、お弓の目じりはグツと下つて、涎をダ
 ラく流して居る、半之丞は之れを見て、マ、情けないことである、眼を瞑つて了
 ふ、おゆみは荷ほもスリ寄つて お弓「コレ半さま、どうぞ妾の心の文を、推量して下
 されや、や、半さま……」としなだれかゝる、半之丞は弱つて了ふ、
 半之「モシ母さま、どうぞお引き取り下さいまし、人目がありますから、モシヤ父が
 見ましては、この半之丞、子の道が立ちませぬ、サツ、早くお引き取りを願ひまする
 ……」とハラ／＼する お弓「お前、妾が此處に居るのが、夫れほど否なのかへ、コ
 レ半さま、お前妾が否なのかへ 半之「イヤ決して否ではござりませぬが、人目と云ふ
 ものがござりまするで……」 お弓「イエ、人目などは介意やせぬ、今宵は良夫は
 奥田さまのお邸宅へお越しなされた、まだお歸りにはなるまい、切めてはゆるりお話
 なりとねえ、コレ半之丞……」 半之「夫れでは拙者甚だ困ります、いづれはお部屋へ
 参りますから、どうか一先づお引き取りを願ひまする、
 お弓「アノどうでもかへ、アツ、痛い／＼、痛タツ、／＼、」



牛之「どうもこれは困りましたな お弓「アツ痛い〜、痛い〜」と腹を抱へる、牛之「コレ義母さま、斯うしてござつては、お身体にも障ります、お部屋へ入らして、お就寝みなさいまし、サア、私がお伴をいたしまする、

お弓「アツ、痛い〜 牛之「サア、ちやつとお起ちあそばしませ、モシ義母さま……お弓「シンなら連れて行つて呉れるかへ 牛之「お伴いたしまする」と無理に起して牛之の亟、義母を部屋へと連れて行く……。

節「部屋へ歸つて牛之丞、ホツと一息せられたが、さても情なきことである、現在義理ある母人が、子として慕ふ牛之亟に、聞くも忌はし横戀慕、コリヤマアどうせう何とせう、身を捨てよ……忠孝の道を立てよと云はるゝなら、腹(切腹)も厭はぬこの身であれど、道に背いた戀の慾、どうマアこれが遂げられやう、さても菅谷の牛之亟武運につきたることなるかと、思はず吐息をいたされる……。

地「牛之亟は思案に暮れる 牛之「どうも之れは困つたことが出来たもんじや、現在義母ともある身をもつて、子たるこの身に戀するなど、實もつて驚き入つた次第である

とは云へバツと云はれぬ親子の縁、モシヤこの事世間に流布されなば、此の身は固より、父の名までも出で、延いては家の瑕瑾となる、ア、これはどうも困つたことが出来たものじや、何としてこれを丸く治めやうか………」と半之亟は思案に暮れる。

節「戀の奴の母お弓、犬はいよく狂ひ出し、日毎毎に附けまどひ、ヤイノノと掻き口説く、言葉の端も今はハヤ、人目も耻ぢず附け廻す、これにはさしも半之亟、弱り入りたることなれば………」

地「半之亟はキツと思案の臍を堅めた 半之」モシ母上さま、どうぞこの義ばかりはお許し下さいまし、たとひ憧れてお死になさらうとも、何としてこれが遂げられませうどうぞお見限り下さいまし、コレも菅谷の家のためでござります、どうぞお諦め下さいまし、私はモハヤ覺悟を極めましてござります」とは口の中、心にわびてさて父の居室に向ひまして 半之「モシお父上、拙者はまことに不幸な子でござります、さぞかし御立腹もござりませうが、どうかお許し下し置かれますやう………」拙者はモバヤ父上の膝下には居りませぬ、これも父のため、義母のため、また家のためでござい

ます、不孝の罪はお許し下さりませ………」と。

節「覺悟さめたる半之亟、心に兩親を伏しをがみ、その明日邸宅を出で、そのまゝ御殿へ出たきりに、些とも邸宅へ歸つて來ない、さても不思議と義母お弓、良夫に云はれぬくるしみは、啼かぬ螢の思ひなり………」

地「半之亟は、邸宅へ歸ると、義母が道ならぬ戀に附け廻されるのが、身を切らるゝよりつらい、こりやアこの身を退くのが上分別と思つたので、御殿へ上つたなり歸邸て來ない、サア斯うなると、お弓はいつそ半狂亂のやう、良夫を突いて、

お弓「モシ旦那さまえ 半兵「何じや お弓「半之亟は何故歸つてまわりませぬのでございませぬか 半兵「されば、御用繁多でお暇が出ないのじやらう、

お弓「イエ、ソンのことはありませぬ、たとひ御用がありませうとも、一度は歸邸つて來るのが當然でございませぬ、父や義母に朝夕挨拶いたすのが、子の道ではござりませぬか 半兵「夫れはさうじや お弓「一体旦那さまは、お子にお甘いから不可ませぬ、つれて妾でも悔られるのでございませぬ、キツとお叱りなさいまし、

半兵「ウム、叱る、今度歸ればキツと叱つて遣る、

お弓「お呼びにお遣りなさいまし 半兵「でも御用中には左様なことは……、

お弓「宜うございます、たつた半間や一間で、御殿を失錯ることはござりますまい、

お呼びなさい 半兵「ウム 半兵衛さんスツカリ鳥の昆布巻、か、まかれになつて居る

何でもウン、ウン、と眼尻を下げる、三勝の半七の親の半兵衛は、子ゆへに代

官所で羽がいじめになり、可愛い子を助けやうとする、菅谷の半兵衛は、女房に突か

れ、我子を叱らんとする、大變な違いだ、お弓はグレ、突き廻して半之亟を呼び戻

し、思ひの丈を口説かうとする計畧、半兵衛さん、のろまだから、ソんなことゆめに

も御存知なしの、グツと眼じりを下げたさま、兎角野郎は女にのろい……。

節「報知によつて半之亟 様子知らねばとつかはと、我家を指して歸つて来る……。

地「お父上、御用でござりまするか 父の半兵衛苦り切つて、

半兵「半之亟、其方は何故歸郎つて来ぬぞ 半之「ハイ、

半兵「父の家が氣に入らぬか 半之「全く持つて、左様のことはござりませぬが……。

半兵「然らば何故歸らぬ 半之「ハイ 半兵「御用繁多とは承知いたすが、郎歸る暇なき

ことはあるまい 半之「ハイ 半兵「第一主君に忠ならんとするものは、親に孝にあらね

ばならぬ、親に不孝なるものは、決して忠とは云ひがたし、コリヤ半之丞其方はこの

親に對して不孝をいたし居るぞ 半之「まことに恐れ入りまする、

半兵「何故歸郎らぬか、申して見よ、言ひわけあるか、どうじや……。」と突ツ込む

それは父上、母さまが、私をお慕ひなされ、ヤイノ、を極められる、夫れがづらさ

に歸郎りませぬ……と云つて了へば夫れまでだが、親孝心の半之亟、首切られても

ソんなことは云はない、心の底に秘め置いて、顔色にも出さない、

半之「まことにハヤお父上に對し、申しわけがござりませぬ、

半兵「濟まぬでは濟されぬ、たつた一人の子息のこと、モシヤ惡所通いでもいたし、

菅谷の家に瑕瑾附けてはなるまいと思ふ父の心、キツパリと申し開けい 夫れはキツ

パリ云はれませぬ、云へば貴父ののろまがわかる、眼尻の下つたのがわかり、世間の

人に笑はれます、これは演者のおまけの添へもの、半之亟はそんなことはおくびにも

云はない 半之「何ともハヤ申しわけがござりませぬ、たゞこのまゝにお許しを願ひます……」 半兵「イヤ成らぬ、親として、子の夜泊りいたすのを、そのまゝには濟まされぬ、飽くまでも事實を糺さねば相成らぬ、サア、眞直に申し上げい、虚詐を申すと許さぬぞッ」と威猛高のしかつて詰め寄せる……」

節「詰め寄せられて半之丞、明けて云はれぬ苦患を、言ひ解く術もあらざれば、なみだを吞んでうづくまる……」

地「父はいよく怒りの聲 半兵「コリヤ半之丞、何故云はぬ、言ひわけあらば速かに申し開けい、夫れとも其の身の良心に責められ、兎角の言句の出でざるか、何とじや半之丞、今日はキツと析檻いたすことであるによつて、覺悟のせいーッ」と睨め付け、何と云い解く言葉もなく、半之丞は齒を嚙んで、ジーツと俯向き、一語も吐かぬ 半兵「返事のないは、さては汝、御用に假託せ、放蕩をいたし居るな、半之「全く以つて、左様のことは……」 半兵「イヤ云ふなく、汝は表面に主君をあざむき、裏面に父を欺むく不埒者、その分には許しがたし、ソツ、夫れへ直れ、腹の

癒るまで、汝の性根の治るまで、打つてく打ちのめし、親が析檻いたして遣るツ」と、怒りに任し半兵衛は、突ツ立ち上つて長押に掛けし弓押ツ取り、覺悟いたせと打ち付ける……」

節「析檻の咎半之丞、ヤレ待つてたべお父上、その析檻の御咎、受けるはさらく厭はねど、この身の受ける析檻で、義母の心の矯正なら、たとひ死んでも厭ひはせぬ 左は云へこゝに析檻の、咎に死することあれば、主君に不忠となるのみか、身にぬれぎぬを負うたま、父を怒らし不孝者、不所存者よと輕蔑まれ、生命を捨てん口惜しさ、聞けて云はれぬ苦しみを、推量あれも口の中、哀れや父の打つ咎、身にひしくと耐へかね、ウームとその場に倒れ伏し、無念のなみだハラくと、血の出る思ひの切なさ、ジーツと耐ゆる辛抱は、たゞ父の意に逆はぬ、孝の一字のあるのみと、知るは御先祖天の神、あなうとましの世のさまと……」

地「半之丞は父の打つ、咎を退けも避りもせず、ジーツと身内に二タ打三打……」お弓は斯くを見るより、飛んで出で お弓「モン旦那さま、これはまた御短慮な、何と云

ふことをなさりまする……お止まり下さいませ……」と取り絶る、半兵衛は怒りの聲、半兵衛「ア弓、退け、不孝者の半之丞、父の成敗、誰に遠慮の要るものぞ、退けッ、叩きのめして遣るのじや……」お弓「アツ旦那さま、マアお待ちなさいませ如何にお腹が立とうと云へ、春丈伸びし半之丞、打いて御柵檻あそばすとは、あまりと云へばお情ない、マツまアお待ちなさいませと右手にすがつてグイ、どうしても放さない、半兵衛「イヤ、介意はぬ、放せ、理義を解いて分らぬ奴は、打つより外に手策はない、放せ、退けいッ」お弓「イエ、放しませぬ、何事も約束事でござります、私にお任せ下さい、妾がまた能く言い聞かせますから……どうぞ妾にお任せ下さい、旦那さまはお部屋へお這入りなさいませ、サツ、お腹の立つは道理でございますが、私へ押し込んで下さいませ、跡にお弓は半之丞の傍、ニジリ寄つてコレ半さま……」お弓「ア、また義母のむづかりやう、父の答は受けられても、義母のなまめく言の葉はこの半之丞には受け切れぬ、ア、情けないと俯伏したまへ。

地「お弓は半之丞を揺り起し、お弓「コレ半之丞、父上のお怒り、よもやお前分らぬこととはあるまいのう、コレ、半之丞、黙止つて居てはわけが分らぬ、サツ、妾の部屋までお出でなさい、言ひ聞かすことがある、サアお起ち……」と手を取らうとする、半之丞「イエ、義母さま、打つちやつて置いて下さいませ、私はここに居ります、こゝに父の柵檻を受けます、お弓「ソツ、夫れがお前不可ぬのじや、剛情張るから父がなほさらお怒りなされる、何事にも、父や義母の言ふことには、背かれませぬぞ、なア、分つたか、サア、分つたら義母の部屋へお出でなさい……」と引ッ立てる……」お弓「夫れが辛いぞ義母上さま、いかにこの身がなればとて、世の物笑ひになるよりも死するがましぞと覺悟の体……」

地「澁々ながら義母に連れられて部屋へと行く、義母は甘く引き入れて、思ひの丈をほのめかす、これに堪らす半之丞、その夜の中に逃げ出して、御殿へ上つて歸らない矢の文の來るも歸らない、死すとも歸らじ、義母の心の矯正るまでは、歸らないと覺悟を極める……」義母は手を替へ品を替へても呼び戻しても、歸つて來ない、義母は

怒つて可愛さあまつて憎さが百倍、さてもおそろししッべい返し……。

節「戀の叶はぬ意趣ばらし、良夫を突ッ付いて悪さまに、半之亟を陥れる……。

地「遂に雄鶏は牝鶏のために時を作る……半兵衛は妻の突ッ込みやうにいよく怒

り、一書を主君の御前へ出し、子息の罪を數へ上げ、七生までの勘當の願書、手に取

り上げた長矩侯、人にも語らず懐中ふかく入れて了ふ。

節「斯かる巧のあるぞとは、神ならぬ身の半之亟、知らぬが佛か御殿の勤め、忠實々々しくぞ仕へたり……。

地「主君は近臣を遠ざけて、主君「半之亟を呼べ、

近臣「ハッ」半之亟夫れへ出で、半之「ハッ、御用ばしござりまするか、

主君「半之亟近う寄れ、半之「ハ、ハ、ハ、主君「半之亟、汝は世に不便なものぢやな……

半之「ハッ、主君「何事をも知らぬと見ゆるのう、半之「何事でござりまするか、

主君「コレを見よ」と懐中から取り出す願書、半之亟は押しいたいて讀み下すと、

見るくサツと顔色が變る、手先もブルブル顫つて居る……。

半之「恐れながら御前さま、これは……主君「覺えあるか、

半之「全くもちまして、主君「左様じやらう、これには仔細ぞあらん、そちを放蕩者

として、勘當の願書を出せし半兵衛の處置、仔細なくて叶はぬことぢや、半之亟、汝

はこの義を何とするぞ、半之「ハ、ハッ」

節「ハッとばかりに半之亟、さては様子も知れては居れど、云ふに云はれぬ義理の柵

……ジツと耐ゆる胸の中、引き握らるゝごどくなり……。

地「半之亟はフ、ウームと肩で吐息をいたし、半之「御前、まことに已むを得ぬ義にご

ざりまする、主君「ウム、甘んじて受けるか、半之「ハッ、子として父に弓引くことは……

主君「ウム、道理である、許せば父の耻辱とならう、切なる汝の心は察し入るぞ、

半之「ハッ、まことに恐れ入りまする、主君「半之亟、

半之「ハッ、主君「余も汝ほどの健氣なものを、手放すは残念であるが、已むを得ぬ

暇を呉れるぞ、半之「ハッ、主君「たいこの上は時節を待てい、余に思ふ仔細もあるから

必ず父を恨まずに、時節の到るを相待つやうにいたせ、半之「ハッ、

主君「今非なき其方を、罪することは出来ぬのみか、父をも責むることは出来ぬじや
 牛之「ハッ 主君「余も俄かに汝に別るゝは、まことに残り惜しきことであるが、時節
 なりやア已むを得ぬ、また逢ふまでは健固で暮せ、
 牛之「ハッ 主君「いつかは疑いの晴るゝ時節もあらう、
 牛之「ハッ 主君「心静かに立退けい 牛之「ハッ、御情けあまる主君のお慈悲、牛之
 亟死すとも忘却仕りませぬ、御前さま、御前さま、御尊体を厭はせられて……、
 主君「オツ、汝も健固で暮せい 牛之「オツ、お去らばでござりまする……、
 節「見おくるなみだ見返る涙、あかね別れに主従が、盡せぬ縁を世の義理に、断たね
 ばならぬ仕義となり、馴れし故郷の赤穂のお城、主君に送られ父にと永訣れ、泣く泣
 く出で立つ半之亟、心は千々に亂れけり……、
 地「さて半之亟は江戸へ出で、二君に仕へす十四年、節を曲げざる雪の竹、白き心に
 故主の大事、義士に加はり名を貽す、その勇ましき段ものは……。

◎大石主税傳 (山科母子別れの段)

まくら「さて、御入來の何れも様へ、御所望によりまして、世にも名高き武士道の、
 その本源と唱はれし、播州赤穂は御祿高五萬と三千石、淺野内匠頭矩殿の御短慮か
 ら、江戸は千代田の御城中、堪忍の緒を切つて、吉良上野介を斬り付ける、その騒動
 が原因となり、國亂れて忠臣現はれ、家貧うして孝子出づとかや、太夫大石内藏助を
 はじめどいたし、四十と六士が心の誓約、頃は元祿十五年、師走十四日の雪の夜に、
 本所は吉良の御邸宅へ、亂入なして積る仇、首尾克く打つて雪の朝、兩國橋へと引き
 揚げる、今にその芳名を高輪の、泉岳寺へと葬りし、四十と七士の銘々傳、いづれお
 とりのない忠節、さらばこれから不辨舌なる訥辨に、讀み上げますれば何れにも、事
 長くとも御聴取り、偏に願ひ奉る……、
 節「断ちがたき、羈絆を断つは武士道の、まことの道を辨へし、哀れをこゝに山科の
 閑居に起る悲しき幕……。

地「さて大石内藏助良雄どにおかれては、櫛の齒を引く江戸の飛札、堀部安兵衛
 武庸はじめ、焦慮る勇士の矢の文は、一日百通二百通、山科の閑居へと飛んで来る、
 ものに動せぬ内藏助も、あまりに焦慮る江戸の同志、モシヤ前後の思慮もなく、事を
 擧げなば一大事、笑ひを世々に残すのみ、這はこのまゝには捨て置けず、これから江
 戸へ馳せ下り、事を糺して取り鎮めんと、覺悟極めたが待てしばし……。」

節「まだ御舍弟の大學どの、御赦免ならぬ今にして、事を擧げるはお上に對し、恐れ
 多いことである、まづは大學御赦免の上、淺野の御家を建てさせて、さてその上で事
 を擧げ、忠義の赤誠を現はさん、さなりく内藏助。」

地「心に問ひ、心に答へて内藏助、江戸の諸士へはこまぐと、事の次第を文にて送
 り、早まりたまふなど戒める、さて斯うして置いて一方は、江戸の幕府へ願ひを立て
 大學どのに淺野の家を相續せたまへと歎願に及び、今日や御赦免の汰沙あるか、明日
 は嬉しき音信があるかと、一日千秋の思ひで待つて居る、けれども何の音信もない、
 音信あるのは江戸の同士の飛札ばかり、今日も事を擧げんとする、焦慮りに焦慮る血

氣の武士、まだその上に心に斯る一大事……。」

節「仇敵の間諜が京都へと忍び、山科村へと立ち越えて、ひそかに窺ふ内藏助の動靜
 地「内藏助は早くも之れを知つた、知つたが知らぬ顔をするのが内藏助が胸のひろさ
 モウこりや猶豫なりがたし、詮こそあれと妻のわくを、一室へ呼んで、

内藏「コリヤわく わく「ハイ 内藏「這度余は思ふ仔細あり、今日かぎり親里へ引き取
 り呉れるやう……。」 わく「エツ、旦那さま、ナツ何と仰せあそばします……。」 藪
 から棒のわかれ話、妻のおごろき無理ならず、數年連れ添ふ夫婦中、殊には四人の小
 兒もある、今更ら去らるゝわけは無い、わく「何事でごさりまするか、俄かに親里へ
 歸れよとは、一圓合點がまゐりませぬ、妾に足らぬところでもありますなら、どうぞ
 お叱り下し置かれまして……。」 云はれて見ると、別に落度があるでも無いから、良
 雄もグツと詰つて了ふ……。」

節「哀れと思へど内藏助、妻子のあるは敵への聞え、且は同士の心もいかり、歸すに
 知かずと思はれて……。」

地「グツと碎けてニアリと笑ひ 内藏「イヤわく、下世話にも申する通り、妻とたゝみは、新しきが宜いとやら、拙者は汝が否になつたツ、

わく「エーッ、ナツ、何と御意あそばします 内藏「ハ、ハ、ハ、何も今更ら左のみ驚くことはない、そも當山科へ移り住みしより、朝夕に見る京女、東男に京女とやら、イヤモウその鮮美さにウツトリとなり、土臭きお前のやうな女は、鼻持がならぬ、小供を連れて但馬へ歸れ、拙者はお前を見るのも否じや」云はれてわくどのはハツとばかり わく「ソツ、それは旦那さまお胴慾でございます、今さら左様なこと仰せあそばし吉之進や大三郎は何となりませう、お氣に召さぬことがありますなら、お叱りを下さいます、どうぞ左様な情けないことを仰せあそばさずに……」

内藏「イヤ否じや、武士が一旦口外いたせし上は、モハヤ後へは引きはせぬ、殊に俗に、あひもの、はなれものじや、夫婦と云ふものは、存外詰まらぬものじや、モウ片時も否になつた、早々但馬へ立ち歸れツ わく「突然に左様なことを仰せあそばし、お胴慾でございます、いづれは様子がござりませう、どうぞ夫れを仰せ聞けられ、得心

おさせ下さいませうやう…… 内藏「様子は今いふた通りじや、牛を馬に乗り替へる汝が否になつたのじや わく「夫れはあまりにお情けない……」

内藏「エツ、諄いわ、疾く歸れ、再び面會いたさぬぞツ」とキツと云ひ切り立ち上る 節「アレ待つてたべ旦那さま、絶る女房を振り切つて、奥の室深く内藏助……」 地「なみだを呑んで行つて了ふ、跡に女房はせぐり来る、なみだにいと胸かき亂しワツとその場へ泣き崩折れる……」

節「聲聞き付けて駈け出で、主税は斯くを見るよりも、這は母人か何故と……」 地「駈け寄つた主税良金 主税「母上さま、何事でございまするか」と勞はるを、母は顔をも得上げずに 母「オツ良金か、ワツ妻やクツ口惜しいツ、

主税「何事でございますか、モシ母上さま、何となさりました」と様子を聞かうとする時下女のおなべ 下女「モシ、若さま、御前さまが御用にござりまする、

主税「何、お父上が…… 下女「ハイ、直にこの事にござりまする、 主税「左様か、然らば其方は母上をお居室へお連れ申し、御介抱を申し上げよ、

下女「ハイ、心得ましてござりまする」

節「様子あらんと主税どの、どつかはとして父の部屋……」

地「主税は闕ごしに両手を交へ 主税 御父上、何事でござりまするか、

真雄「オウ主税、此方へ這入れ 主税「ハイ 内蔵「主税、父は今日かぎり母を國許へ歸

すことになつたから、左様思へツ 主税「ハ、ハ、ツ」さては左様かと打ち驚く、父は

主税をキツと睨め付け 内蔵「主税 主税「ハツ 内蔵「汝は母を歸せば悲しいかつ、

主税「何と御意あそばしまする 内蔵「母子の情合、別れるのは悲しからう、

主税「エツ」

節「尋ねる父の心の中、ふかき計りのあるぞとは、流石に偉人の血を別けた、年はや

う／＼十五歳ではあるなれど、智恵も分別もある主税……」

地「早くも夫れと覺つて了つた、主税はニッコと打ち笑ひ、

主税「ハ、ハ、何事かと存じますれば御父上、左様な義は仰せあそばさずとも義

にござりまする 内蔵「何と云ふぞ 主税「私は大石内蔵助長雄の子息にござります、母

は母、父は父、父と母との關係、何れが重きやくらゐるのことは、心得て居りまする……

内蔵「ウム、然らばこの際何とするぞ 主税「申すまでもござりませぬ、私は父に隨ひ

亡君のために盡したいと心得まする……」 内蔵「ウム、能く申した、夫れでこそ内蔵

助が子息じや、が主税能く聞けい、事は實は容易でないじやぞ、余は仇討の義は、ブ

ツ、リと思ひ切つたぞ」云はれて驚いた主税良金。

主税「其はお父上、御本心にござりまするか 内蔵「本心ともく、ズーンと正氣であ

るじや、兎角は生命あつてのことじや、余はこれより月、雪、花を朋友といたし、餘

生を保ちたいと心得居る、よつて其方も只今より母に隨ひ但馬に立ち越え、祖父をた

よりに仕官のいたし、大石家の名跡を絶たぬやういたし呉れい」と。

節「云はれて驚く主税どの、父の本心知らずして、さてはこの頃父上が、しげ／＼通

ふ伏見の里、色になまめく婦人を相手、ハヤ腸まで腐つたか、ハテ情ないお心と。

地「父の心を疑ひながら、主税はキツと形を改め、

主税「さてはお父上には、去る情けないお心におなりなさいましたか、海よりもふか

く、山よりも高き主人の御恩を、ハやお忘れになりましたかッ、

内蔵「ウム、忘れた、ズント忘れた、モウ〜、兎角浮世は色と酒じやて……ハ、
、、、、、主税は決心の色を表に現はし、主税「お父上、モハヤ何事も申し上げませぬ
私に永のお暇を下し置かれますやう、内蔵「暇を呉れとは、主税、やはり但馬へまゐ
るかな、主税「穢らはしいことを仰せ下さいまするな、私は左様な卑屈な武士ではござ
りませぬ、父に代つて事を擧げ、この大石家の名に耻ざるやう、これより江戸へ下る
のでございます……」とキツとなる。

内蔵「この大石家の名に耻ぬ、けなげな覺悟の一語が、胸にひいて内蔵助、思はず心
にホロリとなる……」

地「けれどごこまでも世話にくだけ、内蔵「ウム、然らばその方、この大石の家を、さ
ほど大切に思い居るかッ、主税「御意にござります、人は一代、名は末代でござります
家名を汚し申しましては、御先祖に申しわけがござりませぬ、殊にその身の榮耀を圖
り、恥を知らぬのは、まことの武士にあらずと、かね〜お父上の御教訓を守り居り

ますので……内蔵「ウム、そりやア主税、其方の本意かッ、

主税「御意にございます、毛頭違ひはござりませぬ。

節「ヤレ見上げたるその心、過分であるも口の中……」

地「内蔵助はやがてホツと吐息をもらし、内蔵「主税」

主税「ハッ、内蔵「隔ての障子明け放し、近う寄れい、云ひ聞かすことがある、

主税「ハッ」ガタビン〜、コト〜障子襖を明け放す。

節「折からサツと吹き送くる、春とは云へど肌さむき、風にヒラ〜鬢の毛を、動か
せながらニジリ寄る、外は眠れる東山、残んの雪を頂いて……」

地「主税はズーツと膝を進ませ、父の顔を見上げる、父はジーツと見下しながら、

内蔵「コリヤ主税、主税「ハッ、内蔵「其方當年幾歳であるな、

主税「ハッ、十五歳でございます、内蔵「十五歳ならば、モハヤ物の用に立つべきは

す、汝は主家の御恩を忘れはいたすまいのう、主税「仰せまでもござりませぬ、

内蔵「能く聞けい、今同士は白をもつて數へつるが、余が信する仁人は、その半數に

も満たぬ、よつてまづ余は、頼むに足らぬ烏合の勢は、一日も早く同盟より取り除きたいと心得居る、しかし斯かる義は容易に口外さるべきことでない、されば今に見よ彼等は必らず怯氣の出づる時のあらう、よつて余の思惑にては、一人にても苦しからず、志氣の健固きものをゑらび、事を共にいたしたいと思ひ居る、汝も余が悴であるなれば、よもや卑怯なふるまひはいたすまいな……、

主税「ハイ、決して後人に笑はれるよなことはいたしません、私は父の仰せを受け、見事に仇を報ひ、亡君の御無念を晴させますので、御父上、この義は御安心下さいまするやう 内蔵「ウム、然らば血判いたせ 主税「ハッ」

節「身内を斬つて進る、血汐をバツと連判状、押したる上はその身、三日見ぬ間に散る花の、潔よき心をば、赤き血汐に示すなり……」

地「内蔵助も篤と見届け 内蔵「ウム、モウ夫れで宜い、親兄弟たりとも他言せぬ、誓は堅く守るであらうな 主税「仰せまでもござりませぬ、

内蔵「モウ要はない、彼方へ行け 主税「ハッ」と主税は立つて母の部屋、

主税「母さま、御加減は如何でござりまするか わく「オウ主税か、お父上さまの御機嫌は……、 主税「ハイ、殊の外御不興氣にござりまして……、

わく「左様か、今日に限つて、何故、藪から棒に、彼のやうなこと仰せあそばしたのであらう、妾や合點が行かぬわいな 主税「お父上は彼した御氣象でござりますから、一旦言い出されたことは、めつたにお跡へはお引きなさらぬ、されば母上さまには、

御不自由ではございますが、一旦は但馬の祖父さまのお邸宅へお歸りを願ひます…… わく「どうでも妾は歸らねばならぬかな 主税「お心のお怒りは主税能く存じて居りまするが、何分にも、今はア、言い募られて居られますから、そこに何ぞか申しまするは、却つて父の仰せに逆らひ、能くありません、その内に時機を見て、私はお執計を

いたしますから、一旦は御歸りを願ひまする わく「歸れと云へば歸りもするが、あまりに旦那さまのお仕打が……、 主税「サツ、御立腹は重々御道理にござりまするが、今はそれを仰せあそばす時機ではございません、どうかお歸り下さいまするやう、

わく「ハイ、では歸ります 主税「キツと私がお迎へにまゐりますから……、夫れをお

樂しみに……』と。

節「口には云へど心では、これがこの世の見納めか、今にも江戸へ馳せ下り、吉良の邸宅へ討ち入るならば、生死のほども圖られず、子として母親に孝の道、盡さぬのみか亡君の、如何に御爲と云ひながら、誑して歸す心の内、推し量られて哀れなり。

地「母親のわくさまはたゞモウ泣き崩折れて居るばかり、主税は甲斐々々しく旅の用意、何歟と世話しまゐらせて、ハヤ門前へは駕が廻る、主税は二人の舍弟を招き、

主税「コリヤ吉之進大三郎、能く聞けよ 兩人「兄上さん、何でござります、

主税「お前達はこれから母親さんと、お駕に乗つて、お祖父さまの邸宅に行くんだぞ 兩人「ソレなら兄上さん、これからお駕に乗つて……、

主税「さうじや〜 兩人「嬉しい〜、兄上さんも行くの……、

主税「イヤ兄上さまは行かない 兩人「何故 主税「兄上さまはお父さまの御用を聞かねばならぬによつて、跡から行く、お前達はお母親さまと先へ行くのじや、

兩人「ア、さう、ソレなら兄上さんお出でよ 主税「行くとも〜、直ぐに行く、しか

し祖父さまのお邸宅へ行つても、決してダ、ツコを控ねては不可ませぬぞ、柔順く、祖父さまや、母親さまの、お言ひ附けを聞くのであるぞ、

兩人「アイ〜お柔順くして居ります 主税「オウ、能い子じや、サアちやつとお父さまに、お暇乞を申すのだ』と打ち連れ立ちて、父の居室へと連れて来る……、二人はいたいげに、両手を支へてお辭儀する……、

節「押し付けられては流石にも、ものに動せぬ内藏助、目前父子の永訣かと、思へばいよいよ胸せまり、目にはなみだは持たねども、心で泣いて内藏助……、

地「ジーツと二兒を見入つたが 内藏「コリヤ二人とも、これからお祖父さまのところへ行くのじやから、必らずダ、を控ねては相成らぬぞ、

兩人「アイ〜お父上さま、おとなしくして待つて居りますから、お土産をドツサリ下さいますし 内藏「オウ、遣るとも〜、ウンと持つて行つて遣るぞ、

兩人「ソンなら行つてまゐります 内藏「ウム、行け〜、

兩人「お父上さま、行つてまゐります」と玄關へ走つて來ると、ハヤ駕がひかへて

居る、兩人はチヨコく、これぞ父子の永訣とは、知らぬ無心にいそぐと、駕の中へと這入つて了ふ、ついで母のおわくごの、泣き腫したる眼をおほひ、しほくとして駕籠の前、主税はッ、と走り寄り、母の手を執り、

主税「母上さま……」

節「これがこの世の永訣かと、思へばいせぐり来る、なみだを押へて良金が……地「モシ母上さま、但馬と云へば山國、随分御身を大切に……」

わく「オウ、お前も無事に暮して下され、お父上にも宜しく傳へて……」

主税「ハイ、夫れは私が心得て居ります、わく「ソんならモウ行きます、

主税「お名残惜しうござりまする、わく「オウ、オウ、ア、別れとむない……」と

思はずヒヨロリと靴脱石、主税「アッ、お危うござりまする」と、助け起して駕へど

入れる、主税「母上さま、舍弟の身の上、何分ともにお頼み申します、

わく「夫れは安心してお呉れ、見返すやうに育て、見せる、

主税「老爺さまによろしくお傳へ下さいまするやう、モウお去らばでござりまする、

わく「去らばぞ……」と駕の内、泣き腫したる目なし鳥、見えねばいつそこの苦患助かるものとわくごのは、コレが邸宅の見納めかと、思はず見やるれんじ窓、見交す良夫の顔と顔……」

節「オツ旦那さま、エツ、穢らはしいとビシヤリと立て切る障子の音、アツとばかりにわくごのは、思はずワツと駕の中、前後正体泣くばかり……」

地「主税もイツン遣る瀬なく、心も狂はんばかりにて、玄關式臺にドツカと坐し、聲を忍んで咽び入る、わく「主税、モウ行きますぞ、

主税「お静かに立たせられい」と見送るなみだ、見送るなみだハラ／＼と、降るはなみだか秋雨の、一むらサツと時雨る、ごこく、晴間は更らになかりける……」

節「いざお去らば擔き出す駕、見返り見おくり親子のわかれ、ハア……とおわくが咽び入る、聲に主税は伸びあがり、伸び上りても高屏の、やがて姿は消えて行く、その身もやがて消えて行く、江戸下向のその段は……」

◎千馬三郎兵衛傳 (本城駈付の段)

節誠實ある、武士は主君ゆゑ身を粉に碎く、主君にうとまれ嫌はれて、已むなく身を退き故郷へ歸る、變らぬ心鐵石に、主君の大變聞くよりも、駒を返して本城の、赤穂を指して駈け付ける、忠義無類の三郎兵衛、主君に誠實を盡すの一段……。

地「千馬三郎兵衛は祿百石を食む馬廻り、忠心無類の武士であつたが、自己の心が直なるから、曲つたことが大婦ひ、齒にキヌ着せずと言ひまくる、夫れが身を過つの原因となり、時に主君から御不興を蒙ることがある、けれども三郎兵衛些とも介意はず、少しにても腑に落ちぬ、道ならぬことでもあれば、飽まで切諫苦言を呈する、

三郎「御前に申し上げます。長矩「ヤアまた三郎兵衛か、何か云ふのか、五月蠅いな、何じや。三郎「イヤたどひ五月蠅いと仰せられましても、申し上げぬわけにはまわりませぬ、道に外れたことを遊ばしては、御意見を申し上げねばなりません、

長矩「余が何か道に外れたことでもいたせしか。三郎「左ればでござります、承はれば

主君には、青山のお下邸宅に、御建増をあそばすこのことにござりまするが、當お上邸宅のお在りなさる上に、何の要あつて御建増に相成りまするか、

長矩「ウム、その義か、夫れは斯うじや、大學事、モハヤ成年にも相成り、近々奥を迎へ取らせたいと心得る、ついでには青山邸手狭につき、建増をいたしたいと思ふので別に道に外れたことでもあるまい。三郎「イヤ夫れが不可ませぬ、

長矩「何故不可ぬ……。三郎「夫れは驕りの御沙汰でござりまする、

長矩「何と……。」と御氣色變る。三郎「恐れながら大學さまは、未だ御部屋住の御身分に在らせられます、御身分では奥方お迎へも如何かと思ひまする、またヨシヤ御迎へあそばしても、青山邸にて少しもお手狭とは考へられませぬ、彼にて十分と心得まする。長矩「控へい三郎兵衛言葉が過ぎやう……。

三郎「ハツ。長矩「余が舍弟は余が相續人であるぞ、淺野の相續人にして、下邸を手入いたすに、何が驕りの沙汰じや、無禮なことを申すな、

三郎「イヤ御前、夫れが御我儘と申すものでござります、

長矩「何ッ 三郎御存知でも在られませうが、今や世は太平に浴し、淫靡はげしく、武士の柔弱に流れ、一朝ことあるときは、もの、役に立つべしとも思はれませんが、この故にお上におかせられても、内々お觸れを出させられ、武を練り心をみがくことに心掛くべきやう仰せ出され、且驕りを慎しみ儉約を守り、その分を知り世のため、能く戒めよこのお諭しでござりまする、殊に諸侯方には、その模範となるべきやう、殊更らに御諭しに相成つたではござりませぬか、この時に當つて、主君は御驕りと思さずとも、お上においてこの事お聞き入れに相成るにおいては、夫れこそ由々しき大事、御家、御家名にも拘はる御事になりはすまいかと考へられまする、何も今さらに御建増をあそばすこともあるまいと思はれまするで、しばしはお中止りあるやう、願はしうぞんじまする……」と。

節「誠實表に現はして、真心籠めて意見する。

地「けれども長矩公は、なか／＼聞くべき様子もなく、御機嫌荒く、

長矩「ヤイ三郎兵衛ひかへいッ、余は播州赤穂において、五萬三千石の大侯であるぞ

下邸の建増が何ゆる驕りの沙汰であるか、馬鹿なことを申せッ、殊に上に聞えてモシ御尋ねあらば、言ひ解く術は幾何もあるのじや、餘計なことを申すな……、

三郎「イヤ夫れが不可ぬのでございます、夫れは御伶俐な御前のごとでございませうか、御言譯はござりませう、が斯かることのお上へ聞えるは、節儉を守れとの御觸のある矢先、御家のため、將來までも御不益かと思ひます……、

長矩「介意はぬ、不利益であらうとごうあらうと、介意はぬ、捨て置け、其方の厄介にはならぬ、無禮なことを申す奴、控へろッ、

三郎「ハッ、しかし御前、能く御勘考あそばして……、

長矩「エツ黙止れッ、余に對して言葉を返す無禮者、目通り叶はぬ、退れッ、

三郎「ハッ主君は御若年に在られまするで……、

長矩「ヤッ、まだ申し居るか、ヤア／＼藤井又左衛門在らぬか、此奴にキツと糺問申し付けよ、無禮至極の曲者である、ソレッ 藤井「ハッ」又左衛門飛んで来て、

又左「千馬、主君の仰せ、下れい 三郎「ハッ、まことに恐れ入りまするが、主君は御

短慮にわたらせらるゝで、御家のため、痛ましき義にござりまする、

長矩「エツ、まだ申し居るかッ 又左「お退りなされい 三郎「ハッ」

簡「主君の御怒りなくも、邸宅へ引き取るその跡へ、上使は立つて永の閉門、

地「三郎兵衛は主君の仰せは宜く守る、身を慎しみて邸宅の内、けれども御家を思ふ

心は些ども變らず、主君の御短慮の御氣象は、モシヤ御身を誤りたまひはせぬかと、

夫れのみを心配して居る、三郎兵衛は、斯うして閉門を受けることは、一年の中七八

度もある、一年大方閉門ばかりの時もある。けれども些ども主君を恨まず、却つて主

君の御身を心に痛めて居る、主君はまたどういふものか、三郎兵衛がお嫌ひで、顔を見

見ると腹が立つてならぬので、左ばかりの事でもなくとも、直ぐに閉門と来る、顔を見

たと云つては閉門、路を通つたと云つちやア閉門、小便を垂たと云つちやア閉門、小

便仕て閉門喰つちやア堪らない、江戸の邸宅では千馬のことを、三郎兵衛と云ふもの

はない、三郎閉門と云つて居る △君、この頃は閉門はちよつとついでるな、

○「ナニ今にまた三郎閉門じや △何しろ妙な男じや、彼んなに主君に嫌はれて、何

も奉公仕なくともものことじやないか ○左様だ、淺野家ばかり日が照るんじやない、

止めて了へば宜いのだ △左様だ、拙者等なら、直ぐに暇を願つて、飛び出すところ

だ ○夫れを得せぬところを見ると、彼奴よつぼど意氣地なしと見える、

△左様だ、役に立たないんだ、何處へ出しても、一人前の通用の出来ない代物だ、

やつぱり閉門が性に逢つてる、この間も小便をして閉門となつたせ、

○「堪らないな、小便して閉門となりやア、糞を仕たら、さしづめ切腹だな、ハ、ハ、

、△「ワハッ、ハ、ハ、何しろ馬鹿な武士じや」とうはさとりく、みな三郎兵衛の

ことを閉門と云つて嘲けて居る………

簡「うはさを聞けど三郎兵衛、燕雀何ぞ大鵬の志を知らんやと、嘲ける奴を却つて

心で笑つて居る………

地「あんまり評判が激しいので、江戸家老藤井又左衛門、安井彦右衛門の兩人、相談

を遂げて、千馬の邸宅へ遣つて来る……… 又左「千馬どの、今日は折入つて御相談に

まゐつた 三郎「コレは御家老には能くこそ、何でござるな、御相談とは………

又左「外義でない、御身に御暇を勧めんためにまゐつた。」

三郎「何ッ、拙者に……」 又左「左様、凡そ主君と申すものは、主君をあがめて御奉公いたし、主君もまた臣と憐みたまふによつて、主従の間柄が圓満く治まるのでござる、然るに御身はごうでござる、四六時中主君の御機嫌をのみ損ね、御身を三郎閉門と申し居る、主君に少しの御奉公をいたさず、たゞ御怒りをのみ受くると云ふは、一に御身の奉公の到らぬのでござらう、尙この上いつまで在られるとも。主君のお怒りの解くるときなく、主君も御不興また御身も面白からぬ義と心得る、よつて一まづ御暇を願はれ當所御立退ある方、御身のためにも宜しからうと思はれまするが……」と辭職の勸告、あたりまへの者ならば、無禮なりと、ムツとするところだが、三郎兵衛別に腹も立てない、しかし、ア、情ないことである、良薬つねに口に苦しとやら、サテは主君にはこの三郎兵衛を、見かぎりたましいしことであるか。

三郎「たとひ主君には見限られやうと、拙者は主君よりその外に、主君と云ふものあらざれば、ヨシヤこの身は御傍を去るとも、心は御傍を離れない、これぞ誠實の心である」と。

ると。

地「早くも三郎兵衛覺悟を極めた 三郎「然らば御家老、拙者に暇を願へと申さるゝのか 又左「夫れが却つて御身立身のためであらうと思はれまするじや、

三郎「ウム、然らばこの三郎兵衛に、二君に仕へよと云はるゝのかッ、 又左「夫れも成行なりやア是非がござらぬ 三郎「お黙止りなさい、拙者はたとひ主君にうとまるゝとも、世の中に主人と申すは、主君より外にはござらぬのじや、將來とても、たどい御傍を離るゝとも、心はやはり家來でござる、二君に仕へよなごゝは怪しからぬことじや 又左「夫れは御身の御自用になさるが宜い、

三郎「自由にする、然らばこれより故郷へ歸り申す、主君には随分と御攝養をあそばし、御短氣をお慎しみあそばして、御長命をあそばすやう、御身より宜しなに言上たのみ入る……」と。

三郎「主君に捨てられ三郎兵衛、何樂しみに江戸の地に、永居かなるかお去らばと、主君の御影を伏し拜み、家族をまとめて江戸を跡に、生れ故郷の四國は讃岐の高松へ、

なみだながらに旅の空……。

地「一旦は本城赤穂へ着いたし、城代内蔵助良雄に面會、なみだとともに身の不幸を唧ち、家中の衆へも暇を告げ、赤穂を出立て同じ國の飾磨の港へ着き、船で四國へわたらうと、或る旅籠屋へ泊り込んだが、折あしく海が時化で船が出ない、心ならずも幾日かを逗留いたす、船頭「ヤア、出船ぞ、船が出るぞ」と旅籠屋へ觸れて歩行く、ソレと三郎兵衛支度のいたし、家族とともに乗船場へ遣つて来る、乗船場は一杯の人でワツ／＼云つて居る、甲「オイ／＼、一寸待つて呉れ、耳よりな話じや、夫れからどうした」と聞くのは船頭、聞かれて居るのは五十ぐらゐの商人体の男、

男「夫れが大變なんだ、何しろ今に赤穂の城下は、血の雨が降らうと云ふんだ」

節「チラツと聞いた三郎兵衛、赤穂の城下へ血の雨とは、ハテ耳よりなと進み出で。

地「コリヤ町人待てツ、男へツエツ、三郎聞けば赤穂の城下に血の雨が降ると申したが其は何事の起つたのであるぞ、眞直に白狀に及べツ、

男「オイ／＼お白洲のやうだな、三郎何とした、早く申せツ、

男「へ、エツ、では旦那さまは彼の騒動を御存知ないので……、

三郎「知らない、騒動とは何事じや、男何事じやつてお前さん、赤穂五萬三千石は斷絶でございます、三郎エツ、御家斷絶……ウム、ム、ウーン、

男「ア、モシ／＼さう睨まれては恐ろしい／＼、

三郎「早く次を申せツ、男「私も委しいことは知りませぬが、赤穂の主君さまが、何でもお江戸で不都合をなさいましたとやらで、主君さまは御切腹、御家は斷絶、今にお上から赤穂の城を攻め付けるとやらで、城下は戦争場のやう、こね返すやうな騒ぎ、御家中はお城に籠り、夫れは／＼大變なさわざでございます」と。

節「聞いた此方の三郎兵衛、様子知らねばなかに、その驚きは如何ばかり。

地「ナニツ、赤穂の家中が城に籠り……ウム、其は一大事である、主君に盡すは今この時、オツ、能く申した、ソレツ、」とばかり、章駄天ばしり、血相變へて駆け出す……、驚いたのはお女房さん、男「モシ旦那さま、何處へお越しでございます、

三郎「御家の大事、聞かぬ内なら兎も角も、聞いては寸時も猶豫ならず、そこ退けい

「妻」イヤ〜、退きません、マツ、お待ち下さいまし、モシ旦那さま……、
 三郎「エツ、五月蠅い、退け〜ツ」と。
 節「突き退け跳ねのけ三郎兵衛、一心凝つてはなかく〜に、真一文字に赤穂を指して
 韋馳天走りに乗ッ付ける、跡に家族はなく〜も、アレ待つてたも我夫と、これまた
 跡を追掛ける……。」

地「三郎兵衛は、忠義を盡すはこの時と、息をも呉れず赤穂の城下、太夫内藏助の邸
 宅へ乗ッ付ける 三郎「頼まう〜」と云ふ聲も氣色ばんで居る「誰何でござる」と取
 次に出たのは主税良金 主税「オッこれは千馬ごのでござりましたか、

千馬「これは若さま、太夫ごのに申し入れ下されい、途中にて變を聞き、駆け戻つて
 ございます、宜しなにお取次を……」 主税「ハイ、しばらく〜」と内藏助に通じる、や
 がて座敷へ通される 三郎「太夫ごの、御家の大變、まことに驚き入つてござるによつ
 て、馳せ戻りました、聞けば御籠城ごの御事、身不肖なれど三郎兵衛、何卒その列に
 お加へ下し置かれまするやう 内藏「コレは千馬ごの、近頃御勝殊でござる、モハヤ御

歸國ご心得たるに…… 三郎「されば、飾磨の港に船待いたせし今日、計らず乗船場
 にて御家の大變承はり、取るものも取り敢へず、駆け付けたしてござりまする、

内藏「夫れはまた御殊勝なことでござる、その御本心亡君の聞せられたら、さぞかし
 御満足に思召さるゝでござらうが、今はハヤ夫れも詮なし、殊に御身は御浪々の御身
 上、モハヤ赤穂淺野家とは、絶縁でござるによつて、這度御家が大變についても、御
 関係もござらぬ、その思召は、内藏助厚く御受け申すら、今夫れをお聞き入れると申
 すことは出来ぬ、よつて御身は志す方へまゐられ、御一身の榮達を計りたい、モハ
 ヤこれより外に申すことはござらぬ 三郎「夫れはあまりにお情けない、モト〜拙者
 は、御家の見限り御暇を願うたのでござらぬ、謂は 主君にうとまれ、已むなく御暇
 を願うたのでござるが、心は少しも變り申さぬ、二君に仕ゆるは固よりのこと、世に
 主君と申し上げるは、故殿より外にはござらぬ、その故殿の御家の大變に當つて、の
 め〜側見いたし居る、三郎兵衛ではござらぬ、たとひ何と仰せあそばすとも、拙者
 は淺野家の家臣でござる、主君の大變に臨んで、臣たるものが御家のために盡す、こ

れ當然のことでござる、モシ太夫どの、拙者がこの衷情、御汲み取り下されて、籠城の列にお加へ下し置かれまするやう……」となみだともにも三郎兵衛。
 節「願ふ心は武士道の、かゝみに光る身の榮えと、感に入つたる内藏助、形改めて三郎兵衛に打ち向ひ……」。

地「三郎兵衛どの、御身がごときは、まことに類稀なる鐵石心、世のつねといたして、人情紙のごとく、難に赴き義に奔るを、言を託して避くるが多く、殊に當家中においても、イザとならば兎角に忠の心薄く、名ある武士まで義を捨て耻を願ず、ひそかに國元立退くものゝある内に、主君に見限られ、御暇となりし身が、御家の大變聞くよりも、故主のためと義に赴かんため、駈け付けられし御身ごときは、まことに泥中の蓮とも申すべきか、その心中を推し量り申しては、何ともハヤ申しやうがござらぬ、たい感じ入るの外はござらぬ、しかし三郎兵衛どの、こゝを能く御聞き下されいとどひ籠城いたすとせし上からが、一旦浪人となられし御身、その列に入れたとあつては、世間の手前、ヤレ内藏助は血迷ふたり、籠城いたすに浪人を語らひたりと云は

れては、第一亡君の御耻辱とも成り申す、御身が真心は感じ入り申すが、武士道のため、右の次第にて左様の運びにも相成りがたし、

三郎「フーム、然らばどうあつてもこの願ひは叶ひませぬか、

内藏「右の譯ゆへ悪しからずお免しを願ひたい……」三郎「左様か、ウ、ム……」
 節「ハア……、ハツとばかりに三郎兵衛、張り詰めし氣も頓にとゆるみ、ドツカとそこへ平坐り込み、覺悟の体に息を吐き……」。

地「太夫どの、世にこの三郎兵衛ほどの不運不幸なものはござらぬたゞ御一人の故主に疎まれ、心ならずも永のお暇、萬分一の御恩も報はず、江戸を跡にいたせしときは身を切らるゝほど切なうござつた、たゞこの上は遠く主君を陰ながら、守護しまつらうそのために、八百萬の神々へ、何卒主君の御身に幸多かれと、願事なせし間もなう降つて湧いたか御家の大變、こゝぞ御恩の報するところと、女房子供を飾磨の港に打ち捨て、乗つ付け來つた御本城……」然るに太夫の仰せにて、我のぞみの叶はぬとあれば、何樂しみに世に永らえん、ハヤ三郎兵衛は武運につき、弓矢八幡に見限られ

たることをござる、よつて今潔よくこゝに割腹いたし、冥府の故主に到らぬこの身の御詫をなさん、太夫どの、夫れにてお見届け下さいませるやう……。

地「ヤレ待てしばし早まるな、ヤレ待ちたまへと内藏助、その手をひかへて、内藏「御心底はまさに見えた、まづ〜待たれい、

三郎「籠城のお列に加へ下し置かれまするか 内藏「死は易く生は難し、まづ〜にせ下さいませるか 内藏「其はまづ追つての事にして、まづ〜その手を退きあれいと刀を鞘に納めさせ 内藏「御身がその尊き心、まことに忠臣とは御身ごときを申すのでござらう、如何にも列に加へ申さう、三郎「エツ、然らばお許し下さいませるか、アノ籠城の列にお加へ下し置かれまするか、ハ、ア、アツ、難有うぞんじまする。」と嬉しなみだをほろ〜溢す 内藏「併し千馬氏、モハ、籠城は止めたのでござるぞ、

三郎「エツ、アノ籠城の義は…… 内藏「されば、家中多数の賛成により、用金配分の上、城はお上に返却して了い、奇麗に當所を立ち退くことに決したのでござる…、三郎「エツ、ソツ夫れはあまりに腑甲斐なし、祖先傳來の墳墓を捨て、おめ〜當所を立ち退くと云ふは、あまりに夫れは太夫どの、お情けないではござりませぬかつ、内藏「家中の多人数が左様と決せば、一人の内藏助が如何ともいたし方がござらぬ、三郎「赤穂五百の一家中に、一人の義を知り、忠を辨ふるものなきか、チエツ、ザツ残念千萬なことをござる……ツ」ど。

地「三郎兵衛は齒をムク〜噛みながら 三郎「太夫どの、五百の家中の一人の、忠に赴くものなきは、これまさに故主君の御恥辱であるとともに、吾々臣として何として世の中に立つことが出来ませう、モシ太夫どの、他人は知らずこの三郎兵衛、たゞ一人にても苦しからず、おめ〜當城を明けわたすがごとき腑甲斐なきことはいたさ

ぬ、これより城に楯てこもり、屍を城の土に埋め、天晴れ赤穂の家臣の膽玉を、世に示したいと心得ます」とイキリ立て、ジリ、と膝を乗り出す、

内蔵「イヤその御覺悟は勇ましく、内蔵助まさに感に入つてござる、しかし一人の能く當城に楯て籠らんなどは、實は無謀の舉にして、却つて世の笑ひを受け申さう、よつてこの内蔵助も城明け渡しに賛成でござる、

三郎「ナニツ、太夫どのまで……ウム、シテその後の御存知寄は……、

内蔵「されば、その後の存じ寄り……三郎兵衛どの……」内蔵助は無言のまゝ、に三郎兵衛の手を取つて佛室へ誘ひ入れる。

節「薫りも高く馥郁と、立ちのぼりたる御香料、御燈明とろり御靈前、故主君の御位牌正面に、ハツと御前に平伏して……」

地「拜了つた内蔵助、取り出でたるは連判状、

内蔵「三郎兵衛、血判……三郎「オツ、云ふにや及び申すべき……」サツと送し血汐の血判、姓名を記してビタリと捺す 内蔵「ウム、確に血判受け取つた、この

上は三郎兵衛、恨めしき吉良上野を、討ち取る所存が肝要でござる……」

三郎「ウム、面白い、シテその手策と申すは……、

内蔵「さればじや、事は秘密に秘密を要する、と摺り寄つて聲ひそめ……」

節「さてこれから三郎兵衛、再び江戸へと乗り込んで、頃は元祿十五年極月十四日の雪の夜に、吉良の邸宅のお庭前、上野介の首の番人、清水一學と渡り合ひに及ぶ、最期の働きたされる、その段切は次の席まで……」

◎矢頭右衛門七傳（父死別の段）

節「嗚呼天の命、之れぞいかん、心中の大望、自から、これ書餅矣……」

地「さて、今回は、矢頭右衛門七教兼どの、傳記の内、父長助が堂島の假宅において義士の列に加はりながら、病のため、限りなき恨を吞んで、右の一詩を内蔵助に送り病死を遂げる、右衛門七悲しみの内に奮ひ立ち、江戸下向をばいたされる、武士の中なる武士の龜鑑、十五歳の小兒姓が、忠義をつくす一卷を、さらばいよく……」

節「散る花の、清き流れに水慣棹、さして深みを押しはかる、内蔵助が赤穂城における苦心のかすく……」

地「第一に早水藤左衛門、第二に原惣右衛門の、江戸の早打、ハヤ赤穂城は鼎の沸くがごとき騒動、いよ／＼内藏助は一家中の諸士を集め、身の處決を促す大評定、これより先、中小姓を勤める矢頭長助、當年まさに十五歳、蕾の花の悴の右衛門七を……、長助は右衛門七を膝下に招き、長助「コリヤ右衛門七、近う寄れい、

右衛門「お父上、何事でござりまする、長助「汝も當年十五歳、もの、差別も分りつらんが、這度の主家の大事件、我々家臣の臍を堅むべき秋にのぞみ、御家の行末、我等が末路、如何に成り行くと思居るかの……」と思ひあり氣なたづね、右衛門七はニツコリ笑ひ、右衛門「お父上、左様なことはモウお聞きには及ばぬこと、御主君はお江戸で吉良とやらをお討ち洩しになり、御無念を忍んで御切腹仰せ付けられあそばしたのでござりませう、長助「ウム、さぞ御無念なことでお在しつらん……、

右衛門「お父上、主君辱められて臣死すとは、かね／＼お父上がお教訓へ下さいましたことでござりませう、長助「ム、左様じや、右衛門「然らばこの場合、モハヤ何事をも勘考いたすことはござりませぬ、臣は即ち死せば宜しいのでござりませぬ、

長助「ウム、然らば腹カッ割いて御伴申すか、右衛門「イエ／＼、尋常では死にませぬ、これから御城へ馳せ参じ、城を枕に討死いたしまするか、夫れがならずば、仇の邸宅へ乗り込んで、御主君の鬱憤を晴させ申す、それも成らずば、そのときこそは、主君の御墓前に、申しわけのため腹カッ割いて、死ぬる分のごとでござりまする、

節「意氣よう／＼と力味出す、言葉はまことの武士の云ふ、大和魂夫れぞは、眉の間に現はれたり……、

節「實に梅檀は嫩より、芳しいとはその昔の、云ひ慣はしとかや……、

地「長助は悴の健氣な、勇ましい決心を聞き、ニツコリ笑つて膝進ませ、コリヤヤイ悴出来し居つた、その決心を聞くからは、長助もいさ／＼か安堵のいたした、夫れでこそ余が悴じや、能く申した、賞めて取らする、その心に變りがなくば、死すとも君恩を忘れてならぬぞ、右衛門「ハイ、決して忘れはいたしませぬ、武士たるものは、名こそ惜しみます、名を千歳に貽すのが、武士たるもの、本懐でござりまする、

長助「ウム、豪い、モウ能い、／＼、その覺悟を聞く上は、ヨモ父の名を汚すがごと

きことはあるまい、幸ひ今日は、城中御評定のことであるから、汝も太夫どのへ、志のあるところを申し上げよ。右衛門「はい、承知いたしました、たとひ太夫どのへお聞き入れなくとも、拙者はモハヤ覺悟極めて居りまする、

長助「然らばこれより出仕いたさう。右衛門「お伴いたしまする」と。

節「春の日ながに悴を連れて、嫁菜さがしてつまとする……夫れは都々一これはまた、覺悟堅めた長助親子、嫁菜にあらぬ死許を、もとむるための登城とは、武士の慣ひと云ひながら、語るも聞くもなみだなり……」

地「長助は悴の右衛門七を連れて、今日は最期の會議であるかと、手を引き合ふて登城する、ズツと廣間へ通ると、ハヤ一列に歴々が、綺羅星のごとくに居流れる、もとより身うすき長助親子、はるか末座に座を据える……この時内藏助良雄においては、一座をズツと見廻しながら、大石「いづれも、この中よりの再三の評定、いよいよ今日が最期の會議でござる、先刻より申すごとく、つまりは、今にも江戸の上使の來るを待ち、清く御城を引きわたし、各自退散いたすか、また城を枕に討死するか

二つに一つでござる、何とであるか、御所存が承はりたい」と言ひわたす。

地「されば、退散と云ふもの、籠城と云ふもの、いろ／＼あつたが、大野九郎兵衛をはじめとし、恥を知らぬ武士は、みな狐鼠々と引き退る、のこるは正義の士のみで五十と四人、各自に誓書を認め血判する、その數五十と四人、中に一人洩れたは、彼の矢頭右衛門七、右衛門七はモウ残念で堪らず、この時ズカ／＼と内藏助の傍へ進みキツと内藏助を打ち見やり、右衛門「太夫どの、拙者も籠城の列にお加へ下し置かれまするやう……」と思ひ入つて云ふ、内藏助見ると、まだやう／＼十五歳の小がいの右衛門七、あまりの心のいらしさに、ほろりとなつたが、言葉を正し、右衛門七、汝の眞心は、拙者能く存じて居る、まことに感じ入つたことである、しかしながらまだやう／＼十五歳の部屋住の身で、籠城などは思ひも寄らず、殊にお身が父長助が、一列に加はりあれば、そちまでもとは、あまりに情なきわざ、またまだ部屋住の、御奉公も淺く、我々と一口には申しがたし、されば汝は列を離れ、今にも父の戦死のいたさば、跡ねんごろに吊い遣はせ、これも孝行の一つである、父は忠に子は孝に、兩

道を親子を分れてつとめる。まことにゆかしいことではないか」と、諄々と説き伏せやうとする。けれども右衛門七聞かばこそ……

右衛門「這は太夫のお言葉とも覺えませぬ、列を離れて跡吊へとは、お情あまつてお情けなうござりまする、訪い吊いは拙者のいたさすとも、娑婆には坊主と云ふものがあります、坊主が勤めます、何も拙者がいたすほどのことでもござりませぬ、殊に子として父の死に就くを、のめく見捨て申しては、子たるもの、道が立ちませぬ、あくまでも父と共々、死を一にいたしたうござりまする、また御奉公の浅いと仰せあそばしました、太夫どの……」

節「十年にあまる宮づかへも、たつた一日の奉公も、忠義に異りはないものを、幼年ものと見縊られたか、去りとは情ない太夫どの……」

地「一心凝つてはなかく、岩をも徹す桑の弓、それは源吾の口吟みしことなれど右衛門七の意志はなかく堅く、ジーツと内藏助を打ち見やりながら、

右衛門「太夫どの、出すぎた申し條は平に御用赦下さりまして、何卒籠城の列にお加へ

下さりまするやう……」と、なみだと共に願ふにぞ、内藏助もその志氣に感じ入つたが、如何にしても不便なので……、右衛門七、汝の志は、内藏助ほどく感じ入つたことであるが、親子ともく死に就けよとは、余は如何にしても申しがたし、どうかこたびは思ひ止まつて呉れるやう、右衛門「では、太夫どの、これほどお願いひ申しましたも、アノ、お聞き入れは下さいませぬかッ、

内藏「……」 右衛門「ウム、是非もなき次第でござりまする、この上は各自より一步先に冥府へまゐり、亡君にこの由申し上げます、太夫どの、御去らばでござりまする、御免下さりませい……ガラリと抜いた小刀をあはや……」

節「思ひ詰めてはなかく、跡へは引かぬ丈夫のたましひ、既に斯うよと見えければ……太夫はあわて、その手を押へ 内藏「ヤレ待て右衛門七、早まるな」と、グツと押へて腫を凝し、ジーツと右衛門七を見入られる……、

右衛門「待てとは太夫どの、拙者が願望、お聴届け下さりませうかッ、大石「ウム、斯ほどまで決心の堅めし上は……」

右衛門「アノお聴入れ下さいまするかッ。大石「如何にも、汝が真心にかんじ、籠城の列に加へ得させる、右衛門「ハ、ハ、ッ、有りがたうぞんじまする」と。

節「身を謙遜つて右衛門七は、嬉しなみだに暮られる……。」

地「斯くてその日の評定は、籠城に極つたことにして、一同邸宅へ引き取つて来る……。」

節「さても赤穂の面々の、忠義に徹たる四十と七士、堅く盟約いたされて、赤穂の城下を跡に見て、目ざす目的なき旅の空、京都や大阪やまた兵庫、城下の村にわび住居

京都に近き山科に、閑居なしたる大石の、指揮を今やと待ち受ける、頃は元祿十四年

三月中旬の彌生時……。」

地「矢頭長助親子においては、國許赤穂を出立なし、何處を目的と定めなき、旅の空へは出たなれど、京都に住むも面白からず、去りて國許に居らんも心許なく、流れ

流れて大阪に出で世話する人のあつて、新地堂島は野間屋久兵衛と云ふもの、店が一軒空いてあつたので、夫れを早速に借り受けて、親子はこゝに腰をおろした、その頃

からして父の長助、心地勝れずとて、ブラ〜、まだ床に就くほどのことではないが

患つて居る、右衛門七は甲斐々々しく、晝夜に亘つての介抱に、身の瘦せるのを覺えるやう……。」

右衛門「お父上、お加減は如何でござりまするか、些とお宜しうござりまするかな、長助「オウ右衛門七、この中の介抱、心づくし、嬉しう思ふが、一ツ向には

かゝしいこともないので、困り入るじや、右衛門「ナニ、御心配あそばすことはござりませぬ、今に御全快は見えて居ります、長助「イヤ〜、這度の病氣、何となく心許な

い、しかし右衛門七、京都の太夫の許から、何とも御文通は無いかの……。」

右衛門「ハイ、まだ何とも……。」

長助「左様か、これも心許ないことではあるが、しかし右衛門七、モシヤ拙者が諸士と共に、本懐を達することの出来ざるときは、其方

父と二人分、相働き呉れるやう頼み置くぞ……。」

右衛門「これはお父上、心細いことを仰せあそばしまするな、まだ御床へも就かせられぬに、モウ〜左様な息はしいことは、どうぞ仰しやつて下さいまするな、夫れより

は一時も早く御全快あそばすやう、御養生を下さいまし」と、しよげる父をば勇めて

居る……。」

長助「汝が心づくしは、長助嬉しう思ふことであるが、何と云つても拙者

は、このまゝ、回復の望みなきやう思ふのである……。

節「何の父上そのやうな、哀れなことを仰しやらず、一時も早く回復なされ、目出度う拙者どももぐに、お主のために忠義をば、つくさせたまへコレ父上、必らず心ゆるめずに……。」と。

地「勵ます右衛門七にしよげる親父、右衛門七はどうかして回復さんものと、もともと貧乏の上に、親子二人が居食して居るのであるから、薬代やら飯代やらで、一品賣り二品賣却、モウ賣るものも無くなつて居る、けれども右衛門七はそんな面もせず、日々父の介抱に努めて居るが、どうしたものか、父は程経るにしたがつて、ドツと床に就くやうになつた……、右衛門七は心配で堪らず、どうかして日々介抱いたして居るが、日が経つはごわるくなつて来る、長助は、

長助「右衛門七……。」 右衛門「ハイ、お薬を召し上りませい、

長助「イヤ、モウ薬は不要ぬ、〃、右衛門七、余は残念であるぞ、

右衛門「何と抑せぬはしまする 長助「一旦盟約いたしながら、この御列にも加はらず

むざ〃この浪宅に枯れ果つるは、千古の恨であるぞ、

右衛門「夫れは貴君ばかりではございませぬ、私とてもその通りでござりまする、しかしまだ御大病と申すでもなし、御養生次第にて回復ります、またキツと私が回復してお目かけますから、御安心なさりませ 長助「イヤ、右衛門七、汝が千萬の心づくしも、モウダノじや、トテモ全快の見込はないぞ、

右衛門「左様なことを仰しやるものではござりませぬ、病氣は氣からと申しますれば、心を確かにお持ちなさりませい」と。

節「口には云へど心では、モシヤこの世のお永訣れに、なりはせぬかと危まれ、ホロリと成りしを長助が、目さこく見とめて……。」

地「コリヤ右衛門七、何を泣き居る、武士になみだは不吉であるぞ、

右衛門「エツ、別に涙は、こぼしては居りませぬ……。」

長助「こぼさぬければ夫れで宜い、がしかし今も申せし通り、大恩受けし亡君のため必らず卑怯な振舞をいたし、矢頭の家名を汚して呉れるなよ、

右衛門「ハ、ハイ、長助「アツ、胸が息苦しい、右衛門七、水を一杯呉れ、
右衛門「ハイ」と水を持つて来る。

地「夫れから四五日経つと、モウ様子が變つて来て、厠へ立つことも出来なくなつた
右衛門七はオロ／＼仕ながら、枕許に付き切つて、心のかぎり介抱する、長助はやが
て、右衛門七、ちよつと来て呉れ、右衛門「ハイ、何でござります、
長助「拙者を起して呉れ、右衛門「ハイ」長助「夫れからそこの風呂敷包を持つて来て呉
れ、右衛門「ハイ」長助「モット近う寄つて呉れい、

右衛門「ハイ」長助は右の風呂敷の紐解く／＼、取り出せしは一領の腹まき、夫れを恭
しく押しいたゞき、右衛門七が前に置き、長助「右衛門七、能く聞けい、
右衛門「ハッ」長助「この腹巻こそは、我が父より傳はる家の寶、今汝に授け遣はすに
よつて、有りがたく頂戴いたせい、右衛門「ハッ」長助「申すまでもなくこの腹巻を授け
し上は、モハヤ我が事了り、矢頭の名譽は、汝一身に集まることであるぞ、
右衛門「ハッ」長助「拙者はこれ赤穂出立以來、太夫とともに企圖により、吉良の邸宅

へ亂入いたし、亡君の御無念を晴させ申したいと、日々心勞いたし居りしも、天われ
に幸せず今この隱家に生命を病に落す、何たる恨めしきことであるか、右衛門七、余
が心の無念さを、推量せよや」と目をしばた／＼。

節「聞いた右衛門七オロ／＼と、身を切るつらさ無念さに、差し俯向いて居たりしが
地「右衛門七やう／＼顔を上げ、右衛門「お父上、御誕御尤にござりまするが、しかし、
今に及んで左様なお心細いことを、仰せあそばして……………どうぞお心たしかにお持ち
下さいますし……………、長助「イヤ、折角のことであるが、トテモ這度は全快りはせぬ、
残念、遺憾、武士の冥利に盡きたかと、モウ疾に覺悟は極めて居る、この上の頼みと
申すは、右衛門七、斯うじや、右衛門「ハ、ハッ」長助「我が無き跡でこれなる遺書、山

科の太夫の許へ届け呉れるやう、右衛門「ハイ」長助「次には其方じや汝じや、モハヤ十
五歳の少年であれば、ものゝ差別は分りつらん、されば我が亡き跡は、我が志を受
け継ぎ、亡君の仇を報い呉れるやう、コリヤ忤……………。

節「父の心を受け継ぐは、これなり孝にして人の道、仇を討つはこれ忠なり忠と孝と

を全ういたさば、必らず義士とぞ崇められん、能く心せよ右衛門七……」と。

地「云ふも苦しき断末摩、右衛門七オロ／＼摺り寄つて、

右衛門「モシお父上、お心確かにお持ち下さいまし、モシお父上……」と、抱き起し

ても長助は、ハヤお迎への來たものか、眼もトロリガツカリと、

長助「右衛門七…… 右衛門「ハ、ハイ……」と顔を付ける、

長助「余は無念であるぞ 右衛門「ゴツ御尤でござりまする……、

長助「ガツ、エ、右衛門七、たといこの身は死するとも、屍を野路に曝すとも、タツ

魂は決して死なぬぞツ 右衛門「ハツ、ハイ」 長助「たとひ身はこゝに死するも、魂は

諸士を守護し、キツと仇をば討たせて見せる、汝も卑怯な舉動いたすなよツ、

右衛門「ハ、ハイ、心得て居りまする 長助「一番槍を人にゆづるな、

右衛門「ハイ」 長助「ア、モハヤこれにて浮世に貽る雲もなし、ア、心地よや、右

衛門七、サツ去らばであるぞーツ。

節「云ふもくるしくせぐり來る、息は次第に細り行き、やがてコトんと玉の緒の、消

えて宇宙に……。

地「アレ待つてたもお父上、私もともにお父上……と、泣けど叫べど嵐吹く、風に

無情のさそはれて、哀れいや増すばかりなり……、右衛門七は死骸に取り付き、ツ

ツと云ふのも口の中 右衛門「モツモシお父上、ナツ何故お逝去なさいました、何故私も

とも／＼に、お召し連れは下さいませぬ、無情の父上恨めしの、世のさまなりや……」

と伏しまるび、人目なければ思ふさま、泣いて／＼、泣き崩折れて了いましたは、ま

ことに悲惨な次第であります……、右衛門七は、今俄かに父に別れ、何として宜か

るべきと、父の死骸を前に、ふかき思案に暮れて居つたが……、

右衛門「オウ、モウ幾何泣げき歎しんだりとて、死なれた父の蘇生らせらるゝ筈はない

泣くべき秋でない、これから父の心を受け継ぎ、志を繼ぐは孝、仇を報ゆるは忠な

りと仰せられしことを、ふかく腸にめ込んで、精神一到、仇たる上野介の首級をあ

げ、亡君の御無念を晴さではなるまい、泣いて居る場台でない」と、キツと心を取り

直し、切めては父の亡骸を、形ばかりなりと、野送りが仕たいものと、思ふても先立

つものは金、モウ今は着のみ着のまゝ……………
節「赤貧洗ふがごとくにて、野送りどころかその日さへ、糊することも出来ざる破目となりたれば……………」

地「右衛門七は死骸を前に、兎つおいつの思案投くび、

右衛門「ハテ困つた、今は鑓錢一文も無い、父の死骸を葬るどころか、明日食ふ糧もない身の果、どうもコリヤ困つたことが出来たものだ」と、まだやう／＼に十五歳の右衛門七、忠義の志こそ厚けれ、世渡りの術には得手わるく、何として宜かるべきと、思案に思案を重ねたが、宜き分別も出て来ない、ところへ家主の野間屋久兵衛、滞りの店賃の催促とてか、ガラリと切戸を引き開けて、

久兵衛「今日は……………」 右衛門「オツ、これは家主さまでござりまするか、ようこそお出で下さりました、サツ、どうぞお上り下さいまし 久兵衛「イヤ、あまり能うも来ませぬじやが、エー、跡のあひの店賃を、約束の日じやからまわりました、

右衛門「コレは、わざ／＼御足を運ばしまして、恐れ入りまする、御約束は申しました

が、今日と云ふわけにもまわりませぬ 久兵衛「参りませぬ、たゞまわりませぬでは、此方の方がまわります、一体どうなさいますお積りで……………」

右衛門「ハイ、實は、今日は、少し取り込んで居りますので、何れ何分ども、此方から申し出でまするでござりますから、どうかお引き取りを願ひまする、

久兵衛「お取り込みはそつちの話、此方はさら／＼何日までも、べん／＼だらりと放つて置かれましたは、困りますので……………」 右衛門「御道理ではござりまするが、何分にも

今日は取り込んで居りますから……………」 久兵衛「シテお取り込みとは、何でござりまするな 右衛門「ハイ、實は、只今父が死去しましたので……………」

久兵衛「エツ、ソ、そんならお父上がお死去あそばしたので……………」 右衛門「ハイ、夫れで途方にくれて居るのでござりまする、

久兵衛「夫れはマア／＼お悼ましい、夫れならさうと早く仰しやつて下さいますればお宜しいのに、私も分らぬ人間ではござりませぬ、イヤ宜しい、待ちませう、人の愛に附け込んで、因業なことは申しませぬ、待ちます、／＼、待つて上げます、夫れから

また今夜は店子とも相談いたし、夜伽もして上げます、また何かと御不自由なことであれば、言つてお出でなさい、及ばずながらお世話もいたしませう、お力にもなりませう」と、飛んだところで幡隨を極める、右衛門御親切に、有りがたうぞんじまする、何分ともに宜しくお願ひ申しまする 久兵衛ア、宜しいともく、しかし必ずお力をおとされますなや、一旦死んだ方は、めつたに返つて来られることはないのじやから、奇麗にお諦めなさい、夫れが佛の爲じやから……、

右衛門「ハイ、有りがたうぞんじまする、家主はそのまゝ歸つて了ふ……」。
節「跡に矢頭の右衛門七は、思案に首を俛れて、死骸と身の越方、行末などを思ひ遣り、殊には迫る今の難義……」。『わたる世界に鬼はない、今の家主の話では、まんなら脈の無いでもない……』。

地「思案の末に右衛門七は 右衛門コレも武士としては、まことに耻かしいことではあるが、脊に腹は替へられぬ、今の家主の言葉では、まんなら知らぬ顔もせられまい、ウム、そんなら一番交渉つて見やう」と思案を極めて右衛門七は、父より受けた腹巻

を、小脇に抱へて家主の家へと遣つて来る……直ぐに案内を乞いますると、久兵衛夫れへ出てまゐり 久兵衛「オウ、これは右衛門七さまか、何か用かな、
右衛門「ハイ、些とお願ひの筋がありました…… 久兵衛「ア、左様か、そこは端近ちやサア、此方へ上らつしや 右衛門「ハイ、有りがたう存じまする、

久兵衛「で何じやな、用と云ふのは…… 右衛門「ハイ、實はまことにお耻かしき義ではござりますが、父が死去いたしましたも、手許不如意にいたして、葬送いたすことはおろか、明日の糧にも支へる身の上でござります、

久兵衛「ウム、成るほど 右衛門「つきましては、家賃のお支拂もいたさず、斯やうなことを申し上げるではないのでござりますが、切めては葬送だけなりともいたしませぬと、父に對して子たる道が立たぬのでござります、

久兵衛「イヤ、道理のことござる 右衛門「斯やうなものを差し出しましては、まことに失禮ではござりますが、これなる腹巻を差し上げ置きますれば、何卒些少御恩借が願ひたいのでござります……」と右の腹巻を差し出した、久兵衛は俠氣のある男

こいつを聞くと、ボンと胸を打ち、久兵「イヤ宜しい、羽織の紐ではないが、この久兵衛が胸にある、よろしい、如何にもお立て替へ申しませう、五兩もあればよろしからう、右衛門「ハイ、結構でござりまする、久兵「よろしい、しかしお前さまもお武家、町人から無爲で金を借り出したとあつては御出世の妨害ともなりませうから、この腹巻とやらは預つて置きます、いつでもお金の出来たとき、受けにお出でなさい、

右衛門「ハイ、有りがたうぞんじまする」と。

節「五兩の金を懐に、我家へ歸つた右衛門七郎の、萬事は家主の差配にて、夜伽も無事に翌る日に、形ばかりの野邊送り、なみだとともに済される。

地「さて野邊は首尾克く済んだが、済まぬは諸士の様子でござる、されば矢頭の右衛門七郎は、父が今期の遺書を、懐中なして京都なる、山科に大石を見舞ふべく、同士の様子、江戸の模様も聞きたしど。

節「旅の用意もそこ〜に、吹田の桃を右手に見て、ハヤ茨木も打ちすぎて、名に高槻の陣屋あと、左手に見つ、山崎の、天王山にその昔、主君の仇たる光秀を、たゞ一

戦に打ち破り、仇を報ひし豊公の、古蹟に心やりつゝも、一時も早くこのやうに、報ひんものと山を越へ、川をわたつてやう〜に、山科へこそ着きにけり……………。

地「かねて知れる大石のわび住居、ズーツと這入つて訪問ふと、立て出でたのは主税良金……………、夫れと見るより良金は、主税「オツ、お珍らしい右衛門七郎の、能うこそ

狂せられた、サツ、お上り下されたい、右衛門「これは若さま、お久しうござりまするまづは御健勝にて祝着に存じまする、良金「ハ、御身も御壯健で何よりのことござ

る、右衛門「太夫ごのにも御健勝に……………、主税「ハイ、お陰をもちまして……………、右衛門「夫れは嬉しうござりまする、エー、實は少し太夫ごのに、御願ひの筋がありま

して……………、主税「左様でござるか、しばらくお控へを願ひまする、地「主税は右衛門七郎を待たして置いて、内藏助に斯くと通じる、直に右衛門七郎座敷

へ通される……………、右衛門七郎ごしに兩手を支へ、右衛門「コレは太夫ごの、お久しうござりまする……………、内藏「オウ右衛門七郎ごのか、サツ、ズーツと進まれい、

右衛門「ハイ、有りがたうぞんじまする、内藏「わざ〜の出府、火急の用でも出聚た

のかな 右衛門「ハイ、少し……」と打ち萎れる。

内藏「不審と思ひ内藏助、キツと右衛門七打ち眺め……」

地「如何せられたな、仔細ありげな様子じやが……」

右衛門「ハイ、太夫、まことに残念なことをいたしましたしてござりまする、

内藏「ナニツ、残念なりとは……」 右衛門「委細は之れでござりまする」と差し出す遺

書「……」 内藏「ハテ……」と手に取ると 内藏「ナニ『遺書の事』……ウム、さて

は長助ごのには、アノ死去されて……」 右衛門「ハイ、恨を呑んで……」

内藏「ウム……」封切つて読み下すと、何も書いて居ない、たゞ一詩を賦してある

のみ。夫れは。

『嗚呼天之命如之心中之大望自是盡餅矣』

内藏「讀み了つたる内藏助、あはれはいと増さり来て、目をしばたいて居られたが

地「ウム、さては志を遂げずして、病死せられたことであるか、ア、浮世とは云ひ

ながら、哀れな次第ではあるわい」とソツと目を拭ふ、

右衛門「太夫ごの、この上は拙者父と二人分相働きままする、一時も早くかねての企圖を
内藏「ア、コリヤ、滅多なことを申すな、壁に耳ある世の中じや……」と一段聲
を張り上げて 内藏「コリヤ右衛門七、拙者においては仇討などは、思ひも寄らぬこ
と、たゞ斯くのごとく、月、雪、花を朋友として、餘生を送るが當世じや、詰らぬ義
理立て、不向じやぞ、ワハツハツ、……」

右衛門「エツ、何と仰しやいませ、今の御言葉、スリヤ御本心でござりまするかツ」と
儼然となる 内藏「ハ、ハ、ハ、ハ、右衛門七が鹿爪らしう、何を申す、本心も虚心も無い
コリヤ右衛門七能く聞けよ、自体故殿さまが御短慮からして、我々斯く浪々の身とな
り、難澁をいたすのであるじや、御家を思ひ、御身を思ひ、また家來の身を思召さば
決して御短慮あるべきところでない……」

内藏「なる堪忍は誰もする、成らぬ堪忍、するが堪忍と云ふではないか……」

地「御前さまは一旦のお怒りに、五萬三千石を棒に振られた、之れを思へば我々は、

御前をお恨こそすれ、御前のために盡すことは一もないのじや、かるが故に拙者にお

いても、成るほどの當座こそ、城を枕に討ち死なさん……とは、思ふても見たの
じやが、考へて見ればこれも犬死じや、腹を切れば痛い、血が出る、死ぬのは止めじ
やと、モウブツツリと武士は止めにして、今では斯うしてこの山科に土地を買い求め
餘生を楽しく送る所存、されば其方も、詰まらぬ義理立て止しにして、まだ壯年の身
であれば、何れへなりとも仕官のいたし、身の榮達を圖るやういたせ、夫れが當世で
あるぞ」と。

節「虚偽か眞實か知らねども、聲張り上げて言ひ聞すは、他處へ知れよの心意氣、深
き謀慮あるぞとは、知らぬ右衛門七齒を剃き出し……」。

地「エツ、汚ららしい、太夫どの、お身さま、ソツ、ソレ御本心で仰せられまするか
ーッ」と詰め寄つて来る 内蔵「ハ、、、ハ、、、右衛門七、お前の目は大きいの、さう睨
まれると内蔵助、恐くてならぬ、武士止めて歌舞伎役者になつたらどうじや、キツと
出世をいたすぞ 右衛門「エ、ソ、その言葉はあまりと云へば……」。

内蔵「また内蔵助、生れてまさに四十三年、虚偽と坊主の頭は結ふたことが無いのじ

や、マアさう怒らすに、家に歸つて思案のせい……なア……」と話を切つて聲を
低め 内蔵「死を急ぐが忠義ではないぞ」とまた聲張つて、

内蔵「死んで花見がなるものか、ハ、、、ハ、、、しかしマア一杯呑まう、ア、コ
リヤ主税、々々、酒を持つてまゐれ、酒々々々々々」と他愛なく、

地「内蔵助の眞意は分らぬが、まるで右衛門七などは相手にならない、煙に捲いて了
つて命じた酒の来るより早く、ガブ／＼獨酌で煽つて居る、そのさままるで酒亂の人
でもあるかのやう、一目見て右衛門七は、アツとばかりに驚かれ、兎角の返應もなく
茫然いたして居る……、コリヤ右衛門七、一盞まゐらうかの、其方飲けるかの、

右衛門「ヤイ、手前は酒は呑みませぬ 内蔵「ハ、、、ハ、、、厭ひかの、
右衛門「飲みます、飲みまするが、斯かる忌はしい、汚れた盃は……ハ、ハイ、頂く
ほど性根は腐つては居りませぬ……」とグイツと一本まゐる、

内蔵「ハ、、、ハ、、、飲まぬと云ふものを、強いて侷めはせぬ、テモ御身は融通の利かぬ
男じやな……ハ、、、ハ、、、 右衛門「太夫どの、拙者はモウお暇いたしまする、

内蔵「マア宜いでないか、一杯呑んで行け。右衛門「イエ、左様な御酒は頂きませぬ。内蔵「では勝手にいたせい、じやが、必ず短慮を起しては不可ぬぞ、短慮功を爲さずと云ふのを忘れるなよ……」とまたすつと崩けて「ハ、ハ、ハ、これは詰らぬことじや、サア、酒を呑まぬ疱瘡神は、拙者の邸宅に用はない、歸れ、」

右衛門「エツ、仰せなくとも歸ります、斯やうな穢らしい邸宅に永居いたさば、ともに精神が腐ります……」と右衛門七はまだ十五歳の若さかり、世の波風に當つたことが少ないから、経験が無い、ふかき内蔵助が慮り、言を巧に、あやのあるのに心着かぬは是非ないこと、一圖に内蔵助の心の底から、斯んなことを云ふのかと思ふと、モウ腹が立つて、堪へられぬ、自己の忠義な心から、頼りに思ふ内蔵助の口から、斯んな心細いことを聞いたのだから、モウ、思々しくつて、堪らない、ブツ、怒つて山科を跡に、大阪の浪宅へと歸つて来る……家に歸つて思案をすると、また危まれることもある、内蔵助の眞意が、眞に腐つてあるのか、どうか、疑ひの雲が、胸を掩ひかゝつて、頭腦はメチャ、に掻き亂れる、

右衛門「ハテ、どうしたことであらう、一旦は怒りに任し、太夫に向つて暴言を吐き、引き取つたことであるが、思へばこれも太夫の眞意でなく、世を欺き、拙者の誠意を引かる、御手段であつたかも知れぬ、ウム、こりやア夫れに極つて居る、ア、さうと知つたら、彼んなに怒るのではなかつた、さぞや太夫ごのは、腸の知れた奴だとお卑下みなされたであらう、ア、コリア豪いことをして退けた」と思案に思案を重ねると、前後の様相からことばの端々に、腑に落ちぬことがある、コリヤ今一度山科へ立ち越え、御詫をせではなるまいと、身支度なさんとするところへ、一人の飛脚が飛んで来る……、ハイ、お手紙……」と取り出す手紙、右衛門七受け取つて封切つて讀み下すと、右衛門「ウム、さてはもはや企圖の運びの付いたのか、只七ごのよりの招きの文、これによりて見ると、先の太夫のお言葉は、全くこの身の心を引きたまふ床しき御心であつたのだな、左様とは若輩の身で、出すがた暴言、まことに耻かしき次第である、ア、許させたまへ太夫ごの、全くこの身の至らぬところでござりました……」と。

「はじめて知つた大石の、深き考慮斯うあらうとは、今更らながら耻かしい、許さ
せたまへと東の空、打ち仰がれて伏し拜む……………」

地「さて、いよく江戸に降ることゝなると、モハヤこの家もたゝまねばならぬ 夫
れにしても困つたのは、父の紀念のアノ腹巻、ハテ何として宜かるべき、困つたこと
であるわい」と根が貪乏人のかなしさ、一文の金も無い、ト云つて父の大切な紀念の
品、このまゝ、打ち捨てるは、父に對して不孝の一つ、思案に盡きて、

右衛門「困つたなア、只七ごの、御文通により、幸右衛門ごのともく、一時も早く江
戸に下り、諸士に對面いたしたいが、差し當つてのこの難義……………」

「目的のためには、手段を選ばずとやら……………」

地 右衛門七は思案を極め、百計盡きて、そのまゝ家主久兵衛の家へと、遣つて來る
直ぐに案内と云ふと、久兵衛立ち出で 久兵衛「オウ、これは右衛門七ごのか、サツ、何
うか此方へ……………」 右衛門「ハイ」と座敷へ打ち通り、さて。

右衛門「斯かることを申し上げては、まことに恐れ入りますが……………」

久兵衛「何です右衛門七ごの……………」 右衛門「實は少しお願ひの筋がありまして……………」

久兵衛「フーム、お金のことかな 右衛門「ハ、ハイ、イヤ差し當つて、金子ではござり
ませぬが、先にお預け申しました、彼の腹巻、少し見合せたきことのあるりますので
しばらくの間、お借し下されたいと思ひまして……………」

久兵衛「何、デハ、彼の腹巻を借して呉れと云はれるのかな、

右衛門「ハイ、しばらくの間でござりますので、ごうか……………」

久兵衛「イヤ宜しい、彼の腹巻は、もどく貸金の抵當と云ふわけでもないから、宜し
い、借して上げませう……………」と持つて來る、右衛門七は押しいたいて、

右衛門「では恐れ入りますが……………」 久兵衛「ア、く、遠慮なしに持つて行きなさい、
右衛門「有りがたうぞんじます……………」と腹巻受け取つた右衛門七、家へと歸つて
來る、思へば武士にあるまじき、人を欺り品物を取り出す、これまことに強請強盜と
少しも異るところがない、右衛門七はウラ耻かしく……………」

「罪が身を責む右衛門七は、死せし後までこの事を、世の人々に知られては、武士

の恥辱となるものを……。

地「左は云へ今は脊に腹は替へられぬ、苦しきまきれに取り出しは出したもの、心の誠實が身を責めて、頭を掻きむしらるゝやうになつて来る……、右衛門七キツと思案を極め、右衛門「ウム、左様だ、遅疑する場所でないぞ、時刻遅れては相成るまじ」と右衛門七はサラ／＼と一書を遺して旅の用意……。

節「げに大行は細瑾を、かへり見ずとは古昔のをしへ、心を決し右衛門七は、あづまの空へと一散に……。

◎岡野金右衛門傳 (吉良家圖面取り)

節「世の中は、色と慾との両道を、掛けてぞ祈るその中に、さてまたこれは義士の中石部けんけつ金かぶと、堅造と名を取りし、岡野金右衛門金秀が、忠ゆへ心柔しくも慣れぬ戀路を餌として、吉良家の繪圖を手に入れし、たぐひ稀なる物語り、その名も堅き金右衛門、柔かにして身を辟く、苦心的一幕、さらばこれから演べ上げる……。

地「本所吉良家の門前に、酒と小間物の店を開業して居る、小山屋善兵衛と云ふ商人がある、これは義士の一人神崎與五郎則休が、敵の様子を窺ふ手策にて、手代番頭には千馬三郎兵衛の原之助、杉野十平次の九郎右衛門、岡野金右衛門の九十郎の三人が入り込んで、まめ／＼しく働いて居る、殊に金右衛門は頗ふつた堅造ではあるが、當年二十四歳の、水の垂るゝやうな、女にしても見まほしき好男子、四邊近所の小娘や、乳母下婢に至るまで、ワツシヨ／＼と肩入に遣つて来る、

女「チヨイとこの丈長を下さい 金右「へエ／＼、これは入らつしやいまし、へエ／＼これでございまするか」と手に取つて渡す 女「ハイ、お幾何……、

金右「へエ、五文で……、女「ではこれを……、」と十文出す、

金右「エ、お剩餘を差し上げます 女「ア、お剩餘なんか入りませんよ、

金右「イヤ夫れは不可ませぬ、私方では五文に商つて、十分口銭があるので、その上頂きましては、冥加に盡きます……、」と無理に手わたす、一事が萬事、斯う云つた工合に何事にも手堅い、女共は自烈体さうに、毎日／＼店へ、不要ぬものまで買ひに

来る、で金右衛門の居ないときには、張合がない女「ハイ、この白粉を貰いますよ、

杉野「へエ〜まいご有りがたうさまで……………」

女「九十郎さんは……………」杉野「ハイ、今日は仕入にまわりましたので……………」へエ、

女「オヤ〜さうでございますか 杉野「マアお遊びなさいな、

女「イエ〜今日は急ぎますから……………」トツ〜歸つて了ふ、

杉野「オヤ〜げんぎんな女だ」と十平次はブツ〜呟いて居る。

節「戀に上下の隔てなし、吉良家の奥を勤められる、お静さんと云ふ、鬼も十八蛇も二十歳、番茶も出ばなの十八女、一目岡野の垣間見て、古い奴だが戀やまひ、この身女と生れたからは、たつて一夜でも彼のやうな、可愛い殿御と添伏の、身は姫御前の果報ぞと、二十四孝をまるだしに、アノ慕はしい金さんと、夜の目も寝ずに戀ひ慕ふ地切めては御顔を見てなりとも、思いを休めんと、毎日〜店へ遣つて来る、

しづ「叔父さん今日は……………」奥五「オツこれはお静さんですか、宜うこそ、マアお遊びなさい」吉良家のものご云へば、決して粗畧には仕ない、

しづ「ハイ、有りがたう、アノ今日は金さんがお見えなさらぬが……………」

奥五「ハイ、朝から仕込みにまわりましたので……………」

しづ「左様でございますか 奥五「今に歸つてまわりますから、マアお遊びなさい、

しづ「ハイ、有りがたう……………」奥五「時にお静さん、お前さんは古く御奉公をなさい

ますので……………」しづ「ハイ、モウ御奉公に上りましてから、五年になります、

奥五「五年……………」夫れはマア御辛抱なこと、しかし矢張り貴女もお奥をお勤めなさい

ますので……………」しづ「ハイ、奥五「御女中も数多お召し使ひでございますうな、

しづ「イエ〜大殿さまはお節儉い方に入らつしやいますから、女中は妾と外に二人

たつた三人切でございます 奥五「夫れはお豪いことでございますせう、

しづ「ハイ、なか〜忙しうございますので……………」父も宜い加減にお暇を願へと申し

て居りますやうなことで……………」奥五「オヤ〜左様で……………」失禮ですがお父さまはど

ちらさまで……………」しづ「ハイ、兩國の米澤明でございます……………」

奥五「矢張り御武家さまで入らつしやいますか しづ「イエ町人、町人も働ぎ人、大工

でございます。奥五「オヤ、左様でございますか、何故ソンなお暇を頂けると云はれますのですかな。しづ「ハイ、實は私は惣領でございますして、家を相続せるとか何とか申しますので……。奥五「夫れは結構、お身の落着で、御暇を願ひなされたら宜いではございませんか。しづ「夫れが伯父さま、大殿さまには、妾なり父が御恩を受けて居りますので、さう急にはお暇も願ひかねますやうなことで……。

奥五「へエー、御恩をお受けあそばしたとは、夫れはまたごんなことでございするな。しづ「別に大したことではございませぬが、この間御邸宅の御普請を、父が仰せ付かりまして……。奥五「へエー、では御邸宅の御普請を、貴女のお父上さまがなさいましたので……。しづ「ハイ、左様なんでございします。

奥五「夫れはマア御辛度なことで……。しかし夫れはソレ、是れはコレ、御身の落着でございますからな。しづ「でも妾は否でございします、家など持つのは……。奥五「ではまたお可愛のでもお有りなさるので……。しづ「知りませんよ」とサツと顔を赤める。

節「犬も歩行けば棒に當る、圖らず聞いたおしづの素性、詮すべあれと奥五郎は、心のたくみ色にも出さず、素知らぬ顔の半兵衛を極め込む……。

地「しばらくすると金右衛門、大きな風呂敷をかついで歸つて来る……。

金右「ヤアこれはおしづさま、宜うこそ、宜い白粉を仕込んでまゐりましたから、お買ひ下さい」となか／＼商賣は甘い……。しづ「夫れはマア結構なことで……。」と妙な目付をする、奥五郎、十平次、三郎兵衛は、ハ、ン、こりやアおしづが、大分お出でゝるわいと見て居る、金右衛門はソンなことは夢にも知らないから、

金右「おしづさん、ごうです、この白粉は……。

しづ「結構でございます」と寄つて来て、可訝しな手付身振をする、サア金右衛門が歸つたと云ふと、乳母下女、子守まで、ワツシヨ／＼と押し寄せて来て「金さん」と取り巻く、金右衛門面喰つて了ふ。

節「要こそあれと奥五郎は、杉野、三村ととも／＼に、額を鳩めて相談は、その夜間野を奥の室へ、車座となつてひそ／＼ばなし……。

地「與五郎ニツコと打ち笑ひ 與五「時に岡野氏、御身の働くべき時機が來り申したぞ

金右「働くべき時機とは…… 與五「外ではござらぬ、彼のしづ女のことではござる、

金右「しづ女とは……ウム彼の吉良家の女中の、

與五「左様、しづ女が我々のため大なる關係人でござるによつて、御身に御盡力が願

ひたいのでござる 金右「フーム、夫れはまた妙じやな、しづ女が關係人とは……、

與五「左れば、彼れは御身に御思召がござる 金右「御思召とは何じや、

與五「サア、ソノ、御思召と申すのはな……マツまア御身に彼がほの字でござる……

金右「ほの字とは何じや 與五「困り申したな、平たく云へば御身に彼が首ツ丈でござ

る 金右「いよくもつて分らぬ、首ツ丈とは何でござる、

與五「どうも金右衛門どの、御感じの鈍いには恐れ入りましたな、オイ、杉野氏

代つて呉れ、どうも不可ない 杉野「ハ、ハ、ハ、ハ、與五郎どの下手い、斯う云へば宜

いのでござる、岡野氏、御身にしづ女が惚れて居るのじや、

金右「エツ、しづ女が拙者に惚れ申した、丹は怪しからぬ、不埒な奴でござる、荷に

も武士たる拙者に對し…… 杉野「サツ、さうものは堅く云つては不可ない、はなし

は此處じや、その御身に惚れて居るしづ女が、吉良家の鍵を握つて居るのじや、

金右「夫れは握らうと握るまいと、拙者の知つたことではない、

杉野「サツそこじやて、彼が親は去る頃吉良家の普請を受負したとの事なれば、必ら

すその繪圖面を所持したすこと、心得居る、夫れを御身の手によつて取り寄せて貰ひ

たいのでござる 金右「フーム、然らば何か、そのしづ女の親が、吉良家の繪圖面を所

持いたすによつて、夫れを取り寄せよと云はるゝのか、

杉野「左様でござる、吉良家の邸宅の間取を知るには、夫れにましたることはござら

ぬ 金右「イヤ分つた、宜しい、しかし何として取り寄せ然るべきか、この義當惑いた

すのでござる 杉野「夫れは何でもないこと、幸ひ彼が御身に執心いたすによつて、そ

こはマア、その、何とやらで、のう與五郎どの 與五「左様々々、そこはソノ、ウンウ

ンでもつてな……岡野氏 金右「何だか御身達の云ふことは、拙者には些とも分らぬ

與五「困るな、外でない、マア色仕掛でもつて……皆まで聞かず、金右衛門頭色

變へて目を刺き出し、金右「御両所、怪しからぬことを仰せられな、喝しても盗泉の水を吞まずとは儒者の誠、如何なれば汚ららしい、色仕掛などは、聞くだにも忌はしい、エツ、怪しからぬ……」とブツ／＼怒る。奥五「ハ、ハ、ハ、ハ、金右衛門どの、御身のやうに左様怒つては不可ぬ、何も故主への忠義じや、忠義のためとありやア、随分操を破り操を立てたためしもある、一時の恥辱も將來のためには代へられぬではないか、何をいたすも故主への忠義、こゝは一番ウンと云つて貰ひたい、

杉野「この役目、御身ならでは勤まりがたし、色男の役廻りでござるから……、金右「色男とは何だ、男子七歳にして席を同じうせず、苟も武士たるものが、女に色仕掛をもつて……」奥五「サツ／＼、サツ其處じやて、淺野家御存立の場合なりやア武士の体面も全うせねばなり申さぬが、今は故主となられ、御家は絶斷、その恨を晴さんため、我々斯く苦心いたすのでござる、されば目的のためには手段を撰ばずと申す、ウンと云はれい、杉野「承知して貰ひたい」と、左右から説き勧める、金右衛門も忠義を眞正面から振り冠られては、グツともいへない、不承々に承知する、

金右「イヤ分つた、この役目なか／＼重い、拙者のためには腹を切つて死ねと云はる、より尙ほつらい、奥五「そこが忠義のためじや、我慢せられい、

金右「ウム、しかし拙者はまた女としては、母より外に接したことがないが、何として、彼に……」奥五「サア、そこは杉野氏が御承知、杉野氏はこれまで多くの女に接し、失敗のみを重ねられて……」杉野「コレ／＼奥五郎どの、餘計なことを云はれな、奥五「ハ、ハ、ハ、これは失禮、しかし恥を云はねば理が聞えぬ、

杉野「際どいところで素破抜きはひどい、しかし岡野氏、案じるより産むが易いと申す、殊に彼れは十分御身に思召があるのじやから、事は拂り易い、それは斯う／＼云ふことにいたさうでないか」と額を鳩めて相談する……

筋「太刀を取り、軍馬に跨り戰場に、生命を捨つるは武士の毎、少しも厭ひはいたさねど、女をタラす方便とは、まだ踏み慣れぬ金右衛門、これも故主への忠義かと、心に弓矢八幡を、祈りながらに覺悟を極める……」
地「丁度その翌日、おしづはいそ／＼として遣つて来る、

しづ『金さま今日は……』ソラ来たそばかり金右衛門、何だか極りがわるい、毎日は違つて尻が落ち付かない 金右『オツこれはおしづさままでござりましたか、お早うさま……』しづ『どうか仕なすつたな金さん、大層お顔の色がわるいじやございませぬか……』 金右『イエ別にどうもござりませぬが、大方寝が足らなかつたのでございませう……』スルと其處へ與五郎が 與五『金さん、私は一寸用達に行つて来るから、店を頼みますよ 金右『オウ、行つて入らつしやい……』 與五郎はブイツと出て行つて了ふ、ついで三村次郎右衛門が 三村『金さん、一寸たのむよ、仕入れに行つて来るから 金右『ア、行つて入らつしやい』そこへ杉野十平次が、

杉野『おしづさん、ちよいと店を頼みますよ しづ『妾知りませぬよ、

杉野『マア……さう云はないでしはしの間頼みますよ、

しづ『知りませぬよ 杉野『金さん頼むよ』ブイツと行つて了ふ、千馬三郎兵衛もノコ

くと出てまゐり 三郎『金さん、チヨボくだよ、

金右『チヨボくして何だえ 三郎『前と同じだと云ふことよ、

金右『何ーんだ』ブイツと出て行つて了ふ、跡には金右衛門とおしづの兩人、まだ朝の間だから人通りがない、おしづは耻かしさうに、モチくして居る、金右衛門も何となく体裁がわるい、お互に初戀と云つたやうなもので、ものを云ふのも耻かしさうにいたして居る しづ『金さん 金右『ハイ しづ『何で今日にかぎつて皆さまが、言い合したやうに、出て行きなすつたのですか 金右『サア、大方氣を利かして出て行つたのでせう しづ『エツ 金右『サア、ごうもハヤおしづさん、お恥かしい次第でございます』と顔を赤くして俯向いて了ふ、おしづはモウ氣がウツトリとなるやうに、ジーツと見惚れて居つたが、これも顔を眞赤にして、差し俯向いて了ふ、しばしは啞の根競べと云ふところ、ところへ與五郎がブラリと歸つて來ると、この体に、困つたなど云ふ思ひ入れ 與五『もちよつと頼みますよ』とまたのこくと出て行く、

金右『しづさん しづ『ハイ何でございます 金右『二階へ入らつしやいませぬか、宜いものを見せて上げます しづ『ハイ、どうぞお見せ下さいまし、行きますわ、

金右『私と一緒にいらつしやいますか しづ『行きますわ、

金右「面白いものですよ、しづ「早く見せて頂戴……」金右衛門は思い切つておしづの手を取り、トン／＼と二階へと登つて行く……トン／＼とトン……」

節「戀ならなくに金右衛門、忠ゆへ心鬼となし、世にも恐ろし女戒を破り、少女をタラす手策の幕、巫山の雲か將た雨か、濡れて嬉しい四疊半……」

地「門口から杉野十平次、内を覗いて、杉野「ちよつと頼むよ」と行つて了ふ、すると三村次郎右衛門が、三村「エヘン、ちよつとたのむよ」とちよつと覗いて行つて了ふ、そいつがバツタリ途中で鉢合せ、奥五「ヤア各位、

三村「どうじやな首尾は……」杉野「どうも可訝しい、奥五「何が可訝しい、杉野「何が可訝しい、どうも可訝しい、

奥五「ヤア、しづさんが歸つたせ、ソーラ歸れ／＼」とドヤ／＼と歸つて来る、奥五「只今、杉野「大きに遅なりました、三村「まことに失禮……」、

金右「イヤこれはお歸り……」奥五「どうでござつた首尾は……」、金右「イヤどうもハヤ、斯やうな切なきことはござらぬ、全身汗みづくになり申した

奥五「ハ、ハ、それはハヤ氣の毒千萬、シテ首尾は……」、金右「されば、まづ今日が皮切でござるによつて、宜い加減に切り上げました、

奥五「左様か、マア／＼氣永に、さどられぬやう、頼み申すぞ、金右「宜しうござる、これも忠義の爲とあれば、否みもなるまい」と苦笑ひ。

節「如何に忠義のためとは云へど、かねて磨きしこの腕に、刀振り冠つて敵の首、得討もせずにかい、女をだます具となつたのか、さても岡野金右衛門、武運つきたる

ことなるかと、心に歎く潔白は、實にも尊き志想なり。地「四五日して或る朝のこと、おしづは嬉しさうに店前に這入つて来る、

しづ「金さん今日は……」金右「オッおしづさん、マアお上り、しづ「ハイ有りがたう、伯父さま達は……」金右「みな仕込に出ました、マアお遊び

なさい、しづ「ハイ、有りがたう……」金右「時にしづさん、お前さんに私聞きたいことがあるのですが……」しづ「何ですな、聞きたいことは……」、

金右「お前さんのお父さまは、大工さんだつてねえ、

しづ「ハイ、お恥かしい汚しい稼業の娘、愛想が盡きましたか、

金右「これはまたキツイ云いやう、たとひ枕は替はさすとも、一旦夫婦約束した上は何の愛想が盡きて宜いものぞ、しづ「夫れが眞なら、妾ごんなに嬉しいでせう、ねえ金さん……」と恍惚となる、金右「なアしづさん、妙なものじや、縁と云ふものほど不思議なものはないねえ、しづ「へー、何故でございます、

金右「お前さんの親が大工で、私の親も同じく大工……、

しづ「エツ、ソンならお前さんのお父さまも、彼の大工さんで……、

金右「ア、しづ「妙ですねえ、金右「夫れについてしづさん、昨日父からコンな手紙がまわりました」と怪しげな手紙を読ませ、金右「聞けばお前さんの父さんは、吉良さまの御普請をなすつたさうで……この手紙にもある通り、今度去る御大侯の御仰せを受け、御邸宅を御普請なさるについて、江戸の立派な御邸宅の繪圖面を手本に仕たいとのぞみ、聞けば吉良さまはなかくのお凝り性、御邸宅の構もなかくに見事なものであらう、切めてはこの邸宅の繪圖面でもあれば父がさぞかし喜ぶことであらう

と、ツイこんなことを聞いて見ました、モシヤ父さまのお手許に、圖面でもあるならば、ソツと私に見せて欲しいので……」と。

節「まこと虚言打ち交せて、聲をひそめて掻き口説く、聞いた此方のおしづごの、惚れてく惚れぬいた、可憐い男のこのたのみ、何は措いても聞かねばならぬ、左は去りながらこゝに一つ、困つたことが出来たと云ふは……」。

地「おしづはホツと吐息吐き、しづ「金さん、ソンなことぐらゐは何でも無いことございしますが、困つたことはその繪圖面……、金右「繪圖面は無いかな、

しづ「イヤ有ります、たしかに父が持つて居ります、がこの繪圖面は、吉良さまの仰せにより、たとひ何人にでも見せてはならぬと、堅く仰せ聞けられました、父が大切に藏つて居りますので……、金右「フーム、夫れは困つたな、何とか取り出す工風は……しづ「サア、他の事なら兎も用も計いまするが……、

金右「では手に入らぬと云ふのかな、しづ「どうもこればかりは……、

金右「左様か、然らばモウ是非に及ばぬ、私も父に斯うと受合ふておいて、今更ら出

來ぬなんて、ソんなことは云はれませぬ、モウ宜しい、お前にはたのみますまい、ソノ代り、かねての約束も今が限りじや しづ「エーッ、ソ、そりやア金さんあんまり胴慾な……」 金右「でも親のためには代へられぬ、私はこれから國へ歸つて、父に申しわけに、首を縊つていも死にます しづ「ソ、それはあんまりお情けない……、」

金右「イヤ一旦斯うと覺悟を極めし上は、モウ決して止りませぬ、サアそこ退きなさい、これから直ぐに國へ歸ります……」と起ち上る……。

節「その手にすがりおしづごの、おろく聲もかすれ勝……」。

地「マツ待つて下さいまし、高が繪圖面一枚のため、可憐しい夫の金さんを殺しては妾は女の道が立ちませぬ、コレ金さん、マツ待つて下され、何とかしてお前の心の濟ひやう、その繪圖面を手に入れやうから……マツく待つて下さいまし……」とオロく聲、べめたそばかり金右衛門、心の喜び色にも出さず、

金右「何、ソんな手に入れて下さるか しづ「ハイ、どうと加して手に入れませう……」 金右「ウム、嬉しい、夫れでこそ私の妻、女房ほどの價値はある、豪い、ではど

うかたのむぞ しづ「ハイく宜しうございます、キツとお手にわたします、

金右「しかし夫れは何時の事じやなしづ「ハイ、今夜の亥刻を相圖にして、此處へ妾が持つてまゐります 金右「何、では今夜の亥刻の刻限に、此處まで持つて来て呉れるか しづ「ハイ、キツと持つてまゐります 金右「では何分ともに頼むぞよ」と金右衛門言葉を番へておしづを返す……。

節「戀に心を暗まされ、夜道をいとほおしづごの、可憐しい良夫のためとありや、寒き夜風も苦にならず、本所の邸宅をソツと出で、兩國の父の宅へと歸つて来る、戀の奴のおしづごの。

地「お母さん、今歸へりました 母「オッ、しづか、今時分何だね」。

節「云ふ聲聞いておしづごの、奥の室さして打ち通る、さてもこれからおしづごの、吉良家の繪圖面盗み出し、岡野の手許へ引きわたす、さればいよく極月十四日、吉良の邸宅へ討ち入の、その日において金右衛門、いまだ枕は交さねど、一旦誓ひし女房おしづ、一生のわかれをいたされる、哀れな幕のたんものは、またの御現に伺ひま

する……………

◎神崎與五郎傳 (取替子の段)

節「あづさ弓、はるちかければ、このうへに、ゆきをも花の、ふいきとも……………見ん……………」

地「さて、神崎與五郎則休殿の傳記の中の一巻の、智慮に富みたる一席を、事永くとも辯じ上げます……………」

節「子を見ること、親に如かずとかや、さても神崎與五郎ごのは、悴の與三郎の我儘を、矯正さんものとひたすらに、心を痛め居られたり……………」

地「與五郎の悴與三郎は、當年取つて十三歳、腕白ざかりではあるけれど、これはまた情ない、性來我まゝ氣まゝものとして、父の言葉も聞かばこそ、父に睨まれ叱られると、直ぐに母親の懷中へ、泣き入つていたづらをする、與五郎も持てあまし、或日膝下に打ち招き……………、面をやわらげ言葉やさしく、

與五「コリヤ與三郎、能く聞けよ 與三「ハイ、お父上、何でござります、

與五「其方もモハヤ十三歳と相成れば、もの、差別は知りつらん、コリヤ、自体その方は何だと思ふぞ 與三「ハイ、何だとは何でござります、

與五「サア、汝は武士の悴か、また町人の悴であるか、そちは、そちの身分を存じ居るか 與三「ハイ、能く存じて居ります、私は武士でござります、神崎與五郎の悴

與三郎と申します 與五「ウム、然らばその方は武士じやな、

與三「ハイ武士でござりまする 與五「然らば何故武士らしくはいたさぬぞ、

與三「ヘエー、何でござります 與五「コリヤ、武士は人間の司であるぞ、士農工商と申してな、人間の龜鑑となるべきものじや、然るにその方の近來の行爲は何たる不行狀であるか、無益の殺生に釣魚をいたし、良からぬ朋友と遊び廻り、まだ夫れも宜いとして、武術讀書を忌み嫌ひ、良からぬことのみ覺え居る、夫れにて武士の子と云はるか、苟且にもこの與五郎は、今日まで行ひすまし、未だ世の嗤笑ひを受けしことはないのじや、然るに由なき其方あるため、世に面出しもならぬ身となつたも、單に

汝の不心得から來したことである、まことに汝は親を泣かす、不祥の子である、今に
おいて心を改めずば、その分には差し置かんぞ」と。

節「子の可愛さは、貧富の隔て、鳥けだものでも變りはない、不祥の兒とて尙さらに
不便さ彌まし與五郎が、噛んでくゝめる強意見、身にしみくゝと入るべきに……」

地「與三郎、ごつちかど云へば、ちつとボカンの方で、これだけ父に云はれても、些
ども徹へぬ、チャンとお辭儀をして居たから、意見は頭の上を通り越して了つたもの
と見える與三郎はボカンとして 與三「御父上、何を仰しやいましたのやら、私は些と
も分りませぬ 與五「何ッ、彼れほど申せし父の言葉を、汝や分らぬと申すのかッ、
與三「ハイ、分りませぬ、モウ一遍仰しやつて下さいまし、
與五「バツ馬鹿ッ、何と云ふ、汝は、タツ白痴た奴であらう、ア、斯かる悴を持ちし
は、余が一生の不幸である、汝ごとき馬鹿者を生け置いては、神崎の家名を汚す、な
まなか生長いたさんより、嫩の中に、根を断ち、葉を枯らし呉れる、切めては親の手
に掛けて……、馬鹿者、覺悟せいッ」と。

節「子の可愛さも家のため、先祖のためには代へられぬ、覺悟極めて抜き放ち、エム
ツとばかりに斬り付ける……」

地「刃の下を與三郎、かい潜りつゝ、右に左に逃げ出す『アレ御父上許して』と、聲を
かざりに泣き叫ぶ、されども父の與五郎は、覺悟極めしことなれば、刃先するどく斬
り付ける、父と悴が刃物のかねあい、聲聞き付けて駈け出る女房、夫れと見るより……
節「やれ待ちたまへ我つまよ、物に狂はせたましいしか、焼野のきいす夜の鶴、子を思
はぬものなきに、二人の中の悴をば、何の科かは知らねども、父が手に掛け殺すとは
地「夫りやア聞えぬと顫ひ聲、悴をかばい刃の前、立ちふさがつてコレ申し……」
マア「待つてと目に持つなみだ 妻「アレ旦那さま、これは何事でござりまするか、
マツ「くお待ち下さりませ、わけを聞かしてくゝ」といつかな動かぬ母親を、與五郎
キツと睨め付けながら 與五「ヤア邪摩立ていたさず、そこ退けくゝッ、エッ、退き居
らぬかッ 妻「イエくゝ、退きませぬくゝ、様子聞かねば何ぼうでも、妾は退きませぬ
ハイ、退きませぬわいなッ 與五「エッ、其奴は不祥なり、家のためには代へられぬ、

眞二つにいたし、この世の邊取らして呉れる、退けッ、

妻「イヤ退きませぬ、たとひごんなに御腹立あそばしたとて、現在血を分けた悴ではござりませぬか、ソレを、それを、現在の父の貴君が、手に掛けやうとは、あんまり惨酷い、く、わいな 奥五「エツ、ツベコベと事面倒なり、退かすばそちも打ち斬るぞッ 妻「エツ、アノ妾まで…………… 奥五「オーサ、邪摩立いたすと許しはせぬ……………、

妻「ハア、何故またその様に、御立腹あそばしますので、どうぞそのわけ仰せ聞かれ、納得させてさてその上で、殺すものならお殺しなさいまし、妾も神崎の妻、決してお止めは申しませぬ。

奥五「どうぞ様子を聞かしてと、又先に立つて兒をかばふ、その心根は女親、たゞ奥三郎が可愛さに、身を捨て、身を遁れ出る、手策どころは知られたり、奥五郎抜刀を振りかぶり…………… 尙も悴を睨め付けながら 奥五「コリヤ、能く聞けい、此奴がごとき愚鈍者は、生け置いては神崎の家名を汚すに極りある、神崎の家は御扶持は軽きも、素性正しき家系あり、馬鹿者の悴奴に汚されたとあつては、奥五郎、御先祖に對して申

しわけなし、この故に、嫩の内に根を断たうといたすのじや、サア分つたか、分ればそこ退けいッ、妻「イエ、退きません、モシ旦那さま、夫れはあまりに御短慮でござりまする、何ぼう奥三郎がおろかでも、殺してまでとは、あまりに惨酷い、どうぞお助け下さいまし、モシ旦那さま……………」と手を合す、

奥五「イヤ、殺すが却つて、親の情である、斯かる奴を生け置いては、神崎家を汚すばかりでなく、遂には主家の御名を損ねる、切めて親が手に掛けるは、彼のためには能き教化である 妻「イエ、妾は何と仰しやいまして、得殺しはいたしません、生あればこそこの世に生れて十三年、風邪一つ冒かす成人したもの、ごうまア及が向けられませう、モシ旦那、この子はごうともして妾が、析檻いたませうほどに、殺すことはお許されて……………コレ、手を合して拜みまする、コレ旦那さま、この通り、拜みまする、く、と。

節「子ゆえに迷ふ心は暗、妻は夫を伏し拜み、我子を庇護ふ真心は、實に親なればこそと哀れなり……………」

地「與郎五夫れでも、抜いた及は鞘へは入れず、グイツと與三郎を睨め付けながら妻に向つて聲荒く 與五「コリヤ、汝があまりに愛に溺れるから、斯やうな馬鹿者が出来たのじや、罪はむしろ汝にある、サア、何とする、返答せいつ」と詰め寄つて、虚云は「斬り付けん、氣配に妻はこゝぞとばかり、妻「マツ、マツお待ち下さいまし、貴君の御氣に召しますやう、妾がキツと仕立て上げますから、今日のところは幾重にも、お許されて下さいますやう、キツと妾が……、」

與五「ウム、然らば汝が馬鹿を矯正すと云ふのか、」

妻「ハイ、キツと身に引き受けまして…… 與五「たより無いぞ、愛に溺るゝその根性では…… 妻「何のく、妾も斯うと引き受けました上は、キツと貴君のお氣の召しまするやう、矯正してお目に掛けます 與五「ウム、許しがたき奴なれど、其方の言葉もあることなれば、今日は許して呉れる、疾く彼方へ連れ行けよツ」と叱り飛ばす 節「ハツとばかりに與三郎を、連れて女房はホツと息、引「抱へてぞ次の室へ…… 地「妻は悴を抱きかゝへ、自己の部屋へ入られたが、しげく我子を打ち睨め、ホロ

リと落す一滴 膝下に悴を引き寄せて 母「コリヤ悴、お前、お父親さまは恐いかへ、

與三「イエ、些ども恐くはありません 妻「エツ、恐くない!、

與三「ハイ、何一んともありません 妻「彼の及でお斬り遊ばしても……、

與三「ハイ、何ともありません 母「ソ、夫れが與三郎、情ないではないか、お前はお

父上さまが恐くなくては、仕様がなではないか、

與三「だつて坊は何とも無いわ 母「どうぞ恐がつてお呉れ、今も今お父上さまが、お前をお斬りなさるところ、お前何とも無いのかへ 與三「ハイ、何ともありません、

母「コレお前、何故ソんな分らぬことを云ふのです、今お父上さまからお前の生命、

この母がお預り申せしことを、お前何とも無いのかへ、

與三「ハイ、何ともありません 母「エツ、あれだけ母に口叩かせ、アノお前、何とも無いのかへ 與三「ハイ、何ともありません」あまりの事になみだも出でず、跡打ち成りて居られたが…… 母は心になみだぐみ 母「ア、アノ與三郎は、何たる阿呆なものであらう、母の心も知らずして……ア、この事良夫が聞かれたら、何として

「アツ、コリヤ、思案を仕直さではなるまいか……」と。
「ふかき思案に母親は、暮れの鐘をば合圖といたし、忤のためや家のため、オツ、左様してよろづの神々を、念じまゐらし與三郎の、業病平癒を祈りませう、オウ、左様じやと健氣にも……」

地「思案を極めた母親は、帯め直し良夫に内證、ソツと邸宅を立ち出で、坂越の山に鎮座します、武運の神の八幡宮へ、十八丁の畔道を、裾もほらく、駈け出す、子ゆへに迷ふ心は暗……」

さて此方は與三郎、市助を連れて、城下を流る、刈屋川は、刈屋橋の袂へ來ると、ハヤ七八人の大人小兒等が、岸邊に綸を垂れて居る……

母「エツ、マアこの忤は、何たる不孝な子であらう、コレ與三郎、どうぞこの母の言ふことを、心をしづめて聞き入れてお呉れ……よ。」

節「目に持つなみだ拭ひもあへず、母は聲をば勵まして、噛んでくゝめて説き聞かすけれども如何なる天魔の魅入りしか、馬耳東風に聞きながし、母が心から意見する、

言葉もうはの空にして……

地「與三郎、ポカンといたして居つたが、やがて思ひ出したやうに、チヨコと走り出で……與三郎椽側から庭に下り立ち 與三「オイ、市助、ちよつと來い、坊と魚釣に行かう、早く來い」と無心の体、母は之れを見て呆れて居る、ところへ市助が道具をもつて遣つて來る 市助「へエ坊さま、お伴いたしませう、

與三「オウ、來い、早く行かう」と。

地「市助伴ひテクと、素知らぬ顔に出で、行く、跡見送つて母親は、夫れと見るより小兒等は、目と目と見合つて 甲「ヤア、また神崎の阿呆が來居つたぞ、

乙「傍へ行つて叩られるな、此方へ行い、丙「相手になると、かつたいと棒打ちだぞ 丙「此方へ寄つとれ」と。

地「かねての腕白わがま、者を、知つて居るから小兒等は、敬遠主義を取りまして、知らぬ顔の半兵衛が、濟して綸を垂れて居る、與三郎は少しアの字、ソんなことは知らないから……小兒の傍へ寄つて來て 與三「コリヤ町人の餓鬼、そこ退け、己

が釣るのじや、そこ退け〜ツ〜ソ〜ラ來居つたど、

甲「ハイ〜退きます〜、オイ〜皆此方へ來い〜」と七八人は竿を擔いで向ふへ行く、與三「アハ、ハ、ハ、ハ、彼方へ行き居つた、コリヤ市助、矢張り坊は豪いじやらう、みな逃げて行き居つた」市助「フ、ンと鼻で笑ひ、

市助「坊さまはなかく〜お豪い、お山の大将でござります、

與三「ナ〜ニ、大將と云はれるほどの馬鹿でなし、ソんなでもないぞ」ソんなことは云はない 與三「サア市助、道具を坊に借せ〜、サア釣らうよ、お前も早く釣れ釣れ〜 市助「ハイ〜宜しうござります〜」と。

地「市助もお附合ひ、しきりと主従が綸を垂れて居る、綸を垂れてもば、垂れても、魚はチツとも釣れませぬ、釣れぬはずだよ與三郎は、釣に餌をば附けては居ない、市助はフ、ンと笑ひ 市助「坊さま、貴君そんなことをして居ては、一日か〜つたつて、釣れは仕ませぬせ 與三「何故じや 市助「何故ッてお前さま、釣の先に餌が附いて居ないじやございませぬか、盲目の魚でも釣れやませぬせ」だから馬鹿だと云ふのだと

少さな聲、市助もなかく〜人がわるい、知つて居ながら知らぬ顔、

與三「ソんなら餌を附ける、何故初めから餌を附けぬ、不埒な奴じや」と與三郎、ボカリと竿で市助を叩く 市助「ア、痛い〜、モシ坊さま、叩かなくなつて宜いではござりませぬか、 與三「エ、〜ぐづ〜云はずと早く餌を附けろツ、

地「餌を附けさせ與三郎、またもやう〜垂れて居る、けれども魚も知つて居るからめつたに與三郎の釣にはかゝらぬ 魚「ヤツ、また〜神崎の阿呆奴が、釣をおろし居つたぞ、傍へ行くな、あいつの餌は險香で喰へねへ、

魚乙「さうだ〜、何しろ釣を無鐵砲に引き上げやアがるから、困つちまやア、魚丙「下手な鐵砲打ちに睨まれた鳥のやうに、逃げる見當が附かないからお荷物だ、氣を附けろよ 魚丁「オット合点、近よるな。

地「モウ魚の仲間でも評判になつて居るから、なかく〜傍へは寄り附かない、だからちつとも釣れませぬ、與三郎はソロ〜氣儘を起し初め、 與三「コリヤ市助ツ 市助「へエ、何で…… 與三「何故釣れない、些ともかゝらぬぞ

市助「ソリヤお前さまがお下手なので…… 奥三「馬鹿を云へ、魚の方が同盟罷工を起し居つて……」ソンなことは云はない 奥三「こゝには魚が居ないのじやな、

市助「ナニ、左様なことがありますが私にはモウこれ十尾ばかり上げましたよ、

奥三「そりやア貴様のは死んだ魚じや 市助「串山戯云つちやア不可ません、この通り

ピン／＼刎ねて居ります 奥三「でも俺の鉤にかゝらぬと云ふは、魚めが坊を馬鹿に

たして居るのじや、怪しからぬ奴、眞ッ二つにいたして呉れる、夫れへ直れッ、

市助「ト云つたところで魚類は水の中でシヤア／＼、

奥三「コラッ、何を吐す、こゝは釣れぬ、彼方へ行かう／＼」向ふを見ると、先刻の

小兒が一つところに群集つて居るから、そこへ遣つて来て、

奥三「ヤイ餓鬼、そこ退け／＼ッ 甲「サア、また來居つた、ハイ／＼退きます／＼、

乙「オイ／＼彼方へ行かう／＼と」行つて了ふ。

地「奥三はまたもこゝで綸を垂れたが、何うしても吊れない、吊れない筈だ、魚仲間

でストライキを起して居るのだ、奥三郎はモウ腹が立つて／＼堪らない、されば小兒

等の行く跡を、追ひ廻しては邪魔をする、了ひには小兒等は、竿を擔げて、コリヤ堪らぬと逃げ出す……」

簡「我ま、氣まゝの奥三郎、小兒等の逃げたを打ち見やり、ニッコリ笑つて川の沿：

市助相手に 奥三「コリヤ市助、どう／＼餓鬼共は逃げ居つたな、

市助「そりや逃げます、坊さまのやうに、彼んなことをなさつては、トテも魚は釣れ

はいたしませぬ 奥三「アハ、ハ、ハ、ハ、やつぱり坊は豪いな、サア吊らう／＼」と、頻

りに綸を垂れて居る……」。

地「この時どこから來たともなく、一人の見すばらしき小兒、竹の先に綸を附けて、

奥三郎の下手のところへ腰をおろし、綸を水面へとサツと卸す、クツ／＼と引く、サ

ツと上げる、大きな鮎が上る、また綸を卸す、サツと上げる、鮎が上る、なか／＼巧

いものだ、奥三郎之れを見て、忌々しうて堪らない、已し、素町人の分際として、不

埒な奴、負けずに吊らうと思へども、なか／＼小兒には叶はない。

簡「浪が奥三郎は少し甘い、斯くと見るよりムシヤ／＼腹……」竿でピシヤ／＼、水

面を打ちながめ 奥三市助、何故魚が捕れぬのじや、コリヤ市助、早く坊に吊らせよ
市助「さう八ケましく仰しやつても、相手が魚でござりますから、陸で遊ぶやうな譯
にはまゐりません 奥三「其様なことはない、早く吊らせい」と無理を云ふ。

節「この時奥三郎が流した糸が、下手で釣つて居る小兒の糸に纏れ合ふ、アツと云ふ
間に奥三郎の鉤を、グツ／＼グツと引いたから、ソレ吊れたと奥三郎が、引き上げる
のと此方の小兒の糸を、くいと、同時になつたから堪らない、魚は水面を離れると、
糸を切つて逃げて了ふ、糸は因果に纏れて居る。

節「斯くど見るより奥三郎は、クワツとばかりに急ぎ込んで……竿をば捨て、走り
寄り、小兒の肩口むんづと掴み、怒れる聲に小兒を睨め付け、

奥三「ヤイ餓鬼、何だつて坊の魚を逃がした、サツ、何故坊の糸を奪つた、サア返答
しろッ」と敦圀く、小兒は掴まれながらに……、

小兒「ハイ、これは坊さま、どうぞお許し下さいまし、私が悪うござりました、どう
ぞお許し下さいまし」とペロ／＼ 奥三「ヤッ成らぬ／＼、坊が吊つた魚をば、逃がせ

しは汝の罪じや、サア、何とする、町人の分際として、武士に向つて手向いたすかッ
小兒「ハイ、決して手向はいたしません、どうぞお許し下さいまし、
奥三「イヤ成らぬ、武士に向つて慮外せし曲者、ソツ、夫れへ直れ、眞ッ二つにいた
して呉れるッ。

節「威猛高に奥三郎、脇差にと手を掛ける、キツと小兒を睨め付ける、そのありさま
は流石にも、武士の胤とぞ知られたり……。

地「小兒は大地に兩手を支へ 小兒「モシ坊さま、どうぞお許し下さいまし、私は坊さ
まに對して、慮外せしものでござりますから、お手討になりますは、覺悟の前でご
ざりまするが、家にはお年を召した父さまが、病氣の床に臥んで居ります、モシこん
なことを聞きましたら、さぞ泣き悲しむことでござりませう、夫れに私が、斯うして
この刈屋川へ吊にまゐりまして、吊り得た魚を市場へ卸し、夫れで親子が飢を凌いで
居るのでござります、私が今こゝで坊さまに殺されましては、父さまが明日から飢に
泣きます、モシ坊さま、わるいことは幾重にもお詫をいたしますから、どうぞお許

し下さいまするやう……。

節「涙と共に物語る、小兒の孝心情けある、血ある武士が聞くならば、さぞや悲しむことである……。」

地「けれども與三郎は、血もなげねば涙もない、譯分らずに威張るわんぱく、刀に反を打たせながら捕へし手を放さずに 與三「ヤイ小兒、迂奴、甘いことを吐し居つて、逃れやうといたし居つても、その手は喰はぬぞ、サツ、武士に向つて慮外せし曲者、その分には差し許さぬ、サツ夫れへ直れツ 小兒「どうぞお許し、お腹も立ちませうが何分にも親子兩人が助かりますので……どうぞお許し下さいまするやう……。」

與三「イヤ成らぬ、何と云つても承知ならぬツ、

小兒「ではこれほどお願い申しましても…… 與三「成らぬ、諄いわいツ、

小兒「坊さま、夫れは些と御無理でござりませう、

與三「何だ、何が無理だ。ナツ何が無理だツ 小兒「まことに申し悪いこととござりまするが、これは坊さま、貴君の方がおわるいのでござりまする、

與三「ナ、何と吐すツ 小兒「坊さま、お前さまが上手にお釣なさいますれば、糸を流せば、縫れるに極つて居ります、能きほごに糸をお上げなされるのが當然でござりまする夫れを、云はやお前さまからお纏れさしなさいましたので、私の方から叱言を申さねばならぬのでござりまする、けれども御馴染の坊さまでもありませんから、私の方で遠慮して、わざと差し控へて居るのでござりまする、夫れに、よしや私が悪いにせよ、お前さまはお遊びかたぐいのお釣り、私はこれで親子が食つて行く、糧を稼ぐのでござりまする、して見ればお見遣し下さいまして、お前さまのお耻にはなりませんまいかと思ひまする…… 與三「ヤツ、己れ、ツペコベと能く喋舌りやアがる、たとひ何と吐さうとも、己れを助けてなるものか、サツ、夫れへ直れツ、

小兒「ではこれほどお願い申しましても……、

與三「ならぬ、ならぬわいツ 小兒「エ、これはまア坊さま、お情けなうござりまする 與三「エツ、情けも糞もあるものか、覺悟いたせツ」と與三郎。

節「怒りに任して引き抜いた、一刀冠つて與三郎、覺悟いたせと呼はりながら、ズバ

リツとこそは斬り付ける……。

地「エイツと云ふなり與三郎が、無法にも斬り付けて来る、事こゝに至つては、萬事休矣、右の小兒は一段退り、打ち込む太刀を引ッ外し、ヒヨロメク奴を手許へ附け入り、小手をムンツと引ッ掴む、引ッ掴まれて與三郎、エ、放し居れど、もがくのを、左手に脇差奪い取り、サツと斬り込む太刀風に、哀れ與三郎肩口へ、ザクリとばかり斬り込まれる……。

節「自己から出で、自己に返る、因果應報是非もなや、アツとばかりに與三郎、血煙立て、……。

地「與三郎、ウワツと背後へ打ッ倒れ、そのまゝ、ウーンと息絶えて了ふ、斯くも見るより小兒は茫然……立ち寄つて一目見て、小兒「オツ、これは坊さま……オツ、お死になされたか、アツ……」と驚く、傍から市助目を斜いて、

市助「ヤイ小僧、已れ、何だつて坊さまを斬つたツ、サツお伴に立つたこの市助、旦那さまに申しわけがない、サツ、俺と一緒に來しやアがれツ、

小兒「ハツ、ハイ、私は斬るつもりではなかつたのでござりますが、ツイ及先が……りましたので……市助「及先が……つたで済むと思ふか、サア、良かれあしかれ、已れが下手人だ、サア、來せろツ」と引ッ立てる

小兒「ハイ、モウいたし方がござりませぬ、お伴いたします……市助「當然だ、

サア來せろツ」節「思はず……つた脇差の、及先に仆れた與三郎、武士の胤とは今更らに、恥かしき次第なり……地「この時そこへ駆け付けて來たのは、以前の小兒等、夫れと見るより口々に……「ヤア、こいつア豪いことを遣り居つたぞ、乙「見りやア三平じやないか、丙「オウさうだ孝行者の三平じや、可愛想だな、丁「親爺の三助に知らして遣らうか、甲「オウ、知らして遣れ、しかし阿呆坊が殺されて、明日からモウ逃げ歩行かなくつて宜い、嬉しいな、乙「嬉しい、サツ、親爺に知らして遣れ、丙「と小兒等は、地「三平の身を不便がり、知らせ遣れと口々に、彼方を指して駆け出す、節「屠所の歩みに孝子の三平、獄卒ならぬ市助が、固き監視を受けながら、神崎與五郎則休の、邸宅へこそは引かれて行く……。

地「悄悄々として門を潜ると、市助は庭前から、斯くと與五郎に申し上げ、聞いた與五郎則休は、流石にギョツと驚かれたが、やがて左あらぬ体にもてなし、市助に打ち向ひ「然らば市助、何か、その小兒に與五郎が斬り付ける、そいつを外して太刀奪ひ、アノ斬り込んだと申すのか 市助「ハイ、その通りでござります、まことに私お伴に隨きながら、何とも申しわけがござりませぬ」とペコペコ、

與五「イヤ、夫れは決して斟酌には及ばぬ、然らばもどく伴が切手に斬り込んだのじやな 市助「左様でござります、私がいろくお諫め申しましたが、何と云つても御聞き入れなく、斯やうなことに相成つたのでござります 與五「ウム、左様か、ヨシヨシ、然らば兎に角、夫れなる小兒を是れへ召し連れまゐる様…… 市助「へエ、宜しうござります」と、

地「やがて夫れへ引き据ゑました一人の小兒、キツと眼を注ぐと、眼光涼しく、鼻筋通り、色はあくまで黒くいたして、口もどがキリ、どべつて居る、衣服はぼろを纏うて居るけれど、心は清き真如の月だとも見入られる、小兒はわるびれもせず、庭石の

前に蹲踞る……「與五郎、キツと打ち見やり 與五「コリヤ小兒、余は汝のため殺されし、與三郎の父、神崎與五郎則休であるぞ 小兒「ハッ、これは旦那さまでござりますか、今日は圖らぬ粗忽から、坊さまを手掛け、何とも申し上げやうがござりませぬ 與五「其方與三郎を斬り、相濟まぬと思ふか」

小兒「ハイ、モウ覺悟をいたして居ります 與五「何ッ、覺悟いたし居るとは……」

小兒「ハイ、人を殺せば自己も殺されますと、心得て居ります 與五「ウム、能い覺悟である、宜かれあしかれ殺害いたせば、即ち下手人であるぞ 小兒「ハイ、モウ殺されるものと思つて居ります 與五「ウムしかし汝は何處の者で、名は何と申すぞ」

小兒「ハイ、私はこの御城下の近間の在所に住んで居ります、百姓三助の伴、三平と申します 與五「百姓の伴かッ 小兒「ハイ、三平と申します 與五「其方には兄弟はあるのか、夫れとも一人か 三平「ハイ、親一人、子一人でござります 與五「何ッ、親一人子一人とか 三平「ハイ 節「親が一人に子が一人、この三平を殺しなば、親なる人がさぞやさぞ、歎き悲しむことである、殊更容量すぐれし小兒、ハテ何として然か

るべき……」と地「與五郎ジツと思案をする、三平は覺悟の体、されどもどうやら心に掛ることでもあるのか、差俯向いて膝の上に、ホロリと落す一しづく、目さどく見止めた與五郎は……」キツと三平に目を注ぎ、與五「コリヤ三平、其方やア殺されるのが悲しいかッ、三平「エッ、ヘエー、私は些とも悲しいことはござりませぬ、モウ覺悟をいたして居りますから……」與五「然らば何故泣き居るか、三平「ハッ、ハイ、モシ旦那さま、死ぬる今期に三平が、お願い申したい義がござりまするが、お聞き入れ下さいませうか、與五「何事であるか、申して見よ、次第によつては、聞き届け遣はさぬこともないじやが、申して見よ、三平「ハイ、有りがたうぞんじまする、實は旦那さま、私はお父さまが可愛相でござります、與五「何ッ、父が可愛相だとは……」三平「父さまは、今病氣で寝て居ります、もとくお金も何にもありませんから、お醫者さまにかゝることも出来ませぬ、夫れで私が釣をいたし、市場でお金にいたしました、やうく薬を買って居りますが、夫れと思ふに任せませぬモシここで私が殺されましたら、父さまは飢死をいたします、私が夫れが哀しうござります、モ

シ旦那さま、この上のお情には、私がお手討になりました跡で、どうぞ父さまのお身を、よろしく願いまをします」と

節「云ふもおろく三平が、孝の心の誠實から、父を思ふの切なき胸、小きながらも張り裂ける、庭石に食い付き忍び泣き……」地「まことは天の恵なり、逐一聞いて與五郎は、これが誠實であるなれば、ハテ健氣なる心ばえ、不便のものやと思はれて、共になみだを注がれる……」節「血あり涙もある與五郎は、キツと思案をいたされる掾の側へと膝乗り出し……」地「ジツと三平を見おろされる、三平は差し俯向いたま、膝の上に、涙をぼろく滾して居る、この時夫れへ駈け込んだ、與三郎の母は半狂亂、夫の前へワツとばかりに泣きくづ折れる……」驚いた與五郎、呆氣に取られて居る、妻は聲を頓はせて、

妻「コレ旦那さま、私や口惜しうござります、エッ、口惜しい、ヨモく酷慘らしう、ア、も殺されたものぞいのう、サツ、敵はアノ小供、モシ旦那さま、早う敵を取つて下さいまし、エ、妻は口惜しいくッ」と身を頓はし、狂氣のごとく泣き

叫ぶ、與五郎は苦り切つて、

與五「コリヤ、不所存者、控へぬか、如何に女とは云へ、あまりと云へば慮外なり、控へ居れいッ」と叱り付ける……節「たとへ何と云はれやうと、我子の仇敵可愛の我子の仇敵、やわかこのまゝ遁すべき……地「眼を血走らした妻はブル〜、キツと三平を睨め付けながら、夫の方へ向き直り……」モシ旦那さま、旦那は與三郎を可愛うは思召しませぬか、コレ旦那さま、與五郎さま、子は可愛ゆうは、思召さぬかサツ、妾の目の前で、チャツと仇敵を取つて下さいまし……」。

與五「エツ、八ケましい、何事も余が胸にある、控へ居れいッ 妻「イエ〜、控へて居りませぬ、恨めしいはそれなる小僧、ムウ、一時も早う首切つて……」。

與五「エツ、こゝな慮外者、ヒツ控へ居らぬかつ、コリヤヤイ、能く聞けよ、假にも與三郎の武士の胤、神崎與五郎が子息じや、然るに如何に白痴者とは申せ、町人にして而かも自己より三歳も歳下のこれなる小兒に、及を奪はれ斬り込まるゝとは、一言聞いてさへ、余は親はづかしい、なまなか生あればこそ、今のごとき耻辱を受けるの

である、思へば與三郎は不詳な子じや、親不孝である、斯かる不孝者を未練らしく、ギヤア〜吐く慮外者、小兒の手前耻かしうはないか、馬鹿者奴ツ 地「窘められて泣く〜も、妻は悄悄起ちかける、與五郎キツと身を堅め、ヤレ待て女房と呼び止め……地「必らず泣くな、諦めよ、死したるものは、數多呼びたりとて、決して蘇生るものではない、清く諦めるが宜いぞ 妻「ハ、ハ、ハイ……」とシク〜涙……」。

與五「たとへこゝに生き返りしとて、所詮は家を汚すべき與三郎、今死するが却つて彼のため、佛果を得やう、其方も泣くだけの誠實を、彼が後生のため祈り遣れい、切めては夫れが供養である」と

節「口には云へど心では、肉親の切なさ、云はぬは云ふにイヤ優る、鳴く蟬よりも何とやら、泣かぬは泣くの初めとや、主人の心おし量られて、しばしは一座打ち濕る……地「與五郎は心に泣いて目に泣かぬ、大和魂奮ひ立ち、やがて妻に向はれて、

與五「サア、モハヤ何事も泣くな、浮世じや、成行じや、サアこの間に佛間に彼のため、一片の回向を唱へ遣はせよ 妻「ハ、ハ、ハイ、ハ、ハ、ハ、」妻はせぐり来る涙止めも敢

へず、ワツとばかり泣き崩折れる、與五郎キツと睨め付けて、與五「エツ、聞き分ないハツ早く行けいッ」と急ぎ立てる。節「母は詮方なくくも、獻敬きつゝ起ちあがり、佛間を指して、跡に心を置く露の、頼みがたきの浮世やと……」

節「跡見送りて與五郎は「三平に打ち向ひ、與五「コリヤ三平、三平「へエ、與五「其方、父が左程に心にかゝるか、三平「ハイ、只つた一人の父さまのことでございますから……」

與五「汝が死ねばさぞや歎き悲しむことであらうのう、三平「泣き死に、死んで了ふかも知れませんが、與五「しかし三平、假にも其方、武士を手に掛けた下手人であるから、トテも助けることは相成らぬ、覺悟のいたせい、

三平「ハイ、モウ覺悟はいたして居ります、與五「夫れへ直れい、余が手討にいたす、コリヤ市助、市助「エツ、與五「三平に繩掛けい、市助「へエ、畏まりました、ございます、すると三平が、三平「旦那さま、お繩は御免を蒙ります、私「はモウ覺悟をいたして居りますから、逃げも隠れもいたしません、與五「諾ッ、然らば繩だけは許し呉れる」

三平「では旦那さまお静かに……、節「覺悟極めては今更らに、首の座にこそ直りける……」

地「與五郎は一刀取つて庭に下り立ち、三平の背後へ廻る、市助手桶から清めの水を柄杓に汲んで、夏なほ冷き氷の刃、チラ／＼と注ぎかける、與五郎サツと水を拂ひ、背後に立つて三平の、様子にジ／＼と眼を注ぐ……、三平は眼を瞑つたまゝ、手を合し、西に向つて居座を直す、與五郎は静かに、與五「三平、我子の仇、覺悟は宜いかッ、三平「南無阿彌陀佛……、節「與五郎サツと振り上げし、刃の下に三平は、あわや細首丁と斬る、この世の暇取らんとする……」

地「覺悟極めては今更らに、わるびれたるさまもなく、三平ビリ、動かばこそ、武士にも増した丈夫のたましひ、與五郎何と思つたか、エイヤ……ッと打ち卸した一刀の、旨でもつて三平の頸首を丁と打ち、驚く三平市助を、尻目に掛けて椽の上……、

「聲張り上げて、與五「ヤア、我子の仇、百姓三平を打ち取つたり……ッ」と呼はつたり、この時三平眼を開き、

三平「這は旦那さま、何事でござります、與五「オウ三平……イヤ三平は今手討にいたした筈、今改めて名を附け呉れる、汝は今より神崎與三郎と改めよ、三平「ゲエー

ツ、ナ、何と仰せあそばします。奥五「百姓に似合ぬ据わつた膽力、武士も耻かしきとである、然るに我子與三郎は、如何なる天魔の魅入りしか、性來の放心者、汝の手に掛りしは、伴のために能き死時である、拙者は決して愛情に引かるゝものではない家のためには子の愛も捨てねばならぬ、拙者はこゝに汝を得、不孝が却つて僥倖となり、斯やうな喜ばしいことはない、コリヤ市助、祝じや、盃持ていッ、爺「花も實もある神崎が、取りまかないに三平は、嬉しさ恐さなつかしさ、庭石に額を撞り付けて：地「顔も得上げず、衣服の袖を噛み噛み、しばしは泣きに泣き入りしが、やうくに顔を上げ……「ジーツと與五郎を打ち眺め 三平「ダツ旦那さま、ソんなら大罪人の私を、お助け下さいませるのみか、アノ坊さまのお名をそのまゝ……。

奥五「オーサ、汝の膽力に感じ入り、命を助けて養子といたし、神崎與五郎の家を繼がせる所存である。三平「エツ、マツ勿体ないこと仰せあそばし、三平何と申し上げてお宜しいのやら、云ひやうがございません」

奥五「モハヤ今より余が伴の與五郎じや、サツ此處へ來い、父が、盃を取らせるぞ」

三平「ハツ、ハツ、有りがたうぞんじます…… 爺「嬉しなみだに三平は、椽の上へと立ちかける…… 地「どころへバタ／＼と駆け付けて來たのは、報知によつて父の三助、病みぼうけに足腰は起たないが、我子の大事可愛の三平が生命のきはと、息はづませて神崎の邸宅…… 門を駆け込み息切きと 三助「オツ、お願ひでござりまする、お願ひでござりまする」と、切なき聲に喚き立てる、子に似ぬ親のはしたなさ奥へと斯くと聞えると、三平ギリ、胸に釘、

三平「オツ、彼の聲は…… 奥五「與三郎、其方は次へ立てい 三平「ハイ……。

地「三平を次室へ遣り、市助に何事かを命じる、市助心得て命令られた通りにする、與五郎やがて三助を庭前へ引き入れる…… 三助は眼もくらみ、バタ／＼と駆け込んだが、足許危ふく、小石に躓き、ヒヨロ／＼と仆れる、

市助「オツト危ない、オイ老爺さん、確かり仕なよ 三助「エ……ッ」と三助ホット一息、四邊を見廻し 三助「オツ、これは旦那さまでござりまするか、私は三平の父三助でござりまする、エー、今日は何か伴が大それたことをいたしましたとやら、只今

承はりまして、駈け付けましたるでござりまする、どうぞ悴をお戻しを願ひまする
 奥五「コリヤ控へいッ 三助「へ、へッ 奥五「三平と云へる小兒、國禁を犯し、假にも
 武士を殺害し罪科、決して輕からざることである、然るに戻し呉れよとは何の痴言、
 三平は大罪人であるによつて、歸すことは相成らぬ 三助「ハ、ハア……こりやアマ
 アどうせう、何とせう、彼の孝行にして呉れる三平が、お上の成敗、お仕置を受けて
 モシカ死んだら、この三助は何となる、マ、コリヤ何とせう、ド、何うせうぞいッ
 節「老のくり言三平は、その場へワツと伏しまろぶ、心を哀れな次第なり、心を哀れ
 な次第なり……………」

地「三助はやう／＼に涙を拂ひ、苧殻のやうな手を合し「モシ旦那さま、コレでござ
 ります、悴をお助け下さいませねばお上のお法が立たぬと仰せあれば、何ともいたし
 方がござりませぬ、モウ諦めまする、この上のお願ひに、モシ旦那さま、老先ながい
 悴を先立たせ、明日をも知れぬこの三助、何樂しみに永生へられませう、成らうこと
 なら旦那さま、悴をお助けして私を……………この三助の白髪首と、お取り替へなされて下

さりませ、コレ、旦那さま、コッ、是れでござりまする』と

地「乾いて無き血をみなぎらせ、窪んだ眼からポロ／＼と、火のやうな涙を流す、哀
 れと思へど奥五郎は……………「知らぬ顔の情なき挨拶ぶり 奥五「イヤ三助、成らぬぞ、
 三平は下手人だ、たとへ親兄弟なりとも、代り首はお上の法度じや、叶はぬことじや
 下れ下がれッ 三助「へエ、ではお聞き濟みにはなりませんので……………」

奥五「諄いことじや 三助「ハ、ア……………ア、情けないことになつて來た、世の中には
 神や佛はないものか、アノ孝行な、親の口から云い難いほど、親切を盡して呉れる三
 平を、お上のお手に殺されるを、どうもア親の身として、見て居ることが出來やう、
 モシ、旦那さま、夫れもお許し下さいませねば、モウ私はこの世に望みはござりま
 せぬ、どうぞ悴とも／＼に、この首を切つて下さいまし、モシ旦那さま、今期のき
 はのお願でござりまする』と、顔をクシャ／＼にしてオロ／＼聲、

奥五「夫れもならぬ、罪なき其方を討ち取ることは、お上の掟が許さぬ、成らぬ、叶
 はぬぞッ 三助「ハア、夫れもお許され下さいませぬか……………」

與五「成らぬ、モハヤ三平はお上の成敗を受け、この世の人ではないぞッ 三助「ゲエ
ーッ、ハ、そんならモウ三平は……アノお成敗を受けましたのでござりまするか、
エッ……ウン……。」

地「あまりの驚きに三助、氣を取り詰めて、ウ……ン、ドスン、背後へ打ッ倒れ
て了ふ、ソレと云ふなり市助は、直ぐに水を注いで氣付薬を與へ、介抱さま／＼勞
したため、やう／＼のことに息吹き返す 節「子ゆへの暗に迷いたる、身は病氣の絶へや
らず、よろばいながら藻掻きに藻掻き……」三助は息を返したのが、いつと恨めし
さうに、しば／＼與五郎を打ち見やり 三助「コレ旦那さま、何故このまゝ殺しては下
さいませぬ、モシ、お恨みでござりまする、ア、この世の風に吹かれるからは、今期
に悴に一目、逢いたうござりまする」と泣く、

與五「三平が見たいか 三助「一目逢いたうござりまする 與五「然らば格別を以つて、死
骸のみは下げて遣はす、ソレ、そこにある薙の中、即ち三平の死骸である、逢ふて永
訣を告げ、回向をいたし遣はせよ 節「云ふ與五郎の心は千萬無量、我子を殺して目に

泣かぬ、武士ほど辛きものはない、まゝになるなら三助のよう、死骸に取り付き泣き
たい、去りとは無情ない世のさまや…… 地「心に泣いて與五郎は、顔をそむけて目
を瞑る、三助はオロ／＼聲、ニジリ寄つて薙に手を掛け……」コリヤ三平、ヒヨン
な姿になり居つたな、斯うと知つたら、何のマア、三度の朝夕食はずとも、お前を稼
ぎに出すのじやなかつた、コレ三平、堪忍して呉れ、みな私が悪かつたのじや、お前
一人は殺しはせぬ、追ッ付け父も行くほごに、三途の川で待つて居れよ」と
節「生けるものにも、言ふごとく、またさめ／＼と目になみだ、やがて薙を解く／＼
も、よく／＼見れば這は如何に、這は抑も如何に這は如何に、悴と思ひし死骸は、紛
う方なき與三郎の、屍であらうとは……。」

地「あまりの事に三助は、アツとばかりに驚かれ、屍と主人を見くらべて、頓に應答
もなかりしが……」や、あつて三助は 三助「モシ旦那さま、これはまさしく坊さま
の……自体こりやア如何になりましたので……。」

與五「云ふな、まさしく夫れは三平の死骸、引き取つて跡ねんごろに吊ひ遣はせ、何

にも云はず引き取れい 三助「へエ、ではこの坊さまのお死骸を…… 奥五「コリヤ三助、考勘ちがひをいたしては相成らぬぞ、それなる屍は、まさしく三平の死骸である、お上のお情によつて、親たる其方に、親であるべきに其方に、お下げ下さるのであるぞ、なッ、分つたか、分つたであらう、サア分つたら早く引き取れい 節「様子ありげな奥五郎の、言葉に早くも三助は、夫れとさどつて胴と伏し、生体なみだなきがらに、取り付き引き引きめ嘍り上げ……」

地「三助は重き目に 三助「モン旦那さま、ソンなら坊さまのお死屍を…… 奥五「分らぬ奴じやな、そりやア汝の悴の屍でないか、ハッ早く行けいッ 三助「ハッ、様子は夫れと分つて居りますが、ソレではあまりに勿体なうて、この三助の身に罰が…… 奥五「當ると云ふは我が鬮星、めつたに外るゝことはない、また野葬料は些少ながらソリヤこれを持つて行けい」と投げ出す金包……」

三助「エッ、そんならお金まで遣はされまして…… 奥五「三平の野葬料じや、また以後其方の身は、余において養い取らせるであらうから、心おきなく養生をいたせい

三助「何から何まで、厚きお恵み、有りがたうぞんじまする、この御恩は決して忘れはいたしませぬ 奥五「モハヤ用はない、引き取れい 三助「ハッ、有りがたうぞんじまする…… 節「よろぼう腰を伸ばしながら、起き上れども三助は、勿体なさに奥三郎の屍に手を恐るゝ、せぐり来るなみだは瀧津瀬……」

地「奥五郎は急ぎ立てながら 奥五「コリヤ三助、早く行かぬか、ソレその屍を抱へてコリヤ市助、助け取らせい 市助「へエ、宜しうござります」といたはしや、奥三郎の屍は蓮包にいたされて、病みほうけたる三助の、脊へガングに括し付ける、ヨロヨロ仕ながら三助は…… 奥五郎に一禮し 三助「では旦那さま、まかりまするでござりまする 奥三「オッ、懇ろに弔い取らせ 三助「ハイ、私の目の黒い内は、めつたに粗略にはいたしませぬ……」と起き上て枝折戸の口……」

奥三「ヤレ待て三助ッ 三助「ハイ 奥五「今改めて、汝に見すべきものがある 三助「へエ、何でござりまするな 奥五「外でない、拙者今日養子を迎へ取つたことである、たゞ一目だけ見せて遣はす能く見よ……ア、コリヤ…… 奥三郎、これへまわれい

與三「ハイ」ズーツと夫れへ出て來るは、まさしく悴の三平なれば、三助は二度びつくり 三助「オツ、わりや三平……ツ 與五「コリヤ減多なことを申すな、余が養子の與三郎、立派な振であらうがな 三助「ハツ、アツ、この三助、モウ何事も申しませぬ勿体なうて、く、コツこの胸が裂けるやうな 節「あまりの事の意外さに、胸の迫つてなみだも出でず、心に拜んで三助は、屍を脊負て起ち上る……。」

地「オ、お去らばでござりまする…… 與五「心しづかに三助…… 三助「ハ、ハイ

節「アレお父さま懐かしや、これがこの世のわかれかと、小さき心に三平が、見送るなみだ見返へる涙、一間隔てた此方から、アレ可愛の我が兒、與三郎、モ一度顔をば見せてたも、アレ情なの世のさまや、随分これから先の世で、因報に生れて……。」
レ與三郎と、聲を忍んでめ泣きに、ヨ、と一間をよろび出る、右に左に絆の綱、さしも丈夫の與五郎も、妻の心や哀な悴、思へばくこの胸が、裂けるやうなと眼を瞼り、五臟六腑を絞る、思ひ…… 節「折からサツと吹き嵐す、風に木の葉のひらくと、哀れはいと増さりけり……。」

◎萱野三平傳 切腹の段

節「忠臣は、毎に孝子の門より出づとかや……。」

地「忠と孝とを全うすると云ふことは、なみ大抵のことではない、忠に行けば不孝となる、孝に行けば不忠となる、忠も孝も仕了せんは、人間業では出来ぬこと、これが太平の事なれば、何、何でもないことなれど、一旦血書連判に、生血を捺せしその上は、たとへ兄弟親たりとも、堅く口外いたさない、約違へじと誓いし言の葉金鐵よりも尙は堅き、心の鍵をゆるめじと、こゝに哀れは三平が、孝ゆえ義にも行かれず、二十歳をこの世の名残、父の膝下に腹搔ッ捌いて義死を遂げる、萱野三平重次傳記の一節……。」

節「哀れな内にこれはまた、心を苦しめ身をもがき、義死を遂げたることなれば、その無念さは如何ばり、魂、この土にとまりつ、抑も討入のそのみぎり、亡魂はフワく吉良邸を、彷徨ひましたることなれば、大石ごのも哀れとぞ、思はれましたること

となれば、ソノ焼香の折からに、御自身手づから御名乗、萱野三平第一と、呼はりながら彼の魂の、冥福をこそ祈られた、名譽は今に仮名手本、勘平さんは三十に、なるや成らずに死なんしてと、淨瑠璃の文句に残りたり、歌の文句に残りたり……。

地「萱野三平重次は、攝州萱野郷の郷士萱野七郎左衛門の倅で、疾くに淺野家に支仕へて忠義の志厚く、御家騷動のありし時、早水藤左衛門とともに、百五十五里をわづかに四日半で駆け付けしほどの忠に厚きもの、彼の城内の會合に一味徒黨に加はつて、連判状へと血を捺して、城をわたして各自は、ちりくばらく退散する、三平は一旦は京都の山科に到つて内藏助から許しを受け、父の里なる萱野の郷へと引き退り、今日は江戸から音信があるか、明日は山科から召されるかと、首を延して待つて居る、

節「倅の心親知らず、健氣な覺悟のあるぞとは、つゆいさ、かも七郎左衛門、心佛に去年し、母がこの世を死去りつ、心ほごさも一入に、早く倅に嫁を取り、この世をわたろと樂隠居、月雪花を友となし、餘世安樂送りたし、今のぞみは是れのみと、

嫁を求めて金の草鞋……。

地「犬も歩けば棒に當るとやら、七郎左衛門とうく嫁を探し當てた、隣村の名士苗字帯刀を許された家柄、田宮幸兵衛の娘で、芳紀まさに十八歳、お國さんと云ふのを探し當てた、まづ行義學習として、ソツと邸宅へ連れて歸り、朝夕傍に置いて心を探し、夫れで三平に夫れとなく、ほのめかす、けれども三平はソンな浮いたことは更に思つて居ない、たゞ仇討の事のみを心掛けて居る、七郎「ア、國、お國「ハイ、七郎「私一寸隣村まで行つて來るから、跡を頼みますぞ、お國「ハイ、御緩りと行つてお出でなさいまし、七郎「三平に能く云ふて置いて下され……七郎左衛門は、そのまゝ出て行つて了ふ……跡にお國は思案がほ、節「良夫と頼む、且旦那、三平さまは彼のやうに、他處々々しうなさるのには、モシヤこの身が否なのか、夫れとも思はせ振をなさるのか、心にかゝることなりと、

地「お國は少なき胸にいろくくと、思ひに惱んで居る、三平は芝居するほどに好男子ではなかつたが、去りこて捨てた男子でもない、何處となくキツトした、女好のす

る顔、お國は好いたらしい殿御と思ひ、何歟につけて、痒ゆゑどころに手の届きさうに、能く仕へて居るが、三平ニヨリとも仕ない、

お國「モシ若さま 三平「同じや 親旦那さまはさう仰しやいました、留守になれば三平の許へまゐり、能く仕へるやうにと、どうぞ何なりと、御用を仰せ付け下さいまし 三平「左様か、別に差し當つて用事も無い、用があれば手を叩く、彼處へ行つて呉れ 三平「男女七歳にして席を同じうせずと申す、殊に父の留守中、女子との、同席心ぐるし、疾く部屋へ退つて呉れるやう……………」

お國「ハイ 三平「サツ早く、何をぐづぐづいたし居る 三平「ハイ……………ソソなら若さま、貴君は妾のやうな不束者は、定めしお否なのでございませう、

三平「何を申す 三平「お否とあればいたし方がございませぬ、妾も父の膝下を放れるときから、二度と父の家の闕は跨げぬと申うしまゐりましたから、今更らのめくく歸ることも出来ませんから…………… 三平「コリヤ〜國、何を申す、其方の申すこと、拙者には少しも分らぬが…………… 三平「ハイ、分らぬば夫れでよろしうございませぬ、妾

もモウ覺悟を極めて居りますから…………… 三平「いよ〜もつて怪しからぬ、覺悟を極めるのどうのと、ソソなことは云はぬが宜い、サア、チャット部屋へ下つて呉れ、拙者、これから、少しく書物をせぬければ相成ぬから……………」

お國「ハ、ハイ……………」ワットその場へ聲を揚げて泣き倒れる…………… 節「様子知らねば三平の、その驚きは如何ばかり、されど悟りの早き三平、さては父上の計ひで、拙者に妻をば聖らさん、御心なるか有りがたや、左はさりながら今の身は、明日にも報知あるならば、江戸へ乗り込み亡君の仇、吉良の素首刎ねばならぬ、その大望ある三平に、どう妻帯がなるものぞ、許させたまへ父上と、

地「三平泣き入るお國を勞はり、途方に暮れて居る、どこへ父の七郎左衛門、ヌーツと這入つて来て 七郎「オウこりやア國、何をした、何を泣き居るぞ」

お國「ハイ、これは大旦那さままでござりまするか、妾は泣しうございませぬ、生きて甲斐なき身でございませぬ…………… 七郎「フーム、生きて甲斐なき身とは忌はしい、何ぞした、ハ、ア、さては三平、また其方酷めたな」

三平「これは滅相な、何で私か……七郎「然らば國が何故左様なことを申すぞ
 三平「ハイ、夫れは何でもござりませぬ、部屋へ退つて居れと申したのみでございま
 す 七郎「何故左様なことを申した 三平「へエ、七郎「へエではない」

三平「へエツ 七郎「余が眼識によつて、將來は、汝の妻といたさんため、今斯く手許
 に置くお國、何故左様な情ないことを申すぞ 三平「へエ、拙者は妻など娶る心は微
 塵もございませぬので……七郎「其方は無くともこの親の七郎左衛門は、見どころ

あつて貰ふのじや、傍に置いて置け 三平「へエー、これは困りましたな、男女七歳に
 して席を……七郎「エツ、詰らぬことを申すな、自己の妻を傍に置くに、何の不思
 儀……三平「お父さま、私にはまだ妻を娶るほど、身の落着が着いて居りません
 から、マアしばらくはこのまゝ打捨て、置いて下さいまし、

七郎「イヤ夫れは不可ぬ、不可ぬぞ 三平「エー、不可ませんか 七郎「不可ぬ、拙者
 もモハヤ老る年波、殊に先年妻に死去たれ、ゲツソリト老衰んだ、頼りとするは其方
 のみ、一時も早く萱野の家を治め、余に安樂をさせ呉れるやう、これが今でも心の

である、去を父の意に隨はぬは、甚だもつて不幸でないか、

三平「へエー、夫れは御道理でござりますが、今日御意に應すと云ふことは……

七郎「成らぬと云ふのか 三平「ハイ……七郎「困つた奴じやの、然らば何か親が胸
 を痛めしことも、我意のためには顧みぬと申すのじや。

三平「マツ 全もつて左様の義ではございませぬが……

七郎「ソんなら何故余に逆ふのじや 三平「別に逆ふと云ふわけでございませぬが……

七郎「ソんならウンと云つて承知を仕ろツ 三平「ごうも困りましたな」

七郎「否だと云ふのかツ 三平「ハツハイ、まことに恐れ入りまするが、三日だけ勘考
 へさして下さいまし 七郎「さうか、三日の間考るのか。

三平「ソノ上にて御返事を申し上げますソんなら 七郎「三日だけ猶豫を呉れるから、
 さつと返事、せぬければ相成らぬぞ 三平「ハイ 七郎「お國、サツ、此方へ來い、其方
 の身上はこの七郎左衛門受合つたことであるから、安心いたせ、決して泣くことはな
 いぞ お國「ハツ、ハイ、大旦那さま、有りがたうぞんじます、七郎左衛門はそのま

お國を連れて部屋へ引き退つて了つた……。

三平「跡に三平一思案、とても夫婦となるとても、添い遂げられぬ縁なれば、キツバリ断り云はねばならぬ、左は去りながら言ひわけを、ハテ何として宜かるべき、打ち明けられぬ大望を、打ち明けねば父上は、ヨモヤ御承知あるまいに、ハテサテ困つたことである……。」

地「三平大きに弱り切り、何として宜かるべきと、深き思案に呉れて居る、待たぬ日脚はなか／＼早く、ハヤ日限の三日目となる、表面か、飛脚が一人、御書簡……、投り込んで行く、手に取ると内藏助よりとある、

三平「オツ、これは太夫どのより、御書簡……押し戴いて讀み下す文言は、來る二十日元録十五年頃には、同土小野寺重内、潮田又之丞同幸右衛門江戸へ差し下るべき筈につき、御身も同道然るべしとある三平之れを見ると、その喜び如何ばかり、天へも昇る心地して、直ぐに返書を認めて、さて父七郎左衛門の前へ両手を突く、

七郎「オツ三平思案のいたせしか 三平「ハイ、夫れについて御父上、突然ながら私

にお暇を下し置かれまするやう……。

七郎「何ツ、暇を呉れ、妙なことを申すな、ウンニヤ、如何にも暇を遣はさぬでもない、が何故左様なことを申すのであるぞ 三平「ハイ、實は舊友と、かね／＼頼み置きましたる仕官の義、這度首尾克く相整ひ、來る二十日に、江戸へ來れとの事でございます、拙者も出世の端緒でございますので、どうかお許し下さいまするやう、

七郎「フーム、然らば其方新に仕官いたすと申すのか、

三平「ハイ 七郎「アノ二君に仕へるのかツ 三平「ハイ…… 七郎「たつた一人の親を捨て、も、其方や仕官、出世がいたしたいのか 三平「ハイ…… 七郎「コリヤ三平、そりやア考へが間違つて居るぞ 三平「ヘエー 七郎「忠臣は二君に仕へすと云ふことが

あるが、其方知つて居るか 三平「ハイ、能く存じて居ります、しかしモハヤ淺野家は滅亡いたし居りますから、さし支へはなからうかと思ひまする、

七郎「黙止れ、眞實の武士は、たとひ主家が衰へやうと榮えやうと、また敗亡やうと主君はたつた一人のものである、二君に仕へるは武士ではないぞ、

三平「へエー 七郎「次に孝の道じや、忠臣は孝子の門より出づと云ふからは、今汝が
ごとき不忠な考へにては、孝の道を説いたりして、分るまい、が、親としては云はね
ばならぬ、たつた一人の親を捨て、までも、出世を願ふ理由が何處にある、たとひ九
尺二間の棟割長屋たりとも、子は子として道を親に盡してこそ、孝の道と申するもの
されば其方の暇を願ふは、第一主君に不忠にして、第二に親に不孝となる、夫れにて
も汝や苦しうないと申すのかッ」と、

節「理義を説いたる父の言葉、眞實表に現はれて、有りがたしとも尊しとも、いはん
かたなき嬉しさは、身にヒシシと徹ゆれど、たつて願いを立てざれば、故主へ中義
立ちがたしと、心を極めて三平は……」

地「イヤお父上、だん／＼との御論し、能く分りました、しかし武士たる
ものが、一旦約束いたせし上は、今更ら變かへなり難し、約を違へては武士道が立ち
ませぬから……」 七郎「イヤ夫れが悪いのじや、武士道とはな、左様な間違つたこと
のために、義を立てぬく道具ではないのじや、義を捨て、親を捨て、も介意はぬと云

ふ、その周旋人は何人であるぞ、云つて見ろッ、

三平「ハイ、夫れはソノ、何でございます、大石内藏助さまでございます」

七郎「ナニッ大石どのとな、ウム、大石どのの器量人、決して事理の分明らぬ方では
ない、家を捨て忠を捨て、二君に仕へよとはヨモ云はれまじ、拙者から一書申し入れ
キツと談じ込むことであるから、江戸入は思ひ止まれ、決して許さぬぞッ」と、

節「様子知らねば七郎左衛門、願ひを許さぬのみならず、妻を迎へて家を繼ぎ、後世
安樂を祈れよと、父の意見にやア眞實が含む……」

地「生れてやう／＼十八歳から、今年二十三歳になるまで、まだ父や母に、孝養を盡
したことのない三平、江戸常府の身には一日も父母の膝下に子としての道を盡したこ
とがない、三平は常に之れを残念に思ふて居る、ことに去年の春、江戸の騒動の早打
の道々に、死去したまひし母の葬式に逢ひ、唱名の一つも得上げぬ不幸なもの、母を
亡した父の、心細さは一入にて、この身を使りに思はれるも道理、父の心になつて見
れば、子として夫れを振り切ることは出来ぬ、とは云へ一旦約せし同士の手前、この

まゝ、義を捨てるは武士として、まことに耻べきこと、死するより尙ほ辛いことである。義に赴かんか不孝となる、孝に父に隨かんか、即ち不忠不義と世の嗤笑ひを受けん、ア、何として宜かるべきと、

節「心は二つ身は一つ、さしも忠孝の道堅き、凝つては石のごとき魂も、現今に迫る身の難儀、ハテ何とせん斯くやせん、心は千々に亂れ立ち、思案に盡きて我が部屋へ、轉び込んではどうと伏し、思はず咽ぶ男泣き……。」

地「父も大島出羽守に仕へし武士、斯うく斯うと大望を、打ち明けたることなればヨモ否とは仰せられまじ、喜んで東の旅を許されやう、左は云へたごひ親兄弟、妻子にまでも堅く秘すと、誓約いたせしことなれば、今更ら夫れを口外いたし、モシヤ仇敵に知れたるときは、太夫をはじめ忠義の武士、この身ゆへに破滅を招き、亡君の御耻辱はいよくもつて重なるわけ、これを思へばなかくに、たとい死すとも口外出來ぬ、左は去りながら今の身に、父の許さぬ旅立を、無理に出で立つるときこそは、義は立ち、忠は盡せども、子として大の不孝となり、父がこの身を如何ばかり、恨

みたまふことである、夫れを思へばなかくに、この身の罪のおそろしさ、これも成らざるそのときは、ハテ、この三平の身は何となる……。」

三平「ア、く、この三平の武士道は、モハヤ廢止つたことであるか、天にも地にも捨てられた、この身は如何に腑甲斐なきものであるか……ッ」と齒を喰いしばつて恨み泣き、心の中を推しはかり、哀れいや増すばかりなり、

節「掻き亂れたる玉の緒を、切つて義を立て孝を立て、至らぬ罪を詫せん、甲斐々々しくも三平は……。」

地「覺語を極めた三平、やがて孤燈の下にサラ〜と、書き認めたる遺書二通、蒲團の下に打ち敷いて、西に向いて手を合し 三平「亡君、亡君さま、この三平はまことに不幸なものにござりまする、亡君の御遺志を継ぎし武士と、もに事を圖り、今や江戸入と云ふ間際に至つて、孝のために忠を全うすること出來ず、諸士に先立ち御傍へまあり、至らぬお詫をいたします、何卒お許し置かれまするやう……二つには、お父上、委細のことはこれに書き遣してございますから、不孝の罪は幾重にもお許し下